彼女は人を喰らう

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女は人を喰らう

【Ｎコード】
Ｎ８１６０Ｗ

【作者名】
榊

【あらすじ】
追放世界で育った一人の異能は、退屈な世界から脱出する事を選んだ。数多に広がる世界線の中、彼女は何を目指すのであろうか・・・。
黒の古書の意味とは・・・？
物語は残酷にも一人の少女を舞台へと送り出す。

注意、オリジナル要素の高いモノと成っています。お嫌いな方はご注意を。

1話・脱出と出会い（前書き）

主人公の説明は追々書きます。

1話・脱出と出会い

――彼女は、退屈を嫌う――

閉鎖された世界、神々はそこをこう呼んだ。【追放世界】と、そこには魔法も異能も神の奇跡も存在せず、人がただ死に向かって生きている。その世界には、既に何もなかった、絶望する事も諦め、明日をどうやって生きるかだけを考えて働くだけの死んでしまった世界。故に人は神を忘れ、神は人を忘れた。

しかしそこに産み落とされた一人の異能が居た、誰も知らない彼女と彼女の屋敷、彼女はニヤリと笑うと手に持っていた黒い表紙の古書を大事そうに鞄につめた。肩の辺りで切り揃えた後ろ髪にパッツンとこちらも切り揃えている前髪、揉み上げの部分の髪の毛だけは異様に長く伸ばされており、その髪の毛は胸の下辺りまで伸びていた。

「準備できたのかい？」

身長も小さな少女は、静かな声を発した。その問いに答えるのは屋敷に仕える者、その者は顔に布を巻き、白い着物を着ている。この屋敷では彼女は神様扱いなのだ。

神を穢さず、神に穢されず。と言う訳だ。

「はい、牡丹（ぼたん）様。牡丹様に教えていただいた通りに作らせていただきました」

「ありがとうね、僕も準備はできているよ」

彼女が着る着物には梅の花が書かれていた。着物を彼女は脱ぐ、そ

の下から現れたのはボーイッシュな洋服であった。しかし肌を見せたくないと言うように長袖長ズボンである。

「この格好も、どうも落ち着かないね。やはり僕は着物の方が良いのだけれど」

「こちらでございます」

彼女は諦めきれず羽織をその上に羽織った、灰色の大きな着物だ。彼女はニッと笑い案内されるがままに歩いて行くそして彼女が到着すると多くの者が頭を下げた。その光景に少し顔をしかめながら彼女はその中心にある何かを見つめる。鏡のようだが、その鏡には大量のお札が貼られている。

「では、僕は今日を持ってこの世界から脱走する。皆元気でね」

後悔はない、あるのは此処にある本を後数冊持って行きたかったと言う思いだけであろうか。彼女が鏡に触れると、まるで水面に波紋が広がるように脈打った、その中に彼女は少しずつ消えて行く。バサバサと、羽織った灰色の着物が風に靡いた。世界が初めての感触に驚いているのであろうか、彼女は楽しそうに笑うと一気に鏡の中にその身を投じた。

――――――――

――――

――

「・・・さて、いきなり荒野に出るとは、僕も予想外であったね」

彼女が出た所は荒野であった一面砂地である。何処を見ても、何時

までも同じような時間が過ぎて行く、コレでは勢い良く出て来たのに失速してしまうではないか。彼女は鞄から黒の古書を取り出して、1つの文章に病的に白い指を這わせた。

【――男は、龍を殺し、屍を使役した、ソレは、魔女狩りの頃のお話である――】

「龍？そんな物に僕が出合ったら死んでしまうじゃないか」

そこら辺の主人公よろしく、特殊な能力は・・・一応あるが、驚異的な再生能力も、剣が達人級でも無く、銃も持っていない。腹を裂かれれば容易く死ぬ至って普通の人間だ。明確に言うと半人だが、そんな事はどうでも良い。今の私はただの人に近いモノなのだから。

「・・・お前、こんな所で何をしているのだ？」

急に話しかけられる。振り向くとそこには見覚えの無い金髪の少女が立っていた。自分と同じ位の身長であろうかその少女はボロボロのローブに身を包み、その近くには人形のようなモノがケケケッと笑っている。何処からどう見ても異能者か魔法使いです、本当にありがとうございました。

「お前だ、耳が聞こえないと言う事も無いだろう？」

「あぁ、僕？僕はただの孤児（みなしご）さ」

「・・・ソレにしては、良い物を着ているようだが」

「うん？まぁそんな事どうでも良いじゃないか、それよりも質問しても良いかな？」

「何だ」

「君は、魔法使いかい？それとも、吸血鬼かい？」

少しの沈黙が流れる、目の前の金髪少女はその手に魔力を溜めたようだ。私の腹の中で何かが蠢く。落ち付け、彼女は今のところ無害だ、そう自分に言い聞かせた。

「もし・・・そうだと言ったら？」

「僕を拾ってみないかい？」

「・・・・は？」

少女は、気の抜ける様な声を放った。一方牡丹の方はニコニコと笑っている。金髪の少女は完全にやる気がうせたと言うような顔に成っていた。牡丹は満足そうに笑っている。

「私が怖くないのか？」

「僕は君よりももっと怖い物を見た事があるよ」

「ほう・・・それは？」

「それは内緒かな、君には教えられないよ」

牡丹はニヤリと笑った。年相応の笑顔ではなく、世界の裏に関わった者の笑みであった。話しかけた吸血鬼としては何だこいつ状態であろう。そんな事お構いなしに牡丹は交渉を続ける。

どうせ魔法使いでも吸血鬼でも１０００年単位で生きるのだ、孤独な旅は嫌だろう？と、まるで悪魔の様な囁き、悩み始めた吸血鬼に彼女は飴玉を差し出した、言う所の買収である。

「君にとって僕と言う存在は何時か、有利な物に成ると思うよ？」

「・・・しかし、所詮は人間だろう？寿命は知れている」

悲しそうな目をする彼女、それを牡丹はケラケラと笑った。まるで自分には縁の無い話の様に。

「僕はね、鬼子、異端産まれなんだ。確かに腹を裂かれてしまえば簡単に死ぬが、寿命は無駄に長いよ」

「・・・お前、半妖なのか？」

「詳しく言うと微妙に違うけれどね」

怪しむ様な顔をする金髪の少女に彼女はケラケラと笑い掛け続けている。そんな彼女を見て遂に金髪の少女が折れた様であった。ため息を吐くと好きにしろと言い、彼女の横に並ぶ、つまり、一緒に行こうと言うお誘いである。

牡丹はニヤニヤと笑いを浮かべると。

「ツンデレめ」

と、彼女に告げた、しかしこの時代、まだそんな言葉が存在する筈も無く、金髪の少女は頭を捻る。ツンデレと言う言葉はまだこの時代には無い筈の言葉であるし、金髪の彼女には理解が出来なかった。

「そう言えばお互い自己紹介がまだだったね、僕は一目橋・牡丹。牡丹が名前だよ」

「ボタン？変わった名前だな。私はエヴァンヴェリン・A・K・マグダウェルだ。好きに呼ぶが良い」

「極度のツンデレ」

「ツンデレとは何だ・・・何故かこう・・・馬鹿にされている気が・・・」

はは、嫌だなぁ（棒読み）と、彼女は光の無い目で笑った。その様子が今の状況ではとてもシュールに見える。何せ此処に立っているのは吸血鬼と半妖だ、本来出合えば血の気の多い種族同士潰し合うのだが、彼女達は何かが違うらしい。
一言で言ってしまうのなら誇りの有無であろうか、彼女達はしっかりとした誇りが有るし、目標もある。そんなに野蛮ではなかった事が救いだ。

「そっちのお人形は？」

「コイツはチャチャゼロ、私の従者だ」

「ケケケッヨロシク頼ムゼ」

「所で、吸血鬼が日光に当っていますが、いつ灰に成るの？僕は少し楽しみだよ」

「え！？心配ではなく楽しみなのか！！？」

牡丹の言葉に自分の身体を抱きしめるエヴァ、少し震えているようにも見える。牡丹はそれを笑いながら黒の古書をこりだした。細かい文字が余す所なく書かれているどう見ても童子向けではない本、その本をパラパラと捲る。ページ数１０１２ページ、【一人の養子】と言う項目に指を這わせると、彼女の口元には自然に笑みがこぼれる。

少し、少し違うが、この世界線でも私は【異物】として扱われている。そう、全ては定められている事、私が体現しようとしている事。

「・・・？来ないのか、ボタン」

「あぁ、行きますよ。２人と１個の旅も楽しそうですし」

「・・・一個テ俺カ？」

こうして、確かに物語はひっそりと別の世界線でなぞられた。【異物】は、笑いながら少女の後を付いて行く・・・・。

1話・脱出と出会い（後書き）

駄文で申し訳ない。

登場人物簡単説明

名前・一目橋　牡丹
読み・ひとつめばし　ぼたん

性別・女

外見・少女、髪の毛は基本おかっぱで前髪もパッツン。しかし揉み上げ部分の髪の毛だけ長く伸ばされており、胸の辺りまである。黒髪黒目で肌の色は白い。

一人称・僕、猫を冠っている時は私

種族・半妖に近い何か

プロフィール
この世界に最強なんて存在しないと思うよ。あと、僕のキャラクター的にB，A，Dの彼女とキャラクターが似ていると思う人も居ると思うけど、性格モデルが彼女だから・・・と、言うしかない。

以下ネタばれ？

―――――――――――――――

ネタばれ←
鬼孕みと言われる異能力者、だが寿命以外は普通の人間と変わらず。腹を裂かれれば死ぬ。腹には何かの術式が有るが、彼女がその気に

成らなければ目視出来ない。
基本、魔法は使えない・・・らしい。

登場人物簡単説明（後書き）

こんな残念な子ですが、よろしくお願いします。

2話・転生者のお話（前書き）

こう・・・ヌルヌルと

2話・転生者のお話

――彼女に、肉体労働は向かない――

金髪の吸血鬼、エヴァと旅を続けて早1ヶ月が過ぎた、その1カ月は運が良かったのか襲われる事も無く、街の人が私の恰好を見て少し珍しそうな顔をするだけである。何せ追放世界から持って来た着物を羽織っているのだ。今の時代にこんな物を着ている者は居ないだろうし、着物と言うモノを知らない筈なのでしょうがない。

「エヴァ、僕はもう駄目かもしれない」

「なっ何がだ!?何処か具合でも悪いのか!!?」

「先生、本が、少なくとも10冊くらい本を食べたいです」

「よし!本だな!?・・・て、馬鹿!!食べるのか!?その前に食えるのか!!?」

「ふふ・・・僕はね・・・本こそが本当の栄養源なのさ」

ベッドの上でグダァ、と横に成っている白い肌の少女、その髪の毛は依然と変わらずの黒髪おかっぱで揉み上げだけ長い。退屈と言わんばかりに彼女自身の鞄を漁るが、その中に今の退屈をしのげる物も無く、落胆のため息を落とした。

「残酷な運命の神は僕を殺す気かな・・・」

「いっ生きろ!本なんか喰っても美味くないぞ!!」

「・・・はっ本の味も解らぬ弱者め！」

「味！？」

理解の内を超えていた。軽く禁断症状に陥っている牡丹だが、何故黒の古書を読もうとしないのか、それを不思議に思うエヴァであるが彼女なりの理由が有るのであろうと考えると、何か自分が持っていたか探す。

すると、エヴァのバックの中から一冊の赤い表紙の本が出て来た。エヴァはその本を一体何処で買ったのか、あるいは拾ったのか覚えていない。最近は教会の連中も追いかけて来ないし、奪ったと言う線も無かった。

その本をチラつかせると、ピクピク反応する牡丹。

ススス・・・
ピク
ススス・・・
ピクピク

少し、面白かった。

「ほら、何かあったぞ」

「ッ！！」

まるで飢えた猛獣のようにその本を奪い取り読み始めた。アレで食べているのであろうか・・・。

「・・・魔導書じゃないか、コレ」

「早！！」

「は、たった１０００ページ、僕の前では２ページ分に過ぎないよ！」

手元でその分厚い魔導書を遊びながら彼女はそれの表紙を眺めた、そして苦い顔を浮かべる。これも運命をなぞる者の宿命だろうかという具合に彼女はそれを忌々しそうに見る。

【死者操術と死者甦生】、つまりは死者を操る方法が書かれている物であった。しかし、彼女にはそんな派手な魔法は使えない。彼女には魔力など微塵も無いに等しいのだ。

「忌々しい運命とは・・・良く言った物だね」

「？」

「ああ、気にしないで良いよ。僕は独り言が激しいから」

「あ、確かに」

１か月の旅で彼女は確かに独り言が多かった。龍種を見てコレが龍かぁ、これに乗ったのかな？などと言ってみたり、魔法を初めて見て僕も使えるかなぁ、等と、色々ブツブツ言う事が有る。

安宿の外が騒がしくなった、何かの祭りでも始まったのかと思った牡丹であったが、彼女の首元をエヴァが掴み部屋の奥へと引っ込める。

「・・・魔力の感触が有る。コレは・・・間違いなく魔法使いだ。お前は非戦闘員だろう？クローゼットの中にでも隠れていろ」

「あぁ・・・そうしたかったんだけれどねぇ・・・」

何かおかしな声を返して来る牡丹にエヴァは振り向く、そこにはギラリと光る紅い瞳が有った、彼女の普段の眼の色は黒だった筈だ。しかし、今は獣を思わせるほど鋭く、恐ろしい殺気を放っている。

「エヴァ、世界には変わった魔法使いが居るんだよ。他の世界から産まれ変わったりした者がね」

彼女は自分の腹を押さえながらニタリと笑った。何故腹を押さえているのか、エヴァには解らない。彼女は羽織っている着物はそのままに、中に来ている服の腹部を少し持ち上げた、そこには何かの魔術式の様な文様が浮かび上がっている。白い彼女の肌に、黒々と。それはやがて紅い光りを放ち始めた。

「エヴァに教えておかなければならない」

「な、何だ？」

「僕はね、世界で1人だけしか覚醒しない異能を持っているんだ。【鬼孕み】と言ってね、自分の肉体に鬼を降ろして、一時的にその鬼を具現化できる」

彼女の術式から、黒い煙の様な物がスルスルと伸び出した。そしてソレは小さな人型を作って行く。エヴァや牡丹よりも少し小さいその人型は、形を得るとニヤリと恐ろしい笑みを浮かべた。

≪お・・・ねぇ・・・ちゃ・・・≫

「おはよう、ご飯だよ。【柘榴(ざくろ)】」

黒い髪に金色の瞳、まるで獣のように鋭い瞳孔。何も着ていないその幼女に彼女は自分が来ている灰色の羽織を着させた。ニコニコと笑い続ける柘榴を見て、エヴァは混乱している。

コイツは何処から出て来たのだ、何故牡丹の眼の色が変わったのか。理解できなかった、理解してしまったら、自分はどうなってしまうのか解らなかった。外から近づいて来る魔法使いの気配、それに反応するように柘榴はドアに近づいた。

≪お・・姉・・・ちゃ、食べて・・・良い？≫

「えぇ、最近空腹だろう？それは不味いかもしれないけど、腹は膨れるだろう」

≪わーい！≫

「ばばばッ牡丹！！こいつは何なんだ！？少し前にお前の言っていた鬼か！！？」

「え？う～ん・・・うん、鬼だよ」

そんなに驚かなくても、エヴァだって吸血鬼、鬼じゃないかと言いながら彼女はケタケタと笑ったが、ソレは問題ではない。ノーモーションで上位級の鬼を召喚したのだ、しかも彼女には魔力が無い筈・・・。

「エヴァ、言っただろう？僕は【鬼孕み】、この世に1人しか産まれない。上から数えた方が早い程度の異能力者なんだよ」

だが、代償もある。鬼を召喚する事で、鬼の感じる痛覚などが身体にリンクしてしまうのだ、柘榴が切られると痛いし、彼女が死んでしまえば牡丹も死ぬ、それが対価であり代償だ。鬼の追う苦痛は、全てじぶんにフィールドバックする。

扉が開きかかった瞬間に、柘榴は大きな口を開けた、可愛いながらも一生懸命に口を開く姿は可愛いが、そこからが恐ろしかった。彼女が口を閉じた瞬間に扉ごと齧られた様な痕跡を残して消えてしまったのだ。エヴァは冷や汗が止まらなかった。最近読んだ魔導書やそう言った書物にも書かれていないほどの力、空間ごと、彼女は歪めて喰ってしまった。

壁も、床も、齧られた跡しかない。あるのはドアの向こうに居た筈の魔法使いの足だけが転がっているだけであった。

「な・・・っな・・・っ！？」

「ありがとう柘榴」

≪う・・・ん！≫

柘榴と呼ばれる黒く長すぎる髪を持つ幼女は彼女の言葉を聞くと姿を煙のように消してしまった。エヴァは開いた口が塞がらない、ソレはその筈だ、目の前で普通では有り得ない事が平然と起きたのだから。

「ぼ、牡丹！何故お前この事を隠していた！！」

「聞かれなかっただろう、それに君は僕にこう言った事を聞く気はなかった筈だ。お互い、迫害される種族と考えていたからね」

吸血鬼や妖怪、化物の類はその容姿がどれ程美しくとも所詮はケモノと考えられているのだ、その為にお互いの過去の話しは話したがらないし、同情も求めない。それは、生きる為の暗黙の掟であった。

「あ、あの男は！？」

「彼は転生者と言う者でね、一人で世界を改竄するほどの力を持っている筈だよ。だから僕は柘榴に食べさせたんだ」

「その・・・テンセイシャとは、そんなに危険なモノなのか？」

「そうだよ、中には神を殺そうとしている者、復讐者、快楽犯、色々いるね」

「お、まえも、そうなのか？」

その言葉に牡丹は顔をしかめる、目の色が黒に戻った彼女であるが、その彼女は何時もの優しい笑みではなく、無表情に成っていた。まるで心外の事を言われたと言う様な雰囲気を出している。

「僕は違う、僕は異端者（イレギュラー）だよ、あんなモノと一緒にしないで欲しいね」

別に世界を変えたい訳でも、自分だけのハーレムを作りたい訳ではない。自分はしっかりとした目標が有ってこの世界に来たのだ、異端として迎えられたおかげで大きな代償は払わずに済んだ事が幸いだ。

普通、神の力以外で世界を渡ると身体に異常をきたす事が有る。例えば片手が足に成っていたり。

「牡丹は、牡丹なんだなよな？」

「当たり前の事を聞かないでよ。僕みたいなのが世界に2人も居たら最悪だろう？」

嗚呼、疲れた。と彼女は再びベッドの上に横に成った。そして彼女は鞄の中から黒い表紙の古書を取り出すと分厚いそのページを捲る。その中には【襲撃】と言う項目が有った。

「・・・その本は何か意味が有るのか？」

「これかい？・・・内緒だよ、コレだけは教えられない」

「やっぱりか・・・」

エヴァの落胆を見て、少し可哀そうに思えた牡丹はその本のページを適当に捲ってその一節だけを読み上げた。

「【歴史は、ある者達によって、改竄されているのか、それとも、私達が創り出しているのか】」

「・・・？何だ、その一節は・・・。何か意味が有りそうだな・・・」

「それは、内緒だよ。でも、エヴァなら此処まで辿り着けるかもしれない。・・・いや、辿り着いてしまうかもしれない」

悲しそうな彼女の瞳、それは何かを知っている、いや、知ってしまったと言う様な顔であった。分厚いその本を閉じで彼女は鞄の中に

そっとしまい込んだ。黒の古書が入っているとは思えないその鞄、何かの術式が刻まれているのであろうか、しかし見た目は地味なこげ茶色のバックである。
少しの水の入ったグラスを手元に寄せて彼女はそれを一気に飲み込んだ、鬼をこの世に留めるのも楽ではないと言う事だ。完全に彼女は消耗していた。残されていた転生者の足は砂のように成り、消えて行く。残った壊れた部屋の修理は、エヴァが魔法で何とかしたが、先ほどの音などで何故誰も来なかったのであろうか。

「なぁ、何故人が来ないんだ。あれほど大きな音がしたのに」

「あ～・・・ソレは多分人払いの結界だね。他人の周囲を反らせるんだよ、ま、僕には知識しかないのだけれどね」

――そう、今は、ね――

「？何か言ったか」

「エヴァ、痴呆症には早いと思うけど？」

「ボケてない！！ボケてないもん！！」

だが、疲れた彼女には丁度良かった。これでゆっくり寝られるし邪魔は入らない。ベッドの上で夢の中への船を漕ぎ始めていた。

2話・転生者のお話（後書き）

お目汚し失礼しました

3話・お城のお話（前書き）

あ、私前も言いましたが、原作知識はありません。オリジナルな展開が多いと思われます。

3話・お城のお話

――彼女は面倒臭い事を嫌う――

彼女達が何時も何処かの宿に泊まったりしている訳が無く、野宿も良く行っていた。雨が降らない限りはエヴァの魔法で火等は何とかなるし、食糧は干し肉や捕まえた獲物等を捌いて食料に出来る。水には少し困ったが、考えてみればエヴァの得意な魔法は氷属性だ、氷を溶かせば水に成るのは当たり前の事で、これも何とか出来た。

「・・・アッチヘウロウロ、こっちヘウロウロ。目標の無い旅に憧れている人を僕は尊敬できそうにないよ」

「いきなり何を言うかと思えば・・・仕方ないだろう？特定の場所に留まっていると教会に嗅ぎつけられるからな」

「教会・・・ね。（今の時代の教会には魔法使いや奇跡を使える異能者が居るのかな・・・？）」

追放世界での教会にそんな者は居なかったが、こちらの世界には自分以外にも異能が居る筈だ。世界線が違うとは言えども此処は【あのヒト】が覚醒した地とも言える場所だ。自分程度が何処まで通用するか・・・。

最初は教会を襲撃してしまえば良いのでは？とか考えていたが、ソレは不可能だ。柘榴はそこまで力を発揮できないし、牡丹は基本的に寿命以外は普通の人間、主な戦力に成るのはエヴァだけであった。

「そう言えば、聞いたかいエヴァ」

「・・・何だ？」

「此処からさらに西に進んだ場所に古城が有るらしい。少し前の戦争で大破している物の、まだ住めると聞いたよ」

「その話は私も知っているが・・・教会にすぐ目をつけられるだろう」

「そうとも限らないよ？」

焚き火に薪を放り投げながら彼女はエヴァの方を向き直る。

「その城には、幽霊の兵士が出るそうだ、だから誰も近づかない。不気味だと言ってね」

牡丹はまとめた情報を書いた紙を取り出した。城の場所から何から全てが書いてあるが、見取り図もある。一体彼女の情報網は何処まで広いのであろうか。エヴァはその資料を見ると、「ふ・・・む」と声を上げる。

「確かに、コレは使えるが・・・その幽霊と言うのが気に成るな」

「なに？君、もしかして幽霊が怖いの？」

「ななっなにを言っている！？私がゆゆゆっ幽霊を恐れる筈が無いだろう！！？」

声は完全に震えていた。冷や汗や心音から推測するに完全に恐れている。

どう考えてもエヴァの従者であるチャチャゼロの方がホラーなのだ

が、最近魔力供給を切って鞄の中にしまっている理由が解った気がした。考えるに夜中、トイレにでも行く途中に見てしまったのであろう。

「ま、行ってみないと何も解らないね。僕の情報網もそんなに広い訳じゃない」

「（十分だと思うが・・・）」

二人は夜の明けない内に行動を開始した。この時間なら普通の人間はまだ夢の中で教会の人間もこんな時間には動いていないのだ。教会の連中がどこぞの王立国境騎士団のように吸血鬼のゴミ処理屋を使役していれば解らないが、そんな事も無いであろう、人外を完全に否定している事だし。

「距離にして、1日半ってところかな。ま、飛んで行ければもっと早いのだろうけど」

「・・・私に一人で先に行けと言うのか？」

「おや、理解が早くて助かるよ。僕が行った時に盗賊でも居たら、僕のお腹から何かが出されてしまうかもしれないしね」

そんなに簡単に死にたくはない。こんな身体でも産んでくれた親にまだ何も恩を返せていないのだ。せめて何らかの形で恩を返してからでないと死にきれないし、そんなに簡単に死ぬ予定も無かった。故に、露払いをお願いしたと言う訳だ。普通の人間程度、柘榴が何とかしてくれるだろうが、彼女に普通の人間を食べさせても意味が無い。せめて魔法使いとかなら食べさせても良いか・・・。

「大丈夫だ、私がお前を何があろうとも守ってやる」

「足が震えていなければ良い言葉だったね」

どうにも、締まらなかった。

結局、子供の足では2日掛ってしまうと考えた牡丹は近くを通りかかった馬車を操る男性に交渉、金貨3枚で交渉は成立した。大金だが牡丹にとってはこんなモノ微々たる出費である。エヴァは殺した教会の兵士達から物を奪う事はない、しかし牡丹は生活の為としっかりと頂戴して来ているのだ。生きる為には食事も水も必要なので仕方の無い事。

「お嬢ちゃん達は何処かの商家の娘さんかい？」

「えぇ、同じようなモノですわ」

完全に猫を冠っている牡丹、何時もの言葉使いではなく、それらしい喋り方であった。エヴァも一瞬ギョッとした様な顔をしたが、自分達がバケモノと言う事を悟られないようにしているのだとすぐに考えられた。

揺れる馬車、一人の男性と2人の少女を乗せて廃城の近くまで乗せて行く。

「気分は、ドナドナ・・・ですね」

「？」

「あぁ、エヴァ。そろそろ降りるよ」

口調がコロコロ変わる牡丹であった。

馬車の男性に金貨3枚を渡し、周囲を見渡す。確かに廃城のようだ。城下にも何処にもヒトの気配がない、人どころか鳥さえも空を飛んでいないではないか。コレは異常にして異質、そう考えた牡丹は鞄の中から商人から買っておいた鞭を取り出した。

「エヴァ、僕は戦力には成らないからね」

「ふん、承知している」

「ケケケ、匂うぜ。コレは化物の匂いだ」

妙に発音が良くなったチャチャゼロが鞄の中から這い出して来た。

「!?お、お前!何でそんなに発音が良いんだ!!?」

「!牡丹様、ごめんなさい・・・ごめんなさいごめんなさい・・・」

「何が有った!しっかりしろ!!チャチャゼロォォオオ!!」

チャチャゼロは、牡丹に何かされたようだ。片言は治っているが完全に牡丹を恐れている。牡丹は「あ、ちょっとやり過ぎた?」と意味ありげな事をぽつりと零す。

2人と1体が城の中に進んで行くと、そこには大きな肖像画が有った。美しい女性の絵のようだが、既に朽ち始めていて顔などの形は崩れて来ている。その他には時に目立つ物はなく、何かがうめく声も何も聞こえない。

「・・・不気味な程に静かだね」

「・・・」

「御主人、そんなに震えるなよ・・・」

いかにも、と言った雰囲気にエヴァの足は産まれたての仔馬の様に震えていた。何故か牡丹はワクワクしながら進んでいるようにも見える。彼女の手に持つ鞭が壁をピシッと音を立てて打つと、その壁は脆かったのか少し削れた。

築ウン１００年の城らしい、しかし此処は良く戦火に巻き込まれ遂には廃城と言う訳だ。故に１００年でも脆くなってしまったらしい。

「・・・ッ」

エヴァが反応した。彼女の視線の先に居るのは白いドレスを赤く染めてただ立つ女性、その髪の色は薄い金髪で手にはナイフを持っていた。エヴァがソレに声を掛けようと口を開けた瞬間、それは霧のように霧散して消えてしまった。

「なっ！？」

「？エヴァ、どうしたの。そんな壁の方を見て」

「壁だと！？此処には確かに女が立っていて通路が・・・」

無かった。そこには古い壁が有るだけ、あるのは少しの血痕の跡と倒れた蝋燭立だけ、女性が一人立てる程のスキマも無い。エヴァは身体を震わせて牡丹の着物の袖をギュッとつかんだ。牡丹は不思議そうに頭を傾げた、確かに壁だが・・・何かが違う事に気が付いたのだ。同じ位の身長のエヴァの頭をよしよしと撫でながら空いている片手で壁を探る。

カコンッと、石のブロックが１つ、押し込まれた。

「・・・エヴァ、ビンゴだよ」

「な・・・何がだ？」

「君の見たのは、コレかもしれないね」

開いた壁の先には1つの部屋、その部屋の中に居たのは薄汚れた白いドレスを茶色に変色させた一人の少女の首つり死体であった。既にかなりの時間がたっており、死体はミイラの様に成っている。髪の毛も残っているがその顔は苦痛に歪んでいた。これは女性的には見られたくない姿であろう。

「足元に椅子等の物はない・・・考えるに、この子は此処に吊るされたんだねぇ」

死体の足元に落ちているナイフ、恐らくこの城の姫様だろう、家紋が入っていた。戦に敗れ、この隠し部屋も見つかってしまった。此処に身を隠していた少女は見つかり、面白半分に痛めつけられた後に首を吊らされたのだろう、死体にはまだ抵抗の跡が有った。

「・・・」

「エヴァは、こう言うモノを見るのは初めて？」

「当たり前だろう！！私は女子供は殺さない！！」

「僕は見た事が有るよ。それも複数回ね」

鞭を鞄へと入れて、中からナイフを取り出すと死体の首を吊ってい

たロープを切った。死体はゴトッと音を立てて落下し、久しぶりの床に叩きつけられる。

「もう少し優しく降ろす事は出来なかったのか」

「死体は、どうあがいても死体だよ」

冷たい言葉だけが、エヴァの耳には帰って来た。彼女には何か恨みが有るのだろうか・・・。

「お嬢さん、悪いけどこの城、僕達が貰うよ。君はしっかり埋葬してあげるからさ。【もう化けて出てきたりしないでよね】」

≪・・・あはっ≫

甲高い子供独特の笑い声が部屋に響く、死体ではない。死体は声を発していない。しかし、その声は部屋の中に木霊していた。牡丹が彼女の死体を何とか抱き上げる。カラカラに干からびた死体だ、彼女でも持てるだろう。しかし、やはりと言うべきかフラフラとしている。それを見かねたエヴァが「私が持つ」と言い、彼女の手から死者を受け取った。

≪・・・ありがとう≫

「どういたしまして、迷わずあの世に行きなよ?」

部屋に木霊した最後の言葉は、可愛らしい少女の感謝の言葉であった。

死体は城下の外れにあった王家の墓に埋葬された、少し荒れていたが彼女の死体を持って行くとそこの重そうな石の扉は勝手に開き、

墓の中への階段を現した。幽霊嫌いのエヴァにとっては、震えあがるほどに怖かったらしく運び終わった後に牡丹に抱きついていた。

因みに、獣の匂いを放っていたのは地下にあった檻の中にあった多くの死者の匂いだったらしい。別に魂が残っていたと言う訳でも無く、石造りの地下牢だったのでエヴァの魔法で壮大に火葬した。骨も残らなかったのは予想外であった。

3話・お城のお話（後書き）

お目汚し失礼しました

4話・茶々姉達のお話（前書き）

時間が飛びます

4話・茶々姉達のお話

――彼女は、甘味が好物――

古城を拠点としてから数日がたった。ボロボロであった城の内部を元に戻すためにはかなりの労働を強いられたが、今では完全に修復が完了し、元来の姿を取り戻している。しかしやはりと言うべきか城下はまだ何も片付けていない状態なので見晴らし台などからは滅びた文明の痕跡を見る事が出来た。
不気味な噂は広まり、此処は住みやすい所と成っている。

「――でも、広すぎてどうしようもない」

掃除から洗濯、エヴァだけでは何もできなかったのだ。今までどうやって生活して来たのかが不思議だが、そんな事どうでも良い、このままでは自分が辛いと考えた牡丹であったが、良く考えてみればチャチャゼロの様な存在を量産すれば良いのではないか。彼女はすぐに行動を開始した、城中の鎧を集めて組み立て、それをエヴァに見せつけた。

「・・・何をする気だ？」

「これをチャチャゼロの様に動かせばかなり僕が楽なんだけれど」

「城の警備や家事の話しか・・・確かにお前には苦労を掛けてしまっているし、私としても助けたいが・・・鎧が家事をしているのはシュールすぎないか？」

「何なら僕が火防女役をやろうか？何処かの神殿かダンジョンから

死んだ兵士の魂を使役して・・・」

「出来ないだろうが！！と言うよりそんな事しないでください！！お願いします」

幽霊が怖い事を完全に認めているエヴァであった。仕方ないので二人で人形を作る事に成った。依頼すると言えば簡単だがこの時代である、人形一体と言ってもかなりの値段に成ってしまう。運よく此処は古城、古い人形のパーツは山のようにあった。壊れてはいるが魔法を使えば何とかなる状態の物が多く、寝ずの3日で作業は終了した。

「し・・・死ねる・・・これは・・・」

「あ、ぁ・・・私達が馬鹿だった・・・しっかり寝れば良かった・・・」

「おっおい！しっかりしろ御主人！牡丹！」

チャチャゼロの声がするが、もう二人とも動く様な気力が残っていない。牡丹は何とか自分の鞄の下まで這って行き、その中から黒の古書を取り出した。捲るページは１２８ページ、少し前の、既に読み終わったページだが今の状態では関係無かった。少しでも今の体力を回復する為に彼女はこの行動を選択したと言う訳だ。

「書庫に行けないのが・・・辛い」

「血が・・・血が飲みたい・・・」

両者まるでグールの様であった。二人が立てるようになるまでに有

した時間は何と2時間。その後3日分の睡眠をとる為にたっぷり寝て、それからの作業と成った。人形を動かすのは簡単な事らしい、その辺に居る簡単な精霊を捕まえて人形にぶち込むらしい。言い方はアレだがそれでもかなり高度な技なのでは？と思った牡丹は間違っていない筈。

「う、動いたな？」

「う、動いたね」

その数、１０００以上。メイド服を着た人形達はチャッチャと動きだした、彼女達はエヴァの命令も良く聞くし、牡丹の言葉も良く聞いた。全員顔や髪型が同じに見えるが・・・気にしてはいけないのであろう。

城に活気が戻ったように生き物の気配が増えた、喜ばしい事だが・・・此処で問題が発生した。彼女達は何故か妙に2人にスキンシップ（肉体的なモノ）を良く求めるのだ。

「僕の様な貧しい胸を触っても面白くないと思うけど」

「ちょっやめろ！！命令を聞け！！」

冷めている牡丹と、恥ずかしがっているエヴァ。牡丹は閉鎖世界で神として崇められていたのだ、その為に風呂などは侍女や巫女が彼女の身体を洗っていたのだ。もう馴れている。

「で、この城を拠点としている訳だけれど、今後の予定は？」

「この城の地下の研究室の様な場所に驚くほどの魔導書が有った。まずはそれを理解したい。私は数日地下に潜るぞ」

「僕が暇じゃないか、暇すぎて柘榴と天下一武術会ごっこをしてしまうかもしれないよ？」

「良く解らないが駄目だ！！お前一人の力はそうでもないが柘榴が入ると完全に危ない！！せっかく直した城を壊さないでくれ！！」

必死のエヴァに牡丹はニヤッと笑みを浮かべた。

「じゃあ、一緒に研究しようよ。僕も知識だけなら有るからさ」

確かに彼女の頭の中にある知識は恐ろしいモノが有る。ただし理解はしていないので漠然と覚えているだけ、それでもエヴァの研究には役に立つであろう。知識は武器に成ると言ったのは誰であったか。活動を開始したのは次の日からであった、確かに牢屋の上の階層は大きな研究室に成っていた。大量の魔導書が牡丹の知識欲を刺激する。手に取った本のタイトルは【今日から始める大魔法】、完全に読者を馬鹿にした表紙で、すぐさま破り捨てたくなった。

「【今日から君もクトゥルフの虜】・・・何処に捨てようかな」

「な、何故捨てる！！？」

「だって、読んだだけでＳＡＮ値が下がりそうじゃないか！」

此処の昔の城主はそう言ったモノを信仰していたのであろうか。胡散臭いモノが多かった、エヴァは何故か役にも立たなそうな魔導書しか持ってこないのでそれを見かねた牡丹がまともな魔導書を集めてエヴァに渡す、エヴァの尊敬の眼差しを浴びながら少し擽ったそうに本を選ぶ彼女、その本の中にまた変な物を見つけた。

【エイボンの書】

瞬間で、その本は待機していたメイド人形に渡され、木端微塵にされた。メイド人形の癖にその腕の中には仕込みナイフが有ると言うこだわりの改造、それを全ての人形に施したので3日も掛ったのだが・・・・。

「あぁー!!何をする!」

「えぇい!此処には普通の魔導書は少ないのか!!僕はそんな狂気の書物求めて無いの!!」

「せっかくの資料が・・・」

「あんなモノ読んだらその内、イアイア!とか言っちゃうよ!!」

どこぞの這い寄るニャ〇子さんが来る前に何とかしてこの書庫の中から邪神系の本は捨ててしまわないと。そう考えた牡丹はとりあえずメイド達にそう言った関係の本は裏の焼却炉でまとめて燃やすようにと指示を出した。後ろでエヴァが泣いているが、この際気にしないでおこう。

――エヴァが作業を開始してから4カ月目、食事はメイドに任せてある。すると何処からかウサギ等を捕まえて来てそれを捌くようになっていた。何の肉か最初は解らなかったが、知ってしまえばどうという事は無い。人間の肉ではなく幸いだ。

作業の方はそれなりに進んでいる。無駄に長い寿命だ、有意義に過ごしたい所。噂の流れるのは早い事で城が再建されたと聞いた行商人が何かを売りに来る事が有る。城下はまだあのままだが、商人と

は逞しい物である。

「牡丹様、何故私の髪を梳かしているのでしょうか」

「何故って、触り心地が良いから」

人形メイドの中に少し違うタイプの人形が居た。彼女は牡丹のお気に入りだ、名前はまだ付けていないがその内に付ける気のようだ。しかし実はこの牡丹、ネーミングセンスが微妙なのでどう言う名前に成るのかはさっぱり解らない。

彼女を解放してから牡丹は、前に行商人から買った【美味しいパンの焼き方】と言う主婦じみた書物を手に取った、彼女は和食なら無敵なのだが洋食はまったく駄目なのだ。

「・・・牡丹様、家事なら私達にお任せ下さい・・・。もうあの悲劇を繰り返させはしません!!」

「ふふ・・・、人は繰り返すモノだよ」

以前彼女が焼いたパンは・・・もう、何とも言えない様な出来であった、エヴァはその日の記憶が無いと言っている。今頃その暗黒物質はこの世界の何処かで崇められているだろう。何があったかは言うまい。

「それにしても、良く本を買うお金が有りましたね。高価なのに」

「え?前に大量の古書を処分したじゃないか」

「・・・まさか、あれ全部売ったのですか!?」

「え？僕に関係の無い人が何処で邪神崇拝していようが関係ないからね」

狂気の神話シリーズは全て行商人に格安で売った。その為に以前にもまして手持ちの金が増え、今では本の１冊や２冊、５０冊や１００冊位は簡単に手に入る。まあ、そう言っても興味の無い本は彼女でも買わないので金はたまる一方だ。

「おい牡丹、少し手伝ってくれ」

「？僕に何か手伝えることがあるのかい、僕、魔法は使えないと言ったろう」

「正確に術式を覚えているだろう？それを書いてくれないか？」

「術式？何でまたそんな物を」

「この城を移動させるんだ、この場所のままでは問題が生じたからな」

「・・・？解ったよ、君の決定ならしょうがない」

読もうとしていた料理本を閉じて、彼女はエヴァの魔法研究室へと入って行った。

4話・茶々姉達のお話（後書き）

成長の見られない駄文が私の特徴

6話・引っ越した後のお話（前書き）

数百年をリアルに書く予定は無いです

6話・引っ越した後のお話

――彼女は現実を気にしない――

さて、城を移動させるのは簡単な事であったが、移動させた場所は何を思ったか無人島であった。確かに教会の連中も来ないし、他に邪魔に成る様な者も居ない、その無人島に城ごと引っ越して早い事半年に成るが、エヴァへの挑戦者以外は特に来なくなった。そして大胆に城も改造したので今ではかなりの物に成っている。
エヴァは最近、どうも自分の背恰好を気にしたのか幻術を使って自分を大人の女性に見せている、確かに身長も高く、胸などの女性を象徴する部分は目立っていたが、はっきり言って中身が子供のままなので残念な結果に終わっている。

「ねぇ、エヴァ」

「私の事はキティで良いと言っただろう?・・・で、何の用だ」

「その格好のまま指に付いたジャムを舐めるのは止めた方が良いんじゃないかな」

はっきり言って、どちらが年上だか解らなくなってきた。そして牡丹お気に入りのメイド人形、名前をテルと言うが、彼女は基本的に家事を任せられている。今日の朝食の食パンも彼女の焼いた物だ。

「それにしても、毎日のように同じ光景を見て、同じ事をして、そろそろ僕は飽きて来たよ」

「な、私と一緒に居る事に飽きたと言うのか!?」

「そんな事は一言も口にしていないけどね・・・。それに、その言葉は色々と誤解を招くよ」

紅茶を口に含みながら彼女は深く椅子に腰かけた。彼女もこの半年何もせずに過ごしてきた訳ではない。柘榴をもっと長い時間この現世に留めておける様に精神統一などを行ったのだが・・・結果、効果は期待できなかった。

エヴァはジッと牡丹を見て来る、恐らく彼女の中では牡丹は既に家族同然なのであろう。先ほどの言葉に少しでも違う日にしようと考えているようだ。

「そ、そうだ！久々に街へと行って本でも買おう！！」

「あのね、キティ。僕は君達の様に空を飛べないんだよ？船でも3日は陸まで掛るだろう？」

「じゃ、じゃあ私と修行しようか！最近、氷属性の魔法の最上級を練習しているんだ！！」

「う～ん・・・僕はどう足掻いても魔法は使えないしなぁ」

何か、嫌な視線を感じて本から目を放し前を見るとそこには目に涙を溜めてこちらを凝視しているエヴァの顔が有った。まるで捨てないでと言う様なその顔、どうすればいいのか・・・。

「じゃ、じゃぁ牡丹は何がしたいのだ！私が願いを叶えてやろう！！」

「キ、キティ、ソレは何処の悪魔の殺し文句だい・・・？」

何故か必死のエヴァに少し引きながら牡丹は本を閉じた。
美しい女性が必死に成って自分の言葉を待っている様は、同じ女性としても嬉しいモノが有るが、もしかしたら彼女は百合の気が有るのであろうか。そう考えると少し背筋が冷えた。どうか家族愛でありますように！と強く願い、エヴァを満足させる事が出来る様な回答を探す。

確かにショッピングは魅力的だ、死体から頂いた金貨ももう大量に余っているし、そろそろ新しい着物を造った方が良いだろう。古くなった灰色の羽織を見ながらそう感じる。
しかし、距離が距離だ、以前の場所では戦争が起きていて城を元の場所には戻せないし・・・。

「じゃあ、一緒に海水浴でもする？」

「私は吸血鬼なのだが・・・」

「あ、そうか。吸血鬼に海は駄目か」

真祖にもなると克服は可能だ、しかし克服するまでにかなりの時間が掛る。最初から完全チートの存在など存在する筈が無い、黒の古書にもそう書かれていた。あの本に書いてあるのなら本当の事だろう。そう思うのは僕だけだろうか。
しかし、遊ぶ物が無い孤島、それに2人とも他人と遊ぶという経験は無に等しい、方やお嬢様の様に育てられた箱入り娘の吸血鬼に方や本の虫として育って来た異能。遊び？何それの世界である。

「！そうだ、良い事を思いついたぞ！！」

「何だい？」

「人間狩りに行こ」「誇り高い吸血鬼じゃなかったのか？君は」

「・・・う～」

さて、本当に詰まって来た。エヴァの事だから興味が無くなれば元に戻ると思ったのだが、そんな事も無かった。先ほどから「さぁ、お前の願いを言うが良い！」的なオーラを出してこちらを見て来ている。本当に彼女は何処の悪魔だろうか・・・。こんな所を挑戦者に見せる訳にはいかないだろう、変な噂が流れる・・・。いや、もう流れているか。

「お前の持っている黒の古書にはそう言った事は書いていないのか？」

「君は僕のこの本を何だと思っているのさ」

「とても便利なモノ？」

「うん、大胆に違うよ」

まあ、近いのかもしれないけれど。
しかし、本当にどうしたモノか・・・。

「そんなにも御暇でしたら、周囲の動物狩りに行くとよろしいのではないでしょうか？」

意外な所から助け船は出航した。そう言えば確かに動物ハンティングは古来から人間が娯楽として楽しんできた物だ。まあ、人間（笑）

なのだが、楽しめるだろう。
エヴァは初めての単語に頭を捻っているが、簡単に教えると納得したのかすぐに動きやすいドレスに着替えて来た。ドレスはどれも動きにくいと思うのだが彼女の趣味なので黙っておこう。牡丹は何時もの恰好だ、羽織の下はボーイッシュでは有るが動いやすい服なのでこのまま行く事にする。

「で、何を狩るんだ！？」

「げ、元気だねキティ」

「当たり前だろう！お前は何時も室内に居るからな！！」

「・・・うん、何かごめん」

因みに、この二人に狙われる可哀そうな犠牲は兎である。
森の中を馴れたように駆けるエヴァと、その後ろをゆっくり付いて行く牡丹、そして、牡丹の後ろに付いて行く大きな影。牡丹は全く気が付かずにそのまま進んで行くが、先に進んでいたエヴァの方がその大きな影に気が付いた。

「おっおい！牡丹！！後ろ！！」

「何だよ、大きな声は・・・あ？」

毛むくじゃらのその身体、手には鋭い爪。体長は2メートル以上の巨体。間違えなくクマであった。見た感じ5メートル位だろうか、軽く現実逃避した牡丹は「さて、帰って本でも読もうかな」等と言い始めている。

「避けろ！！牡丹！！」

「え？今日のご飯かい？それならテルが今日は上質の卵が獲れたって」

「何の話だ！！」

彼女の幼い身体に振り下ろされる猛獣の一撃、しかしその一撃は彼女の体に届く事許されなかった。クマの腕はもう少しの所で綺麗に無くなっていたのだ、それも肩から。

≪キャハッ≫

彼女の背中には黒い靄が集まり、そこから子供の腕が出て来ている。そして周囲に響いた声、間違いない、牡丹の妹の様な存在の鬼、柘榴の声であった。柘榴はその靄から這い出るとクマと対峙した、見た目的には熊に襲われる幼女であるが、ソレは逆、熊を追い詰める幼女が正しい。

響く熊の断末魔に子供の笑い声、エヴァの顔からは少し血の気が引いていた。

「・・・牡丹、止めなくて良いのか？」

「今日は熊鍋も追加だね・・・まあ、原型は残っていなそうだけれど」

≪お・・・ねぇ・・ちゃ・・・コレ・・たの・・・しい！≫

ご機嫌な柘榴に2人で苦笑いを零す、怖すぎる用心棒である。

その日の夕食には予想道理に熊鍋が出されたが、それを食べたのは牡丹だけであった。

6話・引っ越した後のお話（後書き）

その内、柘榴もちゃんと喋れるようにしよう・・・そうしよう

6話・ペットが出来るお話（前書き）

新キャラです。また空気が増えるのか・・・

6話・ペットが出来るお話

――彼女の友好関係は異常――

牡丹と暮らし始めて少したった頃、エヴァが夜中にトイレに行く為に起き上った。見た目的には女性体であるが、中身がエヴァのままなので少し行動が幼いのは言うまでも無い。一応彼女の部屋はトイレに近い所に有るのだが、夜は殆んどの明かりを消しているので真っ暗に近い、その中を彼女が進んで行く。
そして、無事に事を済ませて自分の部屋に帰る途中、彼女は見てしまった。長く伸びた髪、不健康に青白い肌、肋骨が浮き出るほどに痩せた全裸の少女が四つん這いで、羞恥の欠片も無い様に【天井を】這っていたのだ。

「牡丹――――!!」

彼女が同居人である牡丹の部屋に掛け込んだその秒数、国体選手も驚きの速さであった。もちろん深夜である為に普通の人間と基本変わらない牡丹は布団の中で寝ているのであるが、もちろんの事叩きお起こされる。

「何だい・・・僕は柘榴と遊んでいたから疲れているのに・・・」

彼女は修行も兼ねて柘榴を良くこちらに呼び出している。良い鍛錬には成るが一日の元気を吸い取られているので物凄く疲れるのだ。
エヴァは涙目で牡丹の胸倉をつかみガクガクと揺さぶる。

「ちょっ止めて・・・吐く・・・前代未聞の事に成る・・・ッ」

「変な者が！！変な者が！！変態が居たんだ！！！」

「そ、それを僕にどうしろと？」

確かに牡丹に行ってもどうしようも無い事である。彼女は柘榴を召喚する以外では普通の人間なのだ、力や魔力、身体の防御などは絶対的なまでにエヴァの方が強いであろう。しかし、この吸血鬼、良い具合にヘタレである。どこぞの吸血姉妹の姉の方に近い性格かもしれない。ただし、幻術で女性体に成っているのがまたシュールだが。

「いかがなさいました？御主人様、牡丹様」

「あ、テル。キティが廊下で変な物を見たと言うんだけれど、君は見たかい？」

「？天井を這う少女以外には見ていませんが・・・」

「「それだよボケメイド」」

黒の古書のページを捲るが、そんな項目は無い。基本はこれに書いてあるのだが、今回の事は異例の事らしい。しかしメイド達は動揺している様子も無いので恐らく向こうからはこちらに手を出してこないだろう。

だが、夜中に天井を見上げたらそんな物が居たら恐ろしい事は確かだ、前の熊の時の様に柘榴がその少女？をバラバラにしてしまっても目覚めが悪いだろう。何とかして解決しなければ・・・。

ペタペタペタペタペタ

「・・・」

ペタペタペタペタペタ

「・・・」

柔らかい肉が、固い石等に触れる音がする、此処は城だ。部屋の中は基本石造りでそこにカーペット等が敷かれている。牡丹は天井が石造りの部屋に寝ている。つまりは・・・

「（此処に居る？）」

「（その様ですね）」

「（お、おい！どうするんだ！？）」

チラッと天井を見上げると、そこには確かにそれが居た。黒と灰色の混じったような不思議な長い髪の毛を持つそれはペタペタと天井を這っている。赤色の瞳が嫌にぎらついて見えた。

その瞬間に、牡丹は昔読んだ妖怪辞典の本の内容を思い出す。女性の身体で天井を這える、そして赤い瞳、もしかするとアレかも知れない。牡丹の呑み終わっている紅茶セットの隣に置いてある角砂糖を1つ摘み、それをその少女に向かって投げてみる。

「っ！」

それは、砂糖を髪の毛で掴んだ。そう、髪の毛で。

「やあ、君、もしかしてもしかすると女郎蜘蛛かい？」

東側に多い蜘蛛の妖怪、地方によっては大妖怪の分類にも入るソレは牡丹を静かに見下ろしていた。牡丹が砂糖を自分の口へ入れると彼女もそれを真似して口の中へ入れる。その瞬間、幸せそうな顔をした。

――女郎蜘蛛、ソレは人間に糸を巻き付けてまるで蜘蛛が食事をするように人間を喰ってしまう妖怪。子を多く産む種族も居れば、人間に化けて男に近づき捕食する者も居る――

その蜘蛛の少女はスルスルと降りて来る（手から蜘蛛の糸が伸びるようだ）と、四つん這いのまま牡丹の前に進み、彼女の顔をジッと見る。エヴァは顔が青ざめていた。

少女は柘榴と同じ位の大きさだろうか、少女と言うよりは幼女と言うべきかもしれない。何かを期待するような目で牡丹を見上げている。

「もっと欲しいのかい？」

「！（コクコク）」

激しく首を上下させた、まるで犬の様だなと思いながらも今度は砂糖ではなくテルが昼の内に焼いたクッキーを出す、最初は戸惑った様子であったが、蜘蛛は恐る恐るそれを口にした、どうやら御気に召したらしい。子供の様な笑顔でクッキーを食べている。ただし、四つん這いで。

「何か、こう・・相手を服従させたいって言う欲が満たされていくね」

「お、おい牡丹、大丈夫なのか？」

エヴァの震える声、牡丹はその声に振り向きニッコリと笑った。

「キティ、僕この子を飼うよ」

「はぁ！？」

「僕、犬の様に良く言う事を聞いてくれる使い魔的な存在が欲しかったんだ」

「テルが居るだろう！！」

「私は牡丹様専属の【メイド】ですので・・・犬とは言えませんね」

人間を飼っておる。どこぞの悪役の様な言葉だが、蜘蛛の少女はどうやら不服はないらしい。今まで何にも食べる物が無かった所に、自分に食べモノを与えてくれる救世主の様な存在が現れたのだ、もう彼女は牡丹を主と認めているようだった。腹を見せて服従を現す恰好を取っている。幼い身体ながらも発育した胸が揺れた、色々と丸見えである。

「テル、僕が教えた通りに着物、作れるかな？」

「解りました、明日までには完成させておきます」

「ほ、本気で飼うつもりか？」

「名前何にしようかな？和名が良いかな・・・椿？ありきたりだし・・・」

「アラクネ」

「キティ、それじゃあ西洋名じゃないか」

彼女は甘えるように牡丹の指を舐めている、それに少しの嫉妬？を覚えたのかエヴァが牡丹のもう片手を抱いた。両手に花と言うが、コレは喜んでいいのであろうか。そう考える牡丹。

「甘楽（つづら）にしよう、君の名前」

物凄い適当に言い放った彼女であるが・・・甘楽と名付けられた彼女はその言葉が自分の名前と認識すると嬉しそうに抱きついて来た。エヴァは少し頬を膨らませながら甘楽を見ている。

「さ、これで解決だね。甘楽、僕の見ない所でキティを齧っちゃ駄目だよ？」

「・・・（？）」

「か、齧るのか・・・」

因みに、彼女は牡丹の調教の結果、３日後には立派に服を着て人間と同じように歩く姿が目撃されている。ただし、牡丹を見ると仰向けに成り自分の一番弱い場所である腹を見せるのは変わらなかったと言う。知識は有るが人語は話せないようだ、何故か柘榴とは中が良いようだが、彼女達が遊ぶと森が１つ消えると言う。

6話・ペットが出来るお話（後書き）

感想、出来るだけ返信します。

7話・魔導具のお話（前書き）

と、書いてマジックアイテムと呼んでください

7話・魔導具のお話

――彼女の師は1人である――

孤島の外は今や戦乱の世であるらしい、聞いた話だと色々な所で戦いが頻繁に発生し、剣や弓などの武器に加えて新しい武器も発明されているようだ。あまりにも長い間関係ないと言わんばかりに此処で生活して来たので完全に忘れていた。もう何年外では時間がたったのであろう。肉体的には全く成長していない少女が雪の降る外を見ながら黒の古書を置いた。

髪の毛なども全く変わっていない、イメージは変えないらしい。彼女と共に住んでいるこの城の一応、主君であるエヴァも幻術を使って成人女性に自分を見せているモノの、中身は全く変わらなかった。膝掛けを外し、靴をはく。部屋の外は予想以上に寒かった。この孤島は寒い位置に有るらしく冬が長い、テルに頼んで簡単な暖炉も造ったのであるが、それは部屋の中だけの話で城の中全てに設置する事は出来なかった。

彼女、数日前まで死ぬか生きるか程の熱を出していたのだ、風邪もこの時代では死に至る病である。小さなメモ帳を持った黒と灰色の髪を持つ少女がササッと紙に文字を書き込んで見せて来た。

【何か必要な物が？】

「あぁ、温かい飲み物が欲しくてね」

【それなら、私にお任せ下さい】

甘楽はスッと消える様に行動した、彼女はこの城の中に自分の巣を作ってあるらしく、そこから厨房等に直行可能なのだ、以前エヴァ

の部屋に忍び込んだらしい、二人とも無駄に仲が悪くエヴァの部屋には入らないよう指示を出している程だ。放っておくとエヴァの部屋は蜘蛛の巣だらけに成るだろう、恐ろしい話だ。
椅子に座りながら雪の積もった外に目を向けた、湖には氷が張っているようだ。エヴァがその内釣りに行こうと言って来る気がしてならない。彼女の中身は殆んど１０代前後から変わっていないのだ、少し前にも雪合戦をやろうと誘われた、妙に子供っぽい・・・。

【紅茶でよろしかったでしょうか？】

「紅茶は僕のお気に入りさ、ありがとう」

器用に指から糸を出して中へぶら下がりながら降りて来る彼女。その手には御盆と紅茶が乗っていた。温かそうに湯気が出ている。その紅茶の横には妙に懐かしく見る黒い塊、ソレは今ではかなり高価なモノの筈であった。甘い芳香が鼻孔を擽る。

「――チョコレートなんて、良く手に入ったね」

サササッと彼女の手がメモ帳に走る。

【少し前に島に漂着した商人を助けたではないですか。その時にレシピと材料を頂いたのです】

「・・・うん、味も悪くない。甘楽は才能が有るのかもね」

ペコリと頭を下げた女郎蜘蛛の甘楽、その光景は美しくもあり、奇妙でもあった。

――――――――――――――――――――

―――――――
――

近づいて来る白い足音、その手には【白の古書】、牡丹が持っているその本とは違い文字の様な者が見当たらない、それを持っている男も白く、整った顔立ちの青年であった。

「あぁ、何処に居るんだい私の愛おしい■■」

そう呟く男の声は何処か不気味な程冷めている。

―――――――――――――――
――――――
――

「・・・」

【どうしました？牡丹様】

紅茶を手に持ったままベッドの上に座り行動をぴったりと止めている牡丹に甘楽は不思議そうに頭を傾げた。牡丹はハッとしたように紅茶を啜り、「何でも無いよ」と彼女の頭を撫でた。

「そう言えば、少し前に切った僕の髪の毛はまだ残っているかい？」

【確かに有りますが・・・】

「悪いけど、それを持って来てくれないか？」

【承知いたしました】

何を思ったか彼女は少し前に切った自らの髪の毛を持って来るように命じた、彼女の手にはナイフと細長く加工された木が乗っていた。甘楽がその髪の毛を持って来た、その髪の毛を彼女は上手にスススッと加工していく、そして少しの沈黙の後にソレは完成した。気の先には黒い彼女の髪の毛が付けられているそれ、そう、ソレは誰もが見覚えが有るモノだ。
筆、そう、日本でも良く使われる筆である。

「入るぞ牡丹・・・？なんだそれは、新しいマジックアイテムか？」

「そうだよ、僕の髪を使った筆さ。後は・・・」

彼女は、ナイフで自分の指の腹を少し気づ付ける、するとそこから少しの血が垂れ筆の木の部分にしみ込んだ。赤い彼女の血はジュルッとその木の中へと吸い込まれていく。

「なっ何をしているんだ！病み上がりだと言うのに！！」

【全くです！治療具を持ってまいります！！】

「・・・そんなに深くも切っていないのだけれど」

「【免疫が低くて風邪で死に掛けた者のセリフか！！】」

「・・・（ショボーン）」

そんなやり取りが有った後、彼女の指には消毒が施され包帯が巻かれた、そしてエヴァは彼女が持っていたその筆を不思議そうに見ている。確かに何処からどう見てもあまり変わりの無い筆だ。しかし、

何かがおかしい。

「その筆はね、僕専用のマジックアイテムなんだよ」

「ほう、どのような効果が有るのだ？」

「東の方の国ではね、画竜点睛と言う言葉が有るんだ。絵が飛び出してくると言う事だよ」

屏風に描いた虎が飛びだしてきたり、龍が空に飛んだりと、東に国ではそう言った話が多い、掛け軸の中に妖怪が住む事が有るほどの島なので不思議でも無いかもしれないが。

「僕の血は、それなりに希少価値の高い物でね。おかげで、それが作れたんだ」

因みに、対価は特にないが簡単に言うのなら墨だろうか。書く物によってソレは強さを変える、因みにコレは彼女自身の能力ではなく、彼女が加工した木の能力である。世界でも珍しい事だ、ただの物質が能力を持つなど、どこぞの教団が知ったら回収に来そうだ。イノセンス！とか言いながら。

「嫌ね、僕の良く当たる勘がコレを早めに作っておけってね」

「・・・お前の予感はたまに当るからな」

彼女が適当に明日は雨だと思うと、その次の日は確かに雨であった事が多いのだ。恐らく世界線を越えた時に少しだけ世界とリンクしているのだろう。すぐにこの繋がりも無くなるだろうが、ある内は使わせていただこう。

「僕の敵が、この世界に来たみたいだからね」

そう言った彼女の瞳は、退屈そうではなく目の前にある玩具で遊べる瞬間を待ち望んでいる子供の様であった。

7話・魔導具のお話（後書き）

狂気的な笑みを浮かべたのは何故か・・・

8話・龍のお話（前書き）

かなりの駄文なので、読むときには注意して下さい

8話・龍のお話

――彼女の数奇な運命――

「キティ、行くよ」

「・・・は？」

「は、じゃなくて。行くよ」

急に変な事を言いだす牡丹、彼女の恰好は完全に着物姿で、木モノの上に羽織を羽織っていると言う感じだ、彼女の横には甘楽が控えている。何時もの彼女だが、彼女の手には釣りの道具が有った、どうやら釣りに行くようだ。エヴァはそれを理解すると「私も行くのか？」と彼女に疑問をぶつける。

「当たり前じゃないか、僕一人では無理だからね」

そう言った彼女の従者、甘楽はこちらを少し睨んでいた。彼女はどうやらエヴァを警戒しているようだ。それにしても物々しいモノを持っている。少し前に彼女が造った魔導具（マジックアイテム）、恋呪の筆と言うモノを彼女は装備していた、そして彼女が持っている竹筒の中には墨が入っているのだろう。

「釣りに行くのに何故そんな重装備なんだ」

「最近、この孤島では雨が降らないじゃないか」

「？あぁ」

「そう言う事だよ」

全く解らなかった、彼女はすぐに行動開始する癖が有るらしく、常に準備万端である。甘楽は恐らく保険であろう、彼女の中の鬼と、彼女の持つ筆、コレだけでもかなりの戦力なのだから。
エヴァが準備して来ると、彼女は外で待っていた。彼女はエヴァを見ると早速と言うように歩きだした、エヴァはすぐに彼女の後を付いて行く。

「この辺で良いかな」

彼女達が辿り着いた場所は島の中心近くにある大きな湖であった。澄んだ上質な水は綺麗に太陽の光を反射している。そこに牡丹は餌を付けずに釣りを始めた、甘楽も器用に指から糸を垂らし釣りをしている。エヴァも2人と同じように釣りを始めた。
釣りとは、長い時間魚が来ずに待っている時間が有る、人は日が暮れる少し前までのんびりと釣り糸を垂らしていた。

「・・・此処は本当に魚が居るのか？」

「――そろそろ良いかな、時間も良い具合だし」

彼女は釣り道具をしまうと、筆を持ち、その筆の先を墨に浸した。そしてその筆を宙に走らせた瞬間にその筆の能力が発揮される。書かれたモノが宙に浮いている。彼女が書いた物は簡単な物だった、墨で書かれた釣り道具はズルルッと動きだし、彼女の手の中に具現した。
普通なら有り得ない光景なのだが、実はこの筆の木は神木と言われたモノの一部なのだ、これ位の能力は持っていても可笑しくないほ

ど古い物らしい。

「さて、そろそろその姿を現してほしいな」

彼女が投げ込んだソレはヒュゥンッと風を切る音と共に湖に投げ込まれた。糸さえも墨で描かれたソレは見事なまでに水の中に吸い込まれ、見えなくなる。

夕暮れの赤い光りが水面に反射した瞬間であった。彼女の釣竿がぐっと引っ張られる、もちろんそれを牡丹が引ける筈もなく、エヴァが彼女の変わりにその墨の釣竿を引いた。

人間を片手で簡単に引き避けるほどの力を持つ吸血鬼、その力を生かし一気にそれを釣りあげる。

――銀色に光輝くその鱗、立派な角、その巨大な巨体。それはまさしく幻獣のトップとも言われる物であった。

――――龍神――――

土地神の様にその土地に住まい、そこを治める種族だ。知能は人間よりもはるかに賢く、人間の言葉を解する者も多い、その力は強大でまさに天災とも言える程の災害をもたらす時が有る。

「ななな っ何だこれは！？」

「この島の龍神だよ、最近雨が降らないのはコイツのせいさ」

≪・・・人間如きが、我を呼び出すとはどう言った事だ≫

「君が仕事をしないから僕が此処に来たのさ、さぁ、さっさとこの辺りの天気を元に戻しな」

≪・・・それは出来ぬ、我の知った事ではない≫

「・・・へぇ」

牡丹が嫌に不気味な笑みを浮かべた、最近水不足でエヴァの持っているワイン系の物しか呑んでいなかったようでかなり不機嫌なのだ。それに彼女が趣味で育てていた植物も全滅した。

「龍如きが、僕に意見するとは良い度胸だよ」

彼女は筆で空中に【龍】と漢字を書く、するとどうだろう、その漢字が変形しまるで生きている龍の様に成ったではないか。しかも龍神よりも2回りほど大きなモノだ。黒い墨の鱗が不気味に赤い夕暮れの光を反射する。

≪何と・・・異能であったか≫

竜神は口に火を溜めると墨の龍に向かいそれを吐きだした。豪炎が龍を焼くが墨の龍は全く変化を見せない、それ所か墨が剥がれて本当の黒い鱗が露出したではないか。

「ぼ、牡丹、アレは・・・」

「キティ、女性の髪は良く魔力を通すんだ、だから僕は自分の髪の毛をこの筆に使ったんだよ」

黒い龍は竜神に容赦なく噛みつく、波立つ湖、牡丹は静かにその光景を見ていた。

≪貴様！龍族としての誇りは無いのか！？≫

≪■■■■■！！！！≫

叫びに成らない悲鳴が周囲に木霊する。龍の血が周囲に飛び散り赤に染めて行く。それでも黒い龍は行動を停止しようとしない。何故なら龍は知識等無い、墨で作られた存在だからだ。元が墨なので知識など保有する筈もなく、ただ攻撃を繰り返す。

≪ガ・・・ゴォ・・・・・≫

「君は僕達を追い出そうとしたようだけれど、僕はそんなに気が長くないんだ。我慢を知らない現代っ子とは良く言ったモノだよ」

≪やめ・・・まだ・・・死にたく無・・・≫

墨の龍が消えかかってきた、それと同時に竜神も虫の息に成って行く。

「牡丹、殺さなくても良いんじゃないか？」

「あのねキティ、コイツは僕達を追い出すだけじゃなく、転生者を創り出そうと力を溜めていたんだよ？許せる筈が無いじゃないか」

そうでなくても、最近は挑戦者に混じって転生者も来ていると言うのに、これ以上増やされるとこちらが殺される危険性が有る。少し前なんか城が半壊し柘榴が物凄い怒りながら転生者をミンチにしていた。今思い出しただけでも恐ろしい光景である。

【龍が居なくなってしまったら、この島の天気はどうなるのですか

？】

「元に戻るよ、しっかりとね」

元々は人々に信仰されて天候を操る竜神である、これが居なくなっても特に問題はないのだ。墨の龍が竜神を踏みつける、龍が吐きだした血がまるで新しい湖の様に溜まって行く。

「これで、黒の古書通りに竜と遭遇し、それを撃破した訳だ」

いつの間にか、かのじょの手の中には黒の古書が持たれていた。その古書に付着した龍の血が、一瞬で消えたように見えたエヴァであった。

8話・龍のお話（後書き）

何だか疲れた・・・

9話・失敗のお話（前書き）

数年、時代が飛びます。

9話・失敗のお話

――彼女は被害者にも成る――

目を覚ますと、そこは戦場のど真中であった。周囲では人が爆ぜたり、魔法などが直撃して頭だけが千切れたりしている。濃い血の匂い、久々に嗅いだ濃い死の匂いだ。腹の子が、柘榴が笑った気がした。

何故、此処に居るのであろう。昨日はエヴァの魔法実験に付き合って、それから・・・それから?記憶が無い、見事なまでにそこ先の記憶が消滅していた。幸いにも持ち物はすぐ近くにあり、その中に黒の古書が有ったので不便はしないであろう。筆もあるし墨もある。当分はこの戦いの中でも生き残れる。

「鬼神兵だ!!鬼神兵が来たぞ!!!!」

男が声を上げた。男の指をさす方を見てみるとそこには巨大な光の巨人、そして濃い魔法の力の形跡。此処は、この世界は――――

「魔法世界?何故に僕が此処に居るんだい・・・」

嫌に成った。筆を取り出して墨に付け、【龍】と文字を書く。それは再び姿を現した、黒々とした鱗を持つソレは大空に大きな翼を広げて強く大きく啼いた。大地を震わすその雄叫びに鬼神兵や周囲の人間達も怯えた顔に成る。

「アッアイツは・・・闇の福音と並ぶ賞金首の・・・!!」

「百合姫か!?」

「・・・何だろう、物凄い馬鹿にされている気分だし、痛々しい2つ名だね、それ」

龍の背中に乗っている彼女は自分の2つ名にため息を吐いた。墨の龍は鬼神兵に向かいその口から黒い業火を吐きだした。その豪炎は周囲の森を燃やし、兵士を1人残さず溶かして行く。その姿はまさに地獄の女神であった。元々色が白い彼女の肌がその業火に照らされ妖しいまでに妖艶であった。

「・・・僕はただ逃げようとしただけなのだけれど・・・操作が出来ないなぁ・・・この龍は・・・」

彼女の眼の前は焦土に成っていた。村に攻めて来ていた兵たちは既に溶け、戦艦も、何もかもが無くなり後に残ったのは彼女の後ろに居た村人達と、村だけである。戦争のさなかだと言うのに空には青空が広がって来ていた。

「お、俺達を守ってくれたのか・・・？」

「つっ強えぇ・・・」

彼女の周りには何時の間には人垣ができていた、彼女が龍から降りると彼女へ感謝の言葉を告げる者も多く、皆が頭を下げて来る。

「い、いや・・・僕は・・・」

「是非、この村にとどまって貰えないだろうか！？」

長老らしき老人が彼女に話しかけて来た、その目は真剣そのもので

彼女が何時も守りきれるとは限らないと言っても老婆は引こうとしない。最後に折れたのは牡丹であった。

「でもね、僕も危険な存在だと言う事を忘れないでね」

「解っておりますじゃ、牡丹殿」

牡丹には宿の一室が与えられ、食事等も提供されるようになった。牡丹は先ほどの光景を思い出し、世界を渡る前の・・・そう、追放世界での事を思い出した。

――自分の周囲では、常に人が死んでいた。ソレは偽りの母であったり、偽りの父であったり、義理の姉妹であったり、兄弟であったり。または知り合いが、従者が、友が、親友が。次々と死んでいった。既に見慣れた光景であり、守る為に続けて来た事だ。故に既にそう言った事に対する抵抗はなくなっている。目の前で人が死に、人が殺される、そんな事は既に見飽きた――

「嗚呼、これも僕が産まれたモノから背負いだした試練か」

【本当の父親】の事は覚えている。忘れる筈も無い、生きている内にも一度逢うと決めたのだ。その為に世界を渡り、その為に物語をなぞっている。しかし、1つのトラブルが起きているが・・・

「父さん、僕は貴方の子として認めて貰えるかな・・・？」

寂しそうに天井に向かって彼女は呟いた。

数多の世界線を、数多の戦争を勝ち進み、進軍し、殺し、侵した彼女の父、その背中を追うにはあまりにも小さすぎた手、そして能力。愛されるが故に置いて行かれたという悲しみ。奪われた恐怖、それは彼女を悲しませるには十分だった。

≪お姉ちゃん・・・元気・・・だして・・・≫

具現していない筈の柘榴の声、柘榴もエヴァを過ごしていた数年の間にしっかりと喋れるようになったのだ。外見は全く成長していないが。牡丹を励まそうとしている柘榴の声、彼女は牡丹を疲れさせるのは良くないと出て来なかったのだ。

「・・・あぁ、そうだね。こんな所で落ち込んで居ても先には進めない」

彼女は窓の外を見てニッコリとほほ笑んだ。

―――――――――――――――――――――

「伝令！伝令！！普通世界と繋がっていたゲートが襲撃されました！！」

「何だと？！何処の軍だ！！」

「いえ！それが軍ではなく・・・」

何処かの国の指令室、そこには息を切らした兵士と指令者。ザワザワとざわめく周囲の兵士を一括し、彼は状況を聞きだした。

「や、闇の福音です！！」

「そんなっそんな馬鹿な！！アイツは普通世界の大罪人の筈だ！！

何故こちらに来られた！？被害は！」

「重傷者が５８名、軽傷者が１８４７名、死者が１６８名です！ゲートは破壊され既に使い物に成りません！！」

・
・
・

薄暗い森の中、そこには複数のメイド達が待機していた、彼女達の中心に居るのは４人の人物、人形メイドのテルと殺戮人形のチャチャゼロ、女郎蜘蛛の廿楽に悪の魔法使いエヴァンジェリンであった。彼女は奪った世界の地図を見ながら目的の人物が居そうな場所を探していた。

「・・・この帝国と言う所は避けなければな、私達でも軍を相手にするのは面倒だ」

「最初のゲートを襲撃したのは何処のどなたですか・・・」

【同感です】

廿楽の腕は３対に成っていた。妖怪化、そう呼ばれる彼女達妖怪独特の能力だ、彼女達は普段人の形をしているが能力を完全開放する事で妖怪としての姿に成る事が出来る。廿楽の場合下半身が蜘蛛に成り、腕が増え、目が８個に成るのであるが、今の彼女は能力を半分だけ解放しており、腕だけ増やしているようだ。

「何にしろ、早くしないと牡丹が危ない。戦争に巻き込まれる前に救出するんだ」

「はい、心得ております」

【・・・ここら辺の蜘蛛達は見ていないようです】

甘楽はそう伝えると腕を元の1対に戻し普通の人間の姿に成った。
エヴァはメイド達の移動する事を伝え、人形メイド達を散らせる事にした。そうする事で広範囲を探すようにしたのだ。
その中でもエヴァ、チャチャゼロ、テル、甘楽は共に行動する事なる。もしも甘楽が暴走した場合、止められるモノが居た方が良いからだ。
もし甘楽が牡丹の悪い噂を耳にしたのなら、次の日にはその街は生きる者が居ない蜘蛛の巣と成っているだろう。

「牡丹・・・待っていろよ、必ず私達が迎えに行ってやる・・・ッ!!」

魔法実験の失敗でこの世界に飛ばされてしまった牡丹を救う為に、エヴァ達は危険な魔法世界へと足を踏み出したのであった。

9話・失敗のお話（後書き）

「・・・あ、この魚美味しい」

「牡丹殿もそう思いますか？近くの川で釣り人が釣ってきたのですよ」

こちらは、以外と馴染んでいた。

１０話・勤めるお話（前書き）

黒の古書、ソレは一体・・・

１０話・勤めるお話

――彼女は理不尽な断罪を下す者――

空の色は赤く染まっていた、浮いた戦艦の群れの前には数千の墨の獣達。生気の無いその鋭い瞳で兵士達を踏み潰し死体の山を築きあげた。墨の中には鎧を着た兵士の姿や異形の姿までである。それが彼女の作り上げた兵士なのだ、彼女はこの数百年、エヴァとただ無駄に過ごしていた訳ではない、彼女の頭の中には様々な物語が記憶されているのだ、それを具現することくらい恋呪の筆が有れば簡単な事だ。

登場人物を描く時間は有った、後はそれを放出するだけ。

「戦艦、鬼神兵、その他魔法使いや騎士団、そんな物で僕を超えようなんて無理だよ。確かに魔法は使えないが、僕には筆が有る」

彼女が筆を振るうとそこから黒い線が宙に浮いた、ソレは次々と獣や人の形に成り敵軍へと突撃していく。村を守る為とは言え完全にやり過ぎだ。何時の間にか彼女の賞金はさらに増えてしまった。一個大隊や戦艦を落としているのだ、当たり前と言えば当たり前だろう。

「鬼だ・・・戦火の鬼が出たぞ！！」

「こっ殺せ！！我らに栄光あれ！！」

彼等は墨の軍に向かい突撃していく、しかしそれは無意味だ、何せ元々が墨の軍隊、故に魂など無く生きてもいない。ただ彼等は自らの存在が消えるまで主に従うのみである。

「全ては予定された事、僕がその事を忘れる筈がないだろう？」
戦列も組まない墨の兵団は次々と命を狩りとって行った。まるで死神、黒の軍団、古書に残された一節通りに物語は進行している。彼女はただ、その書に従うのみ。
ソレが愛なのだから、それがもう一度会う為の手段なのだから。
彼女は、他者から奪い、自らも捨てて行く。

「戦火の徒め！！覚悟ッ！！」

いつの間にか討ち漏らしたのであろう男が背中から剣を持って近づいて来た、大きなその剣を振り上げ血を浴びた茶色の髪の毛の亜人が、彼女の白い肌にその剣を振り下ろす。
しかし、悲しくもその剣は空を切った。彼女の手を引き避けさせたのは彼女と同じ黒い髪を持つ幼女、長い髪を乱してそのバケモノは笑っていた。

≪さよう・・・なら・・・・！≫

アハハッと言う子供の声と共に男の視界は黒に染まった。

・
・　・
・

「凄まじいモノじゃな」

「えぇ、アレが戦火の徒、鬼とも呼ばれる賞金首です」

彼女の活躍を遠く離れた崖の上で見ている二人組が居た。褐色の肌に頭には角が生えている亜人、帝国の姫であるテオドラである。その横には彼女の護衛と思われる一人の女性騎士、燃え盛る煉獄と成ったその場所を静かに見下ろしている。

「・・・妾とあまり変わらぬではないか・・・」

「・・・戦争とは、そう言うモノにございます」

墨の兵たちが消えたその場所にはもう何も残っていなかった。さら地と化したその場所に立ちつくしのは一人の少女、黒い髪を持った黒い瞳の少女はその手に黒の古書を持っていた。

「――――で、君達さ。さっきから何を見ているんだい？」

「「ッ！？」」

振り向くとそこに居たのは先ほどまで遠くに居た筈の彼女であったその手には本が持たれている。残留魔力からすると市販されている転移魔符を使ったのであろう。アレなら魔力が無くても使用できるのだ。

少女は穏やかな顔で2人を見ていた。

「もしかして、さっきの軍隊の指揮官さん？」

「違う、私達は」

「通りすがりとは言えないよね？だってその服、どう見ても皇族のモノだ」

テオドラの服を指差す牡丹、片手が筆に伸びていた。顔は相変わらずの笑顔であるが警戒しているのであろう、ポーカーフェイスと言った所だ。

「・・・その通りじゃ、妾はヘラス帝国第三皇女テオドラ。お主は戦火の徒、ボタンで間違えないな？」

「丁寧にどうも、確かに僕は牡丹だ。君達の追っている牡丹かどうかは知らないけどね」

彼女は優しくも鋭い瞳を騎士へと向ける、騎士の手は剣の柄を強く握っていた。柘榴が笑う声が聞こえる、角を持つ亜人の騎士、その騎士はテオドラの号令を今か今かと待っているようであった、その瞳は血に飢えた獣と何も変わらない。

「やめるのじゃ、妾はそんなくだらない事をする為に来たのではない」

「・・・ハ」

周囲の殺気が消え、騎士も牡丹も得物から手を放した。テオドラは安心したような顔で彼女に話しかける。

「主の話しは良く聞いている。そこで相談なのじゃが・・・」

「大体読めたよ、僕を帝国の軍に入れるつもりだろう？」

「！その通りじゃ、来てくれるかのう・・・」

「・・・僕は今、有る村に御世話になっているんだ、その村を厳重

に守ると言うのなら」

彼女の姿が、一瞬【彼】と重なる。漆黒の髪に獣のように鋭い眼。その幻影がテオドラにも見えていた。それは一瞬であったが、確かに見えていた、それが何だったのかは解らないが、テオドラは彼女の条件を呑んだ。

彼女は村に帰るとその事を伝える、どうやら此処は帝国側の領地だったらしい。テオドラの権限でこの村には多くの兵隊と軍隊が配備され、牡丹はテオドラの騎士と成った。

「でもね、僕は騎士と言うより君の教育係の方が良いと思うんだ」

「？それは何故じゃ」

「僕は無敵の吸血鬼でも何でもない、頭を切られたりすれば普通の死んでしまう君達と同じだからね」

「大丈夫じゃ！妾が戦地へと出て行かない限りお主も妾と共に此処で生活して貰う！」

「・・・君、結構肝が据わっているね」

――――――――――――――――――――――――

その頃、牡丹とは違う戦場に４人の影が有った、彼女達は目標の人物を探して街を探したりしたのだが一向に情報が入らない。恐らく国が行っている情報操作のせいだろう、その事に苛立ち鬼神兵の部隊を蹴散らしたりしていた。耳に入って来るのは紅い翼と言う者達

の噂ばかり、もう嫌になって来ていた。

「何処に行ってもその男の名前、もう嫌に成ったぞ私は」

ローブを深く冠り姿を隠している女性体のエヴァが呟いた。同じくローブを着た3人が頷く。

「しかし・・・私たちの旅にとっては危険ですね。その翼は」

【障害は排除】

「オイオイ、そう言う訳にもいかねぇだろ？」

彼女達は街の中の人が少ない酒場の奥の席に座った。先ほどの戦場からあまり離れていないので人は少なかった。

「あー！はらへった！！久々に普通の飯が食えるぜ！！」

「もう少し静かにしたらどうですか・・・」

「じゃが、確かにまともな物を食うのは久々じゃのう・・・」

酒場に現れた3人の影、一人は成人の身長が高い剣を持った男性、一人は杖を持った赤髪の青年、もう一人は一見女性と間違えそうな性別不詳の子供であった。

１０話・勤めるお話（後書き）

「・・・一緒にお風呂入りたいのかい？」
「うっうむ！良いか！？」
「（・・・キティみたいだな・・・）」
「（同じ位の者と初めて風呂に浸かったのじゃ・・・！）」

１１話・正義とは、と聞くお話（前書き）

今日も彼女の物語は静かに幕を上げる。

11話・正義とは、と聞くお話

――彼女の側には死神が控える――

崩れ落ちる塔、乱れる光弾、空を割るような悲鳴。テオドラと牡丹が帝国から少し離れた街まで来ていた時にソレは起こった。空に浮かぶ鉄の船、光弾をまき散らしながら人の命を奪っていく。倒れた少年、友と信じていた者に踏まれて血を流す。此処は戦場と化したのだ、逃げまどう人々、混ざり合う種族、降下して来た兵士、その鋼を幼い花売りの少女に振り下ろす。舞い散る赤、倒れる少女、慈悲など存在しなかった。此処が戦場、地獄の底。

「テオドラ様！こちらへ！！牡丹！貴女も来なさい！！」

「なっ何が起きているのじゃ！！？」

「攻撃です！この街は中立であった筈ですが・・・ッ！」

空から落ちて来る鉄の塊、それが外の世界の物で、しかも殺傷性の十分有るモノと気付けたものは何人だろうか、ソレは空中で眩い光りを放ち爆発した。爆風が周囲の木を、家を薙ぎ倒す。

「御無事ですか！！？」

「だ、大丈夫じゃ」

「・・・」

「牡丹？牡丹！！返事をしなさい！！」

プルプルと震える牡丹、その手には千切れてしまった本の一部、彼女が最近買った本であろう、分厚かった本は見る影もなくずたずたに成っていた。黒の古書ではないが彼女にとっては最悪の出来事だ。彼女は着物の中から一枚の紙を取り出した、ソレには既に文字が書かれていてその文字は彼女が撫でると変化を見せる。

【鬼神兵】

黒い鬼神兵が、それも普通の物より大きなモノが彼女達3人の前に立ちあがった。その鬼神兵は何処かの鎧武者の様に武装しており、その手には日本刀のような形をした武器を持っている。

「・・・だ・・・」

「？」

「まだ・・・読みかけだったのにッ！！」

彼女の声と同時にその鬼神兵はその剣を戦艦目指して振り下ろした、刹那、その戦艦は綺麗に2つに割れ大地へと落ちて行く。兵士は踏みつぶされ鬼神兵は黒の鬼神兵に切り倒される。酷い無双状態だ、牡丹は肩で息をしながらフラッとふらついた。最近彼女はこの術を使い過ぎている、その疲労が来たのであろうか。元々身体の強くない故に体力もそんなに無いのだ。

「・・・っ通信入りました！！・・・敵側に紅い翼と言う傭兵が付いているようです！！その人数・・・7人！！？」

「なんじゃと！？」

「・・・ケホッケホッ・・・どうしたんだい？そんなに深刻な顔で」

「紅い翼・・・最近噂の傭兵じゃ、面倒な程に強いと聞いておる」

すっきりしたような顔で彼女は情報を求める、と、彼女の召喚した墨の鬼神兵が何者かによって倒されたではないか。先ほどまでの無双は何だったのか、鬼神兵の居た場所の近くには数人の人影が有る。

「・・・テオドラを頼んだよ」

「承知だ」

「なっ何処に行く牡丹！！」

「何処って、敵の足止めに決まっているだろう？」

「駄目じゃ！！お主が勝てる相手ではない！！殺されてしまうぞ！！？」

「もし、僕が此処で死んだのならそれは運命だったんだよ」

牡丹は着物の上に羽織っていたローブのフードを深く冠った。顔が見えないようにしたのだ。もし姿がばれてしまえば敵は全力で殺しに来るだろう、戦火の徒とまで言われる者を生かしておくはずがない。しかしフードを冠っていれば体系は少女なのだ、少しは油断してくれる間も知れない。

彼女は覚悟を決める様に鞄の中の黒の古書を強く握りしめた。

――――――――――

――――
――

赤髪の青年が、壊された街の中心に立っていた。彼の前には無残にも殺された花売りの少女、彼の仲間もそれを唖然と見ているようであった。彼等は戦争とはこういうモノだとは思わなかったのか、震えるその手を隠しながら立ち尽くしていた。

「ハロー、君が襲撃犯側の主戦力かい？」

彼等の眼の前に現れた幼い少女の様なローブ姿の者。口元しか見えていない彼女はニッコリとほほ笑んだ。

「君が殺したのかい？その可哀そうな少女は」

「ち・・・違う！！」

「解らないよ、君の放つ魔法の巻き添えに成ったのか、それ以外か」

「俺は・・・殺していない・・・」

「それは有り得ないよ」

冷たい彼女の言葉が、彼に圧し掛かる。

「君が倒して来た兵士、それを君は殺してきたのだろう？君の手は私と同じく、血が滴っているよ」

彼女は、一人称を僕を私へと変えた。

「っ黙れ！！」

バチッと彼の手から電撃が流れた、それを合図にするように彼女は袖の中から数枚の紙を周囲にばら撒いた。

【虎】【狼】【熊】【重装備兵】【魔法使い】【奴隷】【剣闘士】

文字が、次々と変化し兵士が、獣が生まれて行く。

「馬鹿な・・牡丹と同じ技だと・・・・！？貴様、その筆何処で手に入れた！！？」

傭兵達の中にはエヴァまで居た。その他にもテルやチャチャゼロ、廿楽、揃いも揃って何をやっているのかと考えた牡丹だがソレに答えている暇も無い。流石最近噂の傭兵、次々と墨の兵士達が倒されていく。

「ッこれならどうだい？」

【鬼神兵】【古王】【龍】【英雄王】【銃槍兵】

目の前が歪んだ、無理な召喚だ、倒れないだけましだろう、柘榴の心配そうな声が聞こえる。だが、此処で引く訳にも行くまい、恩は返さねばならない。テオドラには少なくとも恩が有る、彼女のおかげで様々な本を読めたし、目的の情報も少しでは有るが入手できた。

「龍までッ！お前、まさか・・・牡丹か？」

「闇の福音！！何をしているのですか！攻撃の手を緩めないでください！！」

剣を持った男性の声がエヴァに飛んだ。

「・・・ま、不味いね。まさかこれ程までに強いとは」

龍でさえも、彼らの前では簡単に倒されてしまった。追い詰められた彼女、その後ろは朽ちた家の残骸とも言える壁である。彼女は筆に手を掛けようとするがその手は少年の魔法の矢で弾かれる。その矢が当った場所は肉が裂け、紅い血が流れ出す。魔法世界の医療術なら後も残らず治療できるであろうが、今の彼女にはかなり辛い物だった。

「・・・私を、殺すのかい？」

「ッ」

赤髪の青年は唇を噛む。

「戦争とはそう言うモノだよ、誰かが誰かを殺し、誰かがそれを憎み、また殺す。それの繰り返しさ」

霞んで行く視界、意識が少しずつ遠くなる。力を使い過ぎたか・・・。そう納得した牡丹は鞄だけは奪われないようにとそれを自分の身体で強く抱きしめた。こうすれば死んでも死後硬直で固く固定され、奪われないだろう。

まぁ、殺されればの話しだが。

遠くで、聞き覚えの無い声が聞こえた気がした。

１１話・正義とは、と聞くお話（後書き）

「急いで軍を集めよ！！救出に向かうのじゃ！！」
「早急に準備しなさい！」
「快速戦艦じゃ！必要な物だけもて！！」
「行きますよ！！出撃！！！」

――――――――――――――――

暗い、暗い、暗い
《お姉ちゃ・・・ん。だい・・・じょうぶ？》
隣からは、柘榴の優しい声が聞こえた。

１２話・翼との話（前書き）

会話メインです

12話・翼との話

――【黒の古書、ソレは彼女の存在自身かもしれない】――

テオドラガ駆けつけた時には既にそこには誰も居なかった、牡丹が居たと思われる場所には大量の血、そして牡丹の物と思われる紙が複数。多くの傷跡が残るその場所で彼女は涙を零した、もう少し、もう少し自分が早かったら、もう少し自分が強かったら、と。

――一方その頃、荒野では戦いに疲れた紅い翼（仮）が焚き火を囲んで休憩していた、彼らの今日の食事は野ネズミの肉入りスープである。彼らの側には倒れた顔色の悪いと思われる少女、フードには何かの術式が組み込まれているようで脱がす事が出来なかった。

「しかし、面倒な事に成りましたね」

「何がだ？詠春」

呆れた顔をしてゼクトが赤髪の青年、ナギへと質問の答えを返す。

「あのローブに縫い付けられている紋章はヘラス帝国の皇族を守る騎士や教育係に与えられるモノじゃ、そしてこの者の身なりから見ると騎士ではないだろう・・・つまり、ワシらは教育係と戦闘を行い、それを拉致して来た事に成るのじゃ」

「・・・マジかよ、良くわかんね―けど、ヤバい？」

「当たり前だろうが鳥頭、この者の正体が何にせよ、私達は帝国側に完全に目を付けられたぞ」

「ケケケッ御主人はソワソワしてるな」

「当たり前です、彼女が牡丹様である可能性は非常に高い」

【身長や体重も全く同じでしたしね】

スープに入っている玉ねぎを上手く避けて食べているエヴァに詠春の眼が光る、彼女の皿には普通より多くの玉ねぎが入っているようだ、食の戦いが此処には有った、一方ゼクトは倒れている少女の世話をしているのであるが、フードから見えている彼女の口元を見て顔を真っ赤にしていた。意外と初心である。

「・・・う・・・」

「「「「「「「！」」」」」」」

「兎・・・」

「・・・・何がだ」

「寝言の様じゃの・・・」

「食いたいのかな・・・兎」

「く・・・う・・・座薬・・・兎・・・」

理解できるモノではなかった。完全に変な言葉しか出て来ない、彼女の寝言は変人的でもあった。しかし深く冠ったフードのおかげで彼女の顔は口元しか見えず、どんな表情なのか全く解らない。

「ほれ、飯じゃぞ～、目を覚まさんか」

「そんなに簡単に起きる訳が」

「すぅ・・・す・・・誰だい、君」

チラッと覗いた黒い瞳がゼクトの顔を捕える、邪魔に思ったのかフードを普通に脱ぎ棄てた彼女は周囲を見渡すようにきょろきょろと見渡した。周囲は完全に荒野、荒れ放題である、文明の火等は今赤髪達が食事の為に囲んでいるソレしかない始末だ。
両手は縛られている、足は・・・駄目か、両方縛るとは何と言う用心深さ。

「ぼ・・・牡丹・・・牡丹！！」

「あ、やぁキティ。迎えが遅いよ」

「心配しましたよ牡丹様！」

「僕は疲れたよテル」

「ケケケッ御苦労さまってな」

「君、何時の間にか少し大きくなってない？成長した？人形なのに？」

【痩せました？】

「う～ん、実は最近少しね」

質問攻めであった。牡丹はニコニコと笑っているがその肌の色は不健康その物だった、元から白い肌は少し蒼くなっている。恐らくしっかりと栄養を摂取していなかったのだろう。帝国には多くの本が有る筈だ、食事も摂らずに本を読む彼女の姿は簡単に想像できた。エヴァが彼女のローブを少し持ち上げ、着物を少し脱がす、男性陣は慌てて目を閉じた。

「肋骨が浮き上がって来ているぞ！？何でこんな短期間に痩せたんだ！もっとしっかり栄養のあるモノを食べろ！！」

「そう言えば、最後に食べたご飯は3日前のキノコスープだけだったかな？確かにお腹が空いたね・・・」

普通の人の2倍の栄養を必要とする彼女の筈だが、どうなっているのであろう。柘榴にも彼女から栄養が提供されているので、牡丹へ行く筈の栄養は全て柘榴が吸収してしまっていたのであろう。着物を元に戻すとエヴァは彼女の手のローブを切った、それと同時に足のローブも切られる。そして目の前に差し出された野兎の肉入りスープ。詠春の力作だ。

「食えるか？」

「僕は介護が必要な老人ではないよ」

彼女が皿を掴もうとした途端、その手は空を切った。不思議そうな顔をする牡丹。

「お前、実はまだ目眩がしているだろう」

「良く解ったね、確かに元気ではないよ」

エヴァは自分のスプーンを使って彼女の口の中にそのスープを流し込む、程良く冷めたスープが彼女の喉を久しぶりに潤した。ゼクトはいまだに牡丹の顔をジー、と見ている。

「少年、僕を見ても面白くないよ。甘楽を見た方がずっと面白い」

「い、いや！そうでもないぞ！？」

「・・・小僧、牡丹は渡さんからな・・・」

その時のエヴァの声はまるで地を這う獣の様な恐ろしい声であった。牡丹は紅い翼のメンバーに簡単に自己紹介を終えて少し横に成った、手の傷は既に魔法か何かで癒えていたが、血液が足りない。幼い身故にアレ程度の出血でも危険だろう、程度と言っても結構出ていたが。

「さぁ、帰ろう牡丹。私達が此処に居る理由はもうないだろう？」

「・・・残念だけれどね、僕はまだ此処に居なければならないんだ」

「なっ何故だ！？お前をこれ以上危険な場所には置いておけない！！」

「・・・僕の敵がね、此処に居るんだよ」

一瞬であるが、彼女の瞳に狂気の色が映った。本の一瞬で有るが、彼女の瞳が血よりも美しく紅い瞳に見えた。

「安心しろよエヴァ、無敵な俺達と一緒に居れば大丈夫だろ！」

「・・・そう言う訳にも行かないよ、僕は帝国に協力している身だ」
ローブの紋章を彼に見せながら牡丹は儚く笑った。詠春は先ほど彼女がエヴァに脱がされた時から顔を赤くしている。もしかして、見たのであろうか、女性に見られるのは同性であるが故に馴れているが、男性に見られるのは好きではない。

「もう少し休んだら、僕は帝国側に引きかえすけど、エヴァはどうするんだい？僕としては一度廿楽やテルを城に置いて来て欲しいのだけれど」

「【なっ何故ですか！？】」

「君達は僕のメイドでペットだ、それに帰ったら城の中が埃だらけは嫌だろう？」

「う・・・確かにそうですね」

【牡丹様の御命であれば・・・従うのみです】

「良い子だね」

牡丹は彼女達の頭を撫でて、ほほ笑む。

「・・・解った、だが、私は帝国でも関係なくお前の所に行くからな」

「あぁ、そうしてくれるとありがたいね、さっさとこの戦いに終止符を打ちたいから」

そう言うと、牡丹は妖しく笑ったのであった。

12話・翼との話（後書き）

「妾が・・・妾のせいで・・・っ！」
「どうしたんだい？お菓子でも食べそこなったみたいな顔して」
「っ！」
「？」
「・・・（気絶）」
「えぇ！？何で！！？」

１３話・侵入のお話（前書き）

時間軸がめちゃくちゃ・・・

13話・侵入のお話

――彼女の世界は混沌よりも深い――

静かで不気味に暗い森、その中に立つ一人の影。漆黒の鎧を身に纏い目の前にある忘れ去られた墓標に祈りを捧げた、重厚な鎧のせいでその者の顔を見る事は出来ないが、鎧の形状から見て女性であろう、その腰には独特に大きな剣が装備されている。黒いマントを風に遊ばせ、その人物は静かに祈りを捧げ続けた。

――帝国、テオドラの私室。その一角には最近生き返ったなどと変な噂が流れている人物、牡丹が静かに本を読んでいた。その手にある物は【世界英雄記】、彼女の持つ筆でコレを書けば新たな戦力と成るであろう。

「・・・お主、睡眠はしっかりとれ」

「何を言っているんだい、僕は目を開けながら寝ることもできるよ」

「ソレは寝ているとは言えんよ・・・」

その分厚い本を閉じて彼女は少し伸びをした。最近は戦争の方もあまり目立った動きはなく、エヴァ達が離れた紅い翼はその活動を少し控えている。牡丹のあの言葉が効いたのであろう。

「皇女様、少しよろしいか？」

紅い髪で紅い髭を生やしたいかにも武人と言った雰囲気を漂わせる、まるで猛毒を持つサソリのようだ、血に飢えた獣の眼が牡丹を睨む、まるで面白くないと言うかの様に。

「テオドラに何の用かな？将軍殿」

「・・・お前には関係の無い話だ」

「僕は彼女の騎士であり教育係、関係は有ると思うけどね」

狂気の瞳と、野獣の瞳が交差する。方や最前線では非道とまで呼ばれるサソリのスコーピオン将軍、本名は明かさず偽名である事は確実であった。そして方や戦火の徒、多くの死を見て来た彼女の瞳は既に普通の人間のそれとは比べ物に成らないほどの観察眼が身についていた。

「殿下がお呼びです」

「む・・・？父上がか、しょうがない。どうせ牡丹を前線へと送りたいと言う話じゃろ・・・。適当に断って来る」

「僕も一緒に行った方が良いかな？」

「いや、大丈夫じゃ。では行って来る」

そう言うと彼女は将軍と共にその部屋を後にした。

――それから少しの時間が過ぎた、しかし中々帰って来ない。何かあったのかと思い牡丹が部屋のドアを開けるとそこには血まみれの兵士の屍が転がっていた。何時殺されたか、物音はしなかった、声も何も聞こえなかった筈だ。死体を観察して見ると背中に大きな切り傷が有る。まるで暗殺の様な殺し方だ。

「ッ君まで」

その死体の中には共にテオドラの騎士を務めて来た女性騎士の姿が有る、喉が切り裂かれていた。目を見開きその手は剣を強く握ったまま放そうとしていない。まるで相手を睨みつける様にして死んでいた。

「あぁ・・・、そう言う事か、嫌な時代だ。墓穴を掘ってもきりがない」

牡丹は急ぎ足で国王の下へと向かった、そこにはテオドラの父が座っている筈で有ったがそこに座っていたのは白い髪の毛の青年、魔法使いの様であった。周囲の従者は石化していてまるで石像だ、国王はその口から血を吐き倒れている。

「やあ、戦火の徒、元気かな？」

「君は・・・もしかすると噂の組織の人間かな？」

彼女の手が自然に筆に伸びる、気付かれないように静かに。

「君にも少しの間眠っていて貰うよ、今君に動かれるとこちらとしては不利に成るんだ」

彼の手には魔力が集い牡丹へと向けられる、放たれた光線は彼女の細い身体に向かって容赦なく突き進む、彼女は袖の中から数十枚の紙をばら撒いた。

【壁】

そう書かれた紙は形を変え高くそびえる防御陣が出来る。しかし白髪の青年はその程度では諦めなかった、恐るべき速さで彼女の後ろに現れたその影、その手には既に魔力が満ちている。コレでは柘榴

も間に合わない、そう考えた牡丹は目を強く瞑った、しかしその時重い剣の音が響く、白髪の青年は脇腹を押え、その手のスキマからは赤が覗く。
黒い鎧に身を包んだその騎士は、漆黒のマントをその鎧に付けて剣を構えている。

「君は・・・まさか彼が言っていた転生者・・・？」

「愚問、私を転生者等と、あんなモノと一緒にするな！」

鋭いその剣撃、黒の古書にさえ乗っていないその騎士の姿。青年の身をその剣が掠める度に赤が溢れだす。

「このままでは危険だね、いったん引かせて貰うよ」

「逃すか！」

黒の騎士が放った転移符、ソレは青年と騎士を別の場所へと転移させて言った。牡丹が呆然としていると彼女の後ろには一人の男の影が有った。その男は逆光で見えなかったがその口元は酷く醜く笑っている気がした。

「大人しくしていれば良かったモノを・・・」

首元に走る衝撃、痛みは無かったがそのまま意識は刈り取られ、彼女の視界は黒一色に染まっていた。

――――――
――――
――

「帝国が襲撃を受けたって！？そんな馬鹿な事が有るか！！」

ゼクトの大きな声が周囲を震わした、情報屋の言う事は正しかったようで魔法世界の情報誌などでは隠蔽されては居るが襲撃の真実を語っている。しかし、情報屋が言うには第三皇女が誘拐され、その騎士は全滅、国王も襲撃時に他界したとのこと。ゼクトやナギ、そして詠春の頭の中には病的に白い肌の儚い一人の少女が浮かぶ、お人好しの彼らだ、まずナギが確かめに行こうと言う。

しかしそれを止めたのは最近仲間に加わったアルと言う中世的な魔法使いであった。変態ではあるが彼の言葉は正しい所が多い。

「貴方達は少し前に帝国側の関係者を拉致したでしょう、今行けば犯人扱いです」

「じゃが！」

「ソレについては俺達も協力しよう」

彼らの後ろに現れたのはガトウと言う男、彼は弟子を連れながら煙草を吸っていた。

どうやら彼の国の女王も攫われたと言うのだ、両者ともに戦争の終結を望んでいた者同士が誘拐されている。同一犯である可能性が大きい。情報屋の店の奥から出て来た筋肉男がゴキゴキと首を鳴らした。

「で、結局どうすんだよ。はっきりしねぇのは嫌いだぜ」

「・・・よし、その姫さん達とアイツを助けに行くぞ！！」

「ふふ、そう言うと思いましたよ」

「仕方の無い奴じゃのう・・・」

「じゃあ、俺は姫様達が居ると思われる場所を調べて来る」

そう言うとガトウと言う男は弟子のタカミチを彼等に任せて情報屋から出て行った。彼も戦争の終結を望んでいるのであろう。紅き翼が行動を開始しようとした時に、情報屋は嫌な笑みを浮かべながらこう言った。

「もし、御宅らがこの情報を買う気なら、良い事を教えてやるよ」

この情報屋、性格はアレだが仕事はしっかりしている。噂ではなく真実の情報を教えてくれるのだ。皆は顔を見合わせて、その情報を買う事にした。今の時代では情報がモノを言うのだ、あまりにも準備不足であると帰り打ちにあう。

「キシシッ毎度、じゃあ教えてやるよ。姫さんの他にもう一人黒髪の女が捕まっている。噂じゃ戦火の徒だとか言われていやがるが本当の事かはさっぱり判らねぇ、だが、そいつも助ける気なら急いだ方が良い」

「ッ何かあるのですか？」

詠春の顔が険しくなった。ロリコ・・・少女趣・・・紳士である彼的には放っておけないのであろう。

「闇の福音も動き出しているようだが・・・早く助けねぇと黒髪のお嬢ちゃんは死んじまう、抵抗出来ねぇ様に半殺しにされてるらし

いぜ」

――彼女は、元々身体が強くない。その内側に鬼を飼っていてもソレは変わらないだろう。鬼が出て来られないまでに痛めつけられたと言う事は、瀕死の状態かも知れない。幸い彼女の着ているローブは他者には脱がせられないように強い術式が使われているので純潔は奪われていないだろうが、危険な状態である。

「急ぐぞ！！」

「「「「おう！！」」」」

彼女達の冷たい身体を見ない為に、彼等は全力で捜索に入ったのであった。

１３話・侵入のお話（後書き）

体が重い、殴られた部分が酷く痛む。茨のような拘束具が体に刺さり血が流れ出す。顔以外には既に多くの痣があった。昔から時間はかかるが傷跡は残った事が無いので、傷跡は消えるだろう。
あぁ、此処は寒いな・・・。彼女達は大丈夫であろうか・・・

薄暗い檻の中で、鎖の重い音がした。

１４話・救出のお話（前書き）

駄文の匂いがする。

１４話・救出のお話

――彼女は痛みに馴れている――

鎖が引っ張られる音、その音は２人の姫の耳に入っていた。新しく誰かが連れて来られたのだろうかと思い顔を上げると一人の少女が投げ込まれてきた、顔に付いた泥、痛々しい痣、口からは少しの血が流れた痕があった。不健康な程に白い肌は病的に青白くなってきていた。恐らく何かの病に侵されているのであろう。虫の息に近い彼女の着ているローブには帝国の紋章が縫い付けられていた。

「牡丹！！」

駆け寄るテオドラ、その様子を見ている一人の女性。心配そうな表情を浮かべていた、彼女を奥にあった光のたる場所へ運ぼうとしたテオドラ、彼女の身体が異常に冷たかった。

「いっ息は有るの・・・」

「だ、大丈夫なのか？そいつは」

「わ、解らぬ・・・」

荷物は持ったままだが、今の状態の彼女には使えないであろう。それに、目を開けない彼女はただ苦しそうに息を続けるだけだ。

「う・・・そこに・・・居るのは・・・てお・・・どら・・・かい？」

「！気が付いたか！・・・・？何故目を開けぬ」

「血液不足でね・・・一時的に失明しているらしいんだ・・・」

テオドラが彼女に付けられていた茨の拘束具を外す、痛々しい傷跡が有るが付けているよりはマシであろう。しかし困った事に2人とも回復魔法が使えず、牡丹の出血を止める事は出来成った。太陽の光に当り、元の体温よりはまだ低いモノのそれなりに回復して来た牡丹、しかしまだ目は見えていない。一応食事は出されるようで粗末なスープが3人は支給された、一人の姫はそれに手をつけようとはしない、テオドラは自分も食べながら牡丹にもそれを食べさせている。痩せた身体が痛々しい。

「牡丹・・・だったか？妾の分も食べるか・・・？」

「嬉しい御言葉だけれど・・・そんなには食べれないかな・・・食道が細くなってしまっているらしい」

食事を終え、彼女達はふたたび沈黙した。お互い話し事も無かったし、気まずいのだ、互いに敵対する国の姫、何時かは殺し合うかもしれない立場上の者、互いの心境は把握している。

――そして、2日後に食事を終え、未だに完全回復していない筈の牡丹が声をあげる。

「・・・さて、そろそろ暴れるとするかい？」

目の見えない筈の牡丹が壁を使って無理やり立ち上がった。それを叱るテオドラの声を聞き流しながら彼女はローブの下に着た着物の袖へと手を伸ばす、そこからは紙に赤で書かれた文字が有った。

【英雄王】
ソレは、重々しい響きの言葉である。しかし、彼女は今の状態でコレを具現できるのであろうか。筆の能力とは言え彼女も少なからず力を消費している。

「な、何故赤で書かれているのじゃ？」

「牢獄の中に墨なんかないからね・・・僕の血さ」

グググッとそれは形を変えた。悪趣味な金の鎧を持つ一人の青年が姿を現す、完全に悪役と言う様に顔を歪め一つしかない扉を木端微塵に破壊する。その手に持った剣は異様な物であった。

「フハハハハッ我(オレ)をこの程度の檻で封じられると思うたか！」

「「・・・」」

「あぁ・・・気持ち悪・・・」

ソレは兵士達を次々になぎ倒し、道を進んで行く。ソレの後ろに付いて行く彼女達、テオドラともう一人の姫は牡丹に肩を貸している。牡丹はやはり無理な具現であったのかぐったりとうな垂れている。

「我の道は誰にも邪魔立て出来んのだ！！フハハハハハ！！」

そう言って無双しながら道を作っているが、彼の首は簡単に飛ばされた。それはそうだろう、牡丹の血で知識を得ただけのただの墨と同じである。本物と比べると驚くほどに弱体化している筈だ。しかも具現者の牡丹は体調が万全ではなく、瀕死である、此処まで来れただけでも奇跡的だろう。

「困りますな、こうも簡単に脱走されると」

ソレの首を刎ねたモノは静かにそう言った。紅い髪に同じく紅い顎鬚、帝国の紅いサソリの姿がそこには有ったのだ。

「お・・・お主が裏切っていたとは妾も思わんかったわ・・・」

テオドラの声が通路に響く。もう一人の姫もその眼光を鋭くした。牡丹は2人を庇うように何とか立ち上がり前に出る。

「やぁ、僕は君だと思ったよ。殺し方はね・・・」

「どうした戦火の徒、満身創痍じゃないか。そんなんで俺に勝てるのか？」

「ふん、餓鬼風情が。君より僕の方がずっと年上さ」

かすかに視力が戻ったのか、彼女はその瞳は開く。漆黒の瞳が紅の男を睨みつけた。両者は笑いながら己の得物を手にする、多くの血を吸って来た剣と、多くを描いて来た筆。一見牡丹の方が不利に見えるが、互角程度だ。牡丹は自分の身体に有る傷口に筆の先を当て、空中に紅い文字を描いた。

【虎】【狼】【鴉】

ソレはすぐに形を得て彼に襲いかかった、しかし彼はそれを簡単に一薙して消してしまう。流石は紅蠍と言われた男、馬鹿に出来ない戦闘能力だ。

「そんな攻撃では俺は倒せんぞ」

「・・・出番だよ、柘榴」

≪はぁ・・・い≫

闇の靄から現れるその黒い鬼、それを召喚すると同時に牡丹は崩れ落ちた。無理やり召喚したのであろう、柘榴は笑いながらサソリへと近づき、その剣を受けている。彼女の皮膚がそう簡単に切れる筈もなく、サソリの剣は彼女に簡単に止められてしまっている。

「スコーピオンも、鬼は倒せないか」

「そうでもない！」

彼が懐から取り出した物は何かの札であった、それが柘榴の身体に触れた瞬間に牡丹の身体に猛烈な痛みが走る。

「かっ・・・あ・・・っ！？い、異能封じの符なんて・・・何でお前が・・・ッ」

「ふん、出何処を言う訳がないだろうが」

柘榴も弱体化し、震えながら消えて行ってしまった。異能封じ、それは確かに存在するモノだ、しかしそれが書かれているのは黒の古書ともう一つの書だけであった筈・・・。

「なる・・・ほど・・・！君の・・・後ろには・・・奴が居るのか・・・ッ！」

「・・・お別れだ、戦火の徒。悲運を怨んで死ぬんだな」

サソリの剣が彼女の身体へと振り下ろされた。
――その瞬間、サソリの剣は止められその身体には魔法の剣が突き刺さっている。

「君は・・・詠春・・・それにキティ・・・！」

「ガッ！？貴様等！！紅き翼！！」

サソリの呻き声、それと同時にエヴァの魔法の剣がさらに威力を増しサソリを内側から消滅させていく。断末魔すらも聞こえることなく、サソリは世界から蒸発した。

「牡丹！・・・何と言う痛々しい・・・こんな事をした奴らは何処だ！？私がイキテイルコトヲコウカイサセテヤル」

「怖いよ・・・キティ」

ソレに、もう死んでしまっているだろう。エヴァの手からは多くの血の匂いがした。しかし安心した為か睡魔が彼女を襲い、彼女の意識は此処で途絶えたのであった。

１４話・救出のお話（後書き）

「「・・・お前は牡丹とどう言った関係だ（じゃ）？」」

こちらでは、空気が重かった。

15話・協力のお話（前書き）

嗚呼、布団様。アナタの抱擁は恐ろしい、今日も何人がアナタの虜に成っているのか・・・。

１５話・協力のお話

――【彼は多くを殺し、多くを愛した、では・・・彼女は？】――

黒い鎧の兵士が、若い女の首を引きずりながら森の中を歩く、人に忘れた祭壇には無数の首。絶望に満ちた首を杭に刺しまるで供物を捧げる様に【彼女】は祈った。赤黒く変色したその鉄の剣を地面に突き刺し、騎士が主に忠誠を誓うように膝を折った。古いその墓に刻まれた文字は読むことが出来ない程に風化している。

「・・・穢れた女の首で申し訳ありません・・・もう少しで、もう少しで手に入るのです・・・もうしばらく御耐え下さい・・・主様」

彼女は、そう言うとまるでその主を恐れる様に墓に向かって頭を下げた。

首は、年齢関係なく飾られている。まだ若い１０歳前後の少女の首、老いた老婆、成人の女性、様々だ。墓を中心として血が何かの術式を描くように溝が有り、その中に乾く事無く血が溜まっている。

「・・・死んで当然です、私は罪の無い人間は殺していない」

「・・・何故、御返事をくれないのですか。主様・・・」

一瞬ではあるが、鎧の奥から覗いたその瞳には悲しみが満ちていた。

――――――

――――

――

「・・・黒の古書、第３８巻、１４８５ページ。６節目」

誰も居ない静かな城の空間で、彼女は静かにそう告げた。彼女の後ろには上にも横にも大きな巨大な本棚。その本棚は黒の書物で埋まっていた。その中の第１巻だけが抜けたその本棚の前で、口元しか見る事が出来ない女性が耳触りの良い声で本の一節を読み上げる。異様で異端の光景。

「隻腕の戦士と、魔眼の獣」

偽りの本棚、それが此処の名前だ。彼女の後ろにある黒の古書は全て写本である、本物は牡丹が持っているモノ一つで、此処にあるモノはただのダミーに過ぎない。
予言の力も、物語をなぞらせる力も持たぬ、黒の古書を真似ただけの本だけが静かに陳列されている。

「もう、そろそろかしら。私がこの役目を解かれるのも、彼女か彼か、どちらかが本当の此処の主に成るのも」

そう言うと、その女性はニッと笑いをもらす。まるでその時が楽しみの様に。

「待っているよ、私は君達のどちらが来るのか、楽しみにしている」

本棚の他に、何も無い空間で彼女は空と思われる白い空間を見つめた。

―――――――――――――
―――――
―――

「ふん、何じゃ。紅き翼のアジトと聞いてついて来てみれば、ただの掘建て小屋ではないか！」

「逃亡者になに期待してんだよこのジャリはよぉ」

「何じゃと！？妾はヘラス帝国第3皇女、テオドラであるぞ！」

「はっははぁー！」

彼女の名乗りに膝を折ったのはタカミチだけであった。牡丹はロリコ・・・紳士である詠春に背負われて移動している。彼女の傷はゼクトやアルが治療の魔法を掛ける事で何とか落ち着いた、しかし抜けて落ちた血までは再生できずに貧血の状態で青い。彼女を心配するように囚われていたもう一人の姫、アリカ姫も彼女の事をチラチラと見ていた。

「だ、大丈夫ですか？」

「・・・ん、大丈夫だよ。誰かに背負われるなんて初めてだけれど・・・案外気持ちの良いモノだね・・・眠くなるよ」

「おい変態、私と交代しろ。これ以上お前に牡丹を任せたくない」

「大丈夫ですよ、私が責任を持って小屋の中のベッドまで運びますから」

爽やかな笑顔、その隣でアルも嫌に爽やかな笑みを浮かべている。エヴァはその二人をギロリと強く睨むが紳士の前では効果が無い様だ、ほくほくした顔の詠春と、記録魔法で牡丹が睡魔に襲われてい

るその顔を撮影しているアル。彼等にはこの後すぐにエヴァの鉄拳制裁が下るであろう。

「・・・そろそろ、君達にも話しておかなければならないか」

小屋に降ろされると、牡丹は全員の前で大切な話を口に出し始める。彼女なりに彼等、彼女らの事を信用したのであろう。彼女はベッドに座りながらその白い手に黒の古書を取り出した。表紙さえもまるで漆黒の様に黒い黒の古書。それを直視すると背筋が凍るような寒気を覚えた。

「ガトウも言っていた通り、黒幕は存在する。そして、その組織には厄介な男が一人居るんだよ」

「厄介な？そんなもん俺の格闘技で一瞬だぜ、一瞬」

「そう言う訳にもいかないんだ。何せ彼が持っている書物は僕が所有する筈であったこの黒の古書の対のモノ」

彼女が黒の古書の最初のページを開くと、そこには神々しいまでの神々の戦いの事が書かれていた。その一節に在るのは2つ対に成る書物、片方は世界の真実を、片方は神の威光を示すモノらしい。

「黒の古書は、真実を暗号化して教えてくれる」

「白の古書は、あらゆる試練を乗り越えるためのモノ」

「つまり・・・どう言う事じゃ」

アリカ姫が、混乱したように頭を傾げながら聞いて来た。妙に可愛

く見えてしまったが気にしないでおこう。

「白の書物はそこら辺の大魔法使いでも大賢者でも、喉から手が出るほどに貴重なモノでね。【神話を再現できるらしい】」

神話の中では有り得ないほどの破壊力を持った魔神や、山をも簡単に砕く神が登場するように、それを再現できるのだ。しかし残念な事に牡丹はそれを読んだ事はない。契約してしまえば白の古書はその力を彼に貸すだろう。面倒な話し、不老不死すらも再現できる古書だ、アレが今こちらにあったらどんなに楽な事か。

「彼は僕が何とか出来る、でも、彼に接近できないんだよ。恐らく悪魔とかいろいろ召喚しているだろうしね」

「それは・・・本当かの？」

ゼクトが顔を青くしながら彼女に本当かどうか尋ねる、牡丹は証拠を見せる様に黒の古書の一節を指差しそれを読ませる。読み終えた瞬間にゼクトの顔は絶望に染まった。

「こんな事をされれば、この世界はどうなるのじゃ！？」

「世界の上書きは、最高神の位でないとその使用が許されない業だよ。コレを彼が本気で執行したら・・・世界は二度と光を見る事の無い０も１も無い世界をさ迷うだろうね。永遠に」

ソレは、不規則な世界。あると言えばあるし、無いと言えば無い。無限でもあり有限でもある、限界が有れば限界は無い。そう言った摩訶不思議と言える変態世界だ。人間が生きるには必要な条件を何も満たしておらず、しかし死ぬことも生きる事も出来なくなるであ

ろう。

「そこで、少しで良い。僕に協力して貰えないかな？」

彼女は、ニィッとまるで悪役の様に笑みを浮かべる。悪戯を考えた子供の様な笑みだ。

「おう、言ってみな！」

赤髪の青年が元気よく答える、恐らく先ほどまでの会話、理解していないのであろう。

「彼らの支部を全て潰すだけ。後は悪魔を倒して彼に近づければ・・・僕の勝ち。でも、途中で僕が死んだら彼の勝ち、簡単だろう？」

「・・・主は、自分の命を随分と簡単に言うのじゃな・・・」

「仕方ないよ、ソレは。僕はそう言う教育を受けて来た」

暗過ぎる彼女の過去は、既に闇ではなく暗黒なのであろう。どんなに暗い闇でも彼女は一人で生きて来た。途中には信じる者もいたと思うが、目の前で殺されたり殺したりしたのだ、心が壊れてもおかしくない。その教育を施した者達は、残酷にも彼女を神と崇めていた信者達であったのであろう。

人は、神を造りたがる。その神が自分達の言いなりになれば、世界なんて簡単なモノだ。それに気が付いた牡丹はすぐにその者達を欺き、追放世界から逃げ出したのである。彼らの話しは、また今度にしよう。

「お嬢ちゃんも俺の聞く話だと恐ろしく強いらしいじゃねぇか、違

うのか？」

「僕一人の力なんて微々たるものさ。柘榴やエヴァが居たから僕は生き残れた、ただそれだけ」

そうでなければ、追放世界で飢え死んでいるだろう。

「・・・牡丹、無理をしていないだろうな？」

エヴァが彼女を心配する。家族同然なのだ、当然のことであろう。牡丹はエヴァの差し出した手を優しく握り、ほほ笑んだ。

「僕は、君達を巻き込んでいる、それでも僕に手を貸してくれるかい・・・？」

「何を言う・・・当たり前じゃ！お主は妾の教育係であり騎士じゃからな！！」

「紅き翼が断る理由は無いぜ！」

「家族、だろう？牡丹」

「妾も、国を使ってでも協力しよう、お主は放っておけぬ」

「・・・・ありがとう」

少しの音にさえも掻き消されそうな彼女の声が、静かに彼女の口から紡がれる。彼女の瞳には、うっすらと涙が溜まっていた。

１５話・協力のお話（後書き）

久々に触れた人の温もりは、とても温かった。

１６話・拠点攻略？のお話（前書き）

こんがりした何か、その何かがとても気に成る私。

16話・拠点攻略？のお話

――【化物とは、何を基準にそう呼ばれるのであろう】――

何とか失った分の血液を取り戻した牡丹は紅き翼と協力する事になった。帝国は何もなかったように機能している、恐らく、テオドラの父である国王に変わり何者かが化けているのであろう。テオドラもその事を把握した。テオドラもその日は涙を流したが、仇を取ると言って余計に張り切ってしまった。しかし、コレで帝国側の協力は得る事が出来ないだろう。テオドラでも恐らく父殺しと言う事に成っている。

さて、状況的には絶望一色、しかしこちらには上等な手駒が揃っている。そう考えた牡丹はニヤリと笑みを零す。

「そうして、計画は第二段階へと進み始める」

彼女がチェスの駒を置いた場所は、今では使われていない筈の魔法研究施設だ。既に魔獣の巣に成っていると考えられており、一般人の出入りはもちろん政府もその建物には手を出そうとしない。何を研究していたのか多くの人間や亜人の骨が有るのだ。無残にこびり付いた血痕が生々しさを語る。

ガトウが調べた結果、死者が歩きまわっていると言う報告まであると言う、最悪の事態も考えられる。そこに彼の仕掛けた罠が有るのか、それとも研究の産物が残っているのかは不明だ。

「行こうか、紅き翼。今回は僕も行かねばならない」

大きなソファにエヴァ、テオドラに挟まれるように座っていた牡丹が机の上に置かれた地図を見てそう言う、その地図には既に多くの

バツ印が有った、撃破した場所にはバツ印を書いているのだ。

「駄目じゃ、お主は妾達の側から離れてはならぬ」

「そうだ、お前は私達の居ない場所で無理をする」

エヴァとテオドラは猛反対だ。彼女達からするとただ心配しているのだが、彼女達は気が付いていないのか、それが溺愛の領域に入りつつある事を。

牡丹はその二人を止める手を退けてラカンの側に立った。実はこの二人、良く共にある。それにラカンはナギと対等に戦える生きた化物だ。エヴァ達からもそれなりの信頼を得ていた。因みに、アルと詠春は警戒されている。

「ラカンと行けば、異論はないだろう？」

「お、牡丹、また俺の肩に乗る気かよ」

「駄目かい？君は大きいから景色が良いんだよ」

「牡丹、私なら何時でも良いですよ？」

「詠春は・・・うん、何か怖いから・・・」

「私でよろしければ」「君は信用しない、絶対にだ」

「わっワシも居るぞ！」

「ゼクト・・・君は僕と同じ位だろう？一緒に歩くにしても、君達の足手まといになってしまうじゃないか」

元から運動能力など皆無に近い彼女、水泳でも何とか泳げる程度だ。ラカンの大きな肩に乗りながら彼女は静かにほほ笑んだ。最近彼女の幼い動作が増えて来ている気がする、そう感じるエヴァは悔しくもあった。嫉妬に近い感情だ、家族としては、悔しいのであろう。自分の知らない彼女を簡単に見つける彼らが。

「牡丹さん！帰り道でまたぼくに気と魔力のコントロール方法を教えて下さい！」

「タカミチ少年、確かに知識だけは有るが・・・魔力のコントロールはゼクトに教えて貰いな？」

気は、何とかなるだろう。自身は出来ないがそれでも知識だけは有る。

「じゃあ、行って来るよ」

「早く帰ってこいよ」

「すぐに帰って来るのじゃぞ」

彼女達に手を振りながら、彼女と紅き翼のメンバーはチェスの駒が置かれていた森の真ん中を目指す。そこには確かにその施設が有るだろう。何が出てこようとも、此処を落とさなければならない。敵は、少ない方が良いだろう。

「おう、俺の頭の後ろで何本読んでやがる」

「ん？今から行く所には動く死体が居るかもしれないのだろう？」

「そうらしいですね。本当ですか？ガトウ」

「報告にはそう書かれていた。だが・・・俺を本当かどうかは・・・」

「何だ、そんなもんぶっ飛ばせば良いだけだろ？」

「流石、紅き翼のリーダー、常識に囚われては・・・ハッ」

「な、何だ。その笑い方・・・馬鹿にされたきがする・・・」

牡丹が読んでいる書物は、彼女がエヴァと出会ってまであまり時間が過ぎていない頃にエヴァから渡された物だ。ソレは死者甦生術とも言えるネクロマンシーの研究書である。教会の兵士からはぎ取ったらしいが、一体何故こんなモノを持っていたのであろう。それは良いとして、死体を死体に還す方法を調べてみる。ゴーレムなら簡単だったのだが、術者が居ない場合の対処方法などやはり載ってはいなかった。

旅路は、そんなに掛らなかった。片道1日半と言った所か、拠点からはかなり離れているがこのチート傭兵達に常識を求めてはいけない。

「アレですか、気味が悪いですね・・・」

「ソレはそうだろう、公式では5年以上誰も入っていない筈の施設だ。閉鎖されたのは10年近く前だしな」

「本当に此処で間違えないのかよ」

「僕が間違えるとでも？書は全ての真理を見透かす物だよ。黒の古書はね」

鼻を突く腐敗臭、確かに死体が有るらしい。死体の匂いは他の動物も引き寄せると言う、そのおかげで施設の中は動物や魔獣の死体で溢れているのであろう。想像しただけで気持ち悪い、それに、公式には誰も入っていなくとも、トレジャーハンター等が入っている可能性もある。その場合、新しい人間や亜人の死体もある可能性が有る。

本当に、空気の悪い所である。

「・・・コレは、凄まじいね」

「気持ち悪いなぁ・・・俺、入りたくねぇ・・・」

「我儘言わないでくださいナギ、私も入りたくない・・・」

「じゃが、誰かがやらねばならぬのじゃ・・・気持ち悪い」

「オイオイ、大丈夫かよお前ら。ちょっと新鮮な空気吸って来る」

「ははっ、情けないですね。皆さん、トイレは何処でしょう？」

状況は、最悪であった。ゼクトの魔法で施設の中の空気を何とかして、中へと進む。本当に魔法とは、便利なモノだ。良くそう思うが魔法が使えないのでどうしようもない。そして、魔力を封じ込めた転移符等は物凄く高い。魔法が使えない者にとってこの世界は不便であろう。何をするにも基本魔法が必要なのだから。

「わぉ、本当に動いているよ。死体が」

「じゃが、弱いのぅ・・・」

「仕方ないよ、知性も無いし肉体も既に腐敗してミイラの様。これで強かったら僕は死ぬ」

「安心しろよ嬢ちゃん、俺様が守ってやるぜ！！」

「・・・ラカン、その言葉は愛する女性に言うモノだよ」

「何かカッコ良くねぇか？このセリフ」

「ソレは壮大な死亡フラグって言うモノだよ、僕が思うに。僕を道連れにしないでね」

迫り狂うゾンビやミイラを粉砕しながら奥へと進む、そこの光景は無残な物であった。ベッドに寝ている真新しい死体が何かに喰われた跡が有る。

「・・・まさかのボスフラグと言うモノかの？」

「違うね、コレはアレだよ・・・油断して昼寝していたらさっきの奴らに喰われたんだろう」

「何それ間抜け、ですね」

「ゾンビ娘と1対多プレイ・・・良い」

「ナギ、この変態に鉄拳制裁を死ぬ程度によろしく」

アルは、何処まで行っても変態の様だ。最も奥の施設は見事なモノで、当時は最先端であったのだろう。しかし実験体と書かれているプレートが下がった檻の中には人骨が多数有る。狂気的実験とは良く言ったモノだ。一体何の研究を・・・

【―――年―月―日、人工的に■■無理であ■■・・・しかし我々が有■に事■・・・・・】

「・・・ホムンクルスでも、作ろうとしていたのかな」

そう、信じたかった。被験体が居る時点で、ソレは簡単に違うとは言えるが、まさか、人間がそこまで狂えるとも思えない。人間が人間からバケモノを造る事等、研究してどうなるのか・・・。腹の術式が、疼いた気がした。

≪おねえ・・ちゃん・・・≫

「（あぁ・・・大丈夫だよ、柘榴。僕は平気さ、僕は・・・ね）」

施設の最も奥の部屋に、ソレは置かれていた。古い紙に【結界】と書かれているだけの紙、しかしソレに触ろうとすると手が弾かれてしまう。そこで、牡丹が紅き翼に同行したのだ。

【解除】

恋呪の筆でそう書くと、その古い紙に重ねる。するとどうだろう。先ほどまで剥がれ無かったモノが簡単に剥がれてしまったではないか。

「白の古書は、恋呪の筆も無しにこんな事が出来るのか・・・全く、どれ程の力を持っているんだい・・・」

牡丹は、呆れたようにため息を吐くだけであった。

１６話・拠点攻略？のお話（後書き）

―被験体０１８番、血液投与開始―
その狭い部屋には、獣の様な悲鳴が木霊する。
実験体と成った少女は、優しい彼女の事を思い出す。
彼女の血が、自分の血と入れ替わって行く。嗚呼、幸せ。これで私と彼女は一体と成れるのだ。嬉しい、嬉しいよ■■！！私は今、貴女と１つに成っている！！嗚呼幸せ！！
―被験体、心音低下・・・失敗か
失敗？何を言っているの、私は今彼女と１つに成る事が出来たの！！邪魔しないで！！
―■■様が心を開いているこいつなら適合すると思ったのだが・・・もう良い、さっさと血を抜いて檻の中に戻しておけ。■■様はこんな奴でも友達と思っているからな・・・はっはっは。―
あ！？何をするの！！ソレは私のモノ！！貴方達の様な下品で人間でも無い下等生物が触って良いモノじゃないのよ！！？■■様の血は！！
―・・・ふん、まだ生きているか。中々に丈夫だな被験体０１８番、コレは期待できそうだ。次の実験は１週間後だ、せいぜい■■様と友達ごっこでも楽しむんだな。―
あぁ・・・意識が遠くなる・・・、早く、早く彼女の下へと帰りたい、彼女の髪を撫でて、彼女に膝枕をしてあげて、それから、それから・・・早く、早く彼女を自由にしてあげよう。彼女は観賞用の小鳥ではない・・・待っていてくださいね、【牡丹様】

１８話・謎の鎧のお話（前書き）

駄　文　錬　成　！！

読む際にはご注意ください。

１８話・謎の鎧のお話

――彼女は腹の鬼を認めている――

施設からの帰り道、紅い翼＋牡丹が拠点へと帰還途中におかしなモノを見つけた。ソレの魔力は非常に大きく、深くその身に巻き付けたローブで顔も見えない。黒色のローブはボロボロで血の匂いを充満させている。体格、身長からして恐らく男性、年齢は１８から２３あたりだろう。身長は高い方で、ナギ以上ラカン以下と言った所だ。

牡丹はラカンの肩に乗りながらその人物の行動を観察した、最初は紅い翼も身構えたが何もしてこないと解ると先を急ぐように歩き始める。しかし牡丹には見えている、その男が後ろからゆっくり付いて来ていると言う事が。

「（・・・まさかね・・・此処まで来ても姿を現すか・・・）」

「？どうした、牡丹」

「何でも無い、気にするな」

「気持ち悪くなったら言えよ？」

「お言葉感謝する」

ヒョッコヒョッコとラカンが歩くたびに少しではあるが揺れるのだ。酔いやすい体質であったら完全にアウトであろう。人間に乗って乗り物酔い。そんな面白い事には成りたくない、先ほどから心配するようにチラチラと見て来るゼクトの視線が非常にチクチクした。

後ろからローブの男が付いて来る、ラカンの髪の毛を引っ張っては彼の歩みを止めると、後ろの男も止まる。これは何回繰り返しても同じ事であった。

「さっきから何しやがる！」

「・・・暇なんだよ」

「暇で俺の髪の毛を引っ張るな！」

「失礼、今度から抜く事にする」

「悪化してんじゃねぇか！！」

こんな馬鹿なやり取りをしている途中にも、その男は近づいて来る。何が目的で、何を求めているのか。何故追って来るのか、心当たりが多すぎて検討が付かない。もしかしたら教会の連中か、それとも吸血鬼狩りの連中か。

どちらにしても、最悪だ。しかも紅い翼のメンバーはその事に気が付いていない、戦うにしても奇襲されるか、後衛が前に成る形から戦闘に入る事に成る。

「（柘榴と墨の獣だけで相手にする事も出来ないし・・・気が付いている者も居ない・・・）」

相手の手には何時の間にか、銀色のナイフが握られていた。

男が地を蹴り、牡丹へと近づく、気が付いていないと思っているのか。ソレは間違いだ。私は知っている、知っているが抵抗の手段を持たない。そうこちらからは攻撃出来ないのだ。

【鋼鉄の処女】

無情にも、紙に書かれたモノが具現する。彼女の腕に抱かれた者は、大量の血を吐き出しながらもだえ苦しむ。その鋼鉄たる腕に抱かれて、生きていられるモノはまず少ないだろう。

「うお！？なっ何してやがる牡丹！！」

「その男の手を見てから言ってよ、それどう見ても魔道具だろう？」

「む・・・う、確かに危険な術式の様じゃな・・・」

「触れただけでステータス異常に成りそうですね」

「君は何時の時代の人間だい・・・？」

「嫌ですねぇ牡丹さん、私は私ですよ」

血まみれの男を少し見ていると、ソレは恐ろしい事に再生を開始した。鋼鉄の処女、アイアンメイデンから溢れだした血が彼の中へと戻って行く。その光景はまさに異形にして異常、既に死んだ筈の人間がまるで平気な顔をしてそこに這い出て来た。
牡丹の片目が、赤に染まる。濁ったその瞳の色、腹から聞こえる柘榴の声。間違えない、転生者だ。

「牡丹・・・！お前片目が！！」

「大丈夫だよ、この男を倒せば元に戻るから」

転生者に反応して赤に染まる眼、生まれた時からそうなのだ、自分の命の危険を教えてくれる。エヴァはコレを数回見ていて、彼女はこの現象を【感知の魔眼】等と呼んでいるが、どうも臭い名前であ

った。生まれつきなので治す事の出来ない自分でも恥ずかしい眼である。完全に不思議現象であるが、【父】の辿った道をなぞればコレが何なのか知る事が出来るだろうか。

「・・・何時から気が付いていた」

「最初から、とベタなセリフでその答えを返しておくよ」

黒の古書を開き、自分の周囲に文字の書かれた紙をばら撒く。完全交戦状態だ、紅き翼のメンバーは何が起きているか解らずに眼を白黒させていた。男はナイフを何かの力で剣へと変更する、その刃はあまりにも尖っており、何かの術式もしっかり機能しているようだ。滴る毒の液体、それに触れれば即ち死を意味するだろう。

「君をこの世界に送ったのは・・・いや、聞くまでも無いね。僕を狙ったのならば、君の依頼主は一人だ」

「・・・ほう?」

「合崎、だろう?君は白の古書に召喚された転生者、目的のモノは僕の心臓と黒の古書で間違えないかい?」

「良く御存じで話が早い、早速渡していただこうか」

男がその剣を振り上げ、彼女の細い身体へ向かいその剣を振り下ろす、それと同時にハッとしたように紅き翼のメンバーも動き出した、彼女の書いたモノが形を得る、ソレは彼女の身代わりになり墨へと戻って行った。

「どう言う事だ!?牡丹!」

「合崎・・・僕から白の古書を奪った張本人、とでも言っておこうか」

墨の獣達と紅き翼のメンバーが一人の男に苦戦している。その光景は非常に面白いモノだろう、見世物にしたら一体どれ程稼げる事か、しかしソレは是非第三者で観察したかった。自分も巻き込まれていると考えると頭が痛くなる、柘榴にこんなモノを食わせたらお腹を壊すだろうし・・・。

そんな事を考えてその手で新たな墨の獣を生み出そうとすると、自分の後ろに何か重いモノが着地した音が聞こえた。

黒の鎧に黒のマント、重厚な鎧でその顔は見る事が出来ない程のモノ。片手に大きな剣を構え殺気を男に向けて放出している。

「君・・・は・・・・ッ！」

豪ッ

と、その鎧は転生者に向かい突撃する、その戦い方に戦法等は存在せず、だた腕の強さだけで先ほどまで押されていた紅き翼以上の動きを見せている。

「黒の古書に無い・・・3人目・・・」

1人目は牡丹、2人目は合崎、そして問題の3人目である。そう言っても黒の古書は真理を示すモノ。既に牡丹と合崎の情報は書き込まれている・・・・しかし、この鎧の事だけは何も書き足されないのだ。調べても白紙である。まるで【別の世界線】から来ているようだ。

女性的なフォルムを持った鎧は頑丈で、毒の一滴も通さない。重い

剣が男を切り、再生を繰り返す。

「てめぇ！？誰だ！！？お前の事なんてアイツにも聞かなかったぞ！！？」

「・・・」

黙したまま、その手の赤黒く染まりつつある剣を何度も何度も男の頭に振りおろす。再生を繰り返していた男の顔が、急に形を変えてきた。まるで自分の形を忘れてしまったかの様に、ソレは崩れて来ている。

「転生者を殺す方法を・・・知っている・・・帝国に現れた鎧と同一人物・・・本当に君は何なんだい！」

その鎧は、振り上げた剣を男の頭に突き刺し、牡丹の方向へと振り向いた。その瞬間にラカンとナギが彼女の前に出る。恐らく敵かもしれないと警戒したのだろう。本能的に後衛である牡丹を守ったのだ。

「・・・お前、黒の書を持っているのか・・・」

静かな女性の声、彼女はまだ再生を繰り返す男に、腰に付けた装備品の中から取り出した銀の筒の中に入った液体を一滴垂らす。するとどうだろう、再生途中であった男は肉体が少しずつ液体に成り、断末魔も叫べずに地面へと染み込んで行った。

「だ、だったら何じゃと言う・・・？」

ゼクトの震える問い、鎧の女はそれを鼻で笑った。

「それが有って、先ほど程度の敵に苦戦する等・・・論外だな。ソレ程度で主様の道をなぞれると思っているのか？【牡丹】」

「――え！？」

ラカンの鋭い突きが彼女を捉えようと唸りを上げた、しかし彼女は既にそこにはおらず、牡丹の肩にその鎧に包まれた手を乗せた。

「私を失望させてくれるな、ソレは白の書にも勝らず劣らずの【異端の書物】だと言う事を忘れるな」

鎧の女は、そう告げるとまるで幻覚か白昼夢の様に消え失せた、後に残された紅き翼と牡丹だけがその場所に残される。ふと牡丹が自分の手に違和感を感じ、視線を落とすとそこには黒に良く映える白の栞が古書に挟まれていた。心なしか、黒の書のその闇が、深くなっている気がしたのであった。

18話・謎の鎧のお話（後書き）

「遅いのぉ・・・牡丹達」
「ふん・・・暇を潰せるものはトランプしかないぞ」
「トランプじゃと！？ソレ一枚で戦艦が斬れたり呪術の様にして扱えるアレか！」
「・・・その情報、何処から知った？」
「？牡丹が妾に読み聞かせてくれたのじゃ！！」
「（牡丹・・・お前と言う奴は・・・！）」
因みに、そのトランプ使いは吸血鬼と戦い負けている。

１８話・書の眠りのお話（前書き）

駄文です。良いモノが思いつかない・・・。

18話・書の眠りのお話

――黒の古書、378ページ、15節目――
異世界の騎士、天命を忘れ己の為に死体の石垣を築き上げる。数多の死体は彼の盾と成り、多くの民は彼を恐れた。死が、死が近づいて来る、大いなる闇の衣を纏い、鈍く光る剣を携えソレは紅い河を作りながら死を振り下ろす。無慈悲たる存在、天災そのモノ、彼は多くの死を吸い続けた。その身に、呪われた自らの剣を刺されるその日までは・・・。

――――――――――――
――――――
――

黒の古書を前にして、彼女は唸り声を上げていた。いくら調べてもコレはただの真理しか見せない。鎧の女がこの書物に挟んだ白の栞は一体何なのか。光に透かしても普通の栞である。
紅い翼のメンバーは予定通りに次々と敵の拠点を潰してくれているし、今滞在している紅き翼の拠点の中にはエヴァも居るので守りは万全であろう。牡丹が奥の部屋に閉じこもってから、既に2日が経過しようとしていた。

「挟まれていたページは【古き王】の一節・・・僕がこの本を読み始めてから何度も読み直したページ・・・でも、何故このページに栞を挟んだのか・・・」

温かい紅茶を口に含み考える、あの鎧の女、何か知っているのだろう、懐かしい様な匂いもした。だが、その身からは多くの血の匂いが同時に嗅ぎ取れた、まるで血のプールにでも入った様な濃厚な血

の匂いであった事を覚えている。
黒の古書を、指で突く。
「封印が解けて読める様になった時から何時も読んでいたけど・・・何が有ると言うのか・・・」
彼女はそう言うと片手に持っていた栞を投げる、その時である。白の栞が接触した文節に紅い何かが浮き上がって来た。まるで血の様に紅いソレは牡丹が栞で擦れば擦るほどに大きくなり、広がって行く。
「隠し文章・・・？でも、これじゃあまるで血じゃないか」
乱雑に書かれた様に浮かび上がったその文字、まるで溢れる血で書かれたようなその文字の形と色に牡丹は驚きを隠せない。試しに他のページも擦ってみたが、浮かび上がったページは此処だけであった。
古代文字で書かれたソレは、そう言った類の本を既に記憶している牡丹の前では簡単である筈だった、しかし様々な国の古代文字で書かれている為に3時間以上も書物と顔を合わせた。
「・・・【白の書は、黒の書の贋作に過ぎない】、どう言う事だい？能力的には白の古書の方が優れている筈」
次の文列に彼女の細く白いその指が這う。
刹那、少々の痛みが彼女の指に走る。指の先を切ってしまった様だった、その血は黒の書に付着し、赤が滲む。その瞬間である、血で書かれた様なその文がグニャリと歪みそのページの文が次々と変わって行く。
文字が溶け、紅に変わり、まるで何かの術式を描くように配列が変

わる。

【コレは、私が私の子孫へと残す希望の断片である、ようこそ、初めまして我が仔よ。魔力も奇跡も、神力も持たぬ君にコレを残そう。どうしても踏破できない壁や障害が現れた時、コレを使いなさい】

優しい文字、血のようだがそれは優しい光りを発している。

【原点たる黒の書、君が正しく使える事を祈る】

黒の古書のページが白から黒に染まる、今まで白かったページが全て。黒一色に成ったそのページに今度は白い文字が走る、今まで書かれていた文字とは異なり、確かに真理を告げてはいるが、その真理を告げるページは最初の方だけに成っていた。

「まさか・・・これって・・・！」

膨大な力の塊。それこそ書の形をしているが、絶望すら感じられる程の強大な力を有する剣と似ている。冷たい汗が頬を伝う。コレは、自分が、僕程度のモノが、生き物程度が所有して良いモノではない。彼女は恐る恐るその本へと手を伸ばす。

指に触れた冷たい書の感触、重くも無く軽くも無い。漆黒を思わせるその表紙とそのページ、浮かび上がった白の文字が妙に目立つ、牡丹はソレに白の栞を挟むと静かにソレを閉じた。

――これは、コレは危険すぎる――

「牡丹！！大丈夫か！！？」

先ほどの強大な力を感じてか、エヴァが恐ろしいほどの速さで部屋の扉を破壊して入って来た、彼女の後ろには何時来たのかアリカ姫

の姿までである。

「あ、あぁ大丈夫だよ」

「先ほどの力は一体・・・？」

「牡丹！本当に大丈夫なのだろうな！！？お前は眼を放すとすぐに無茶をする！！」

牡丹の身体を確かめるように触るエヴァ、傍から見れば変態的ではあるが彼女の優しさの表れなので我慢して頂きたい。先ほどまでの緊張が解けたのか、足が震え始めた。あの力の持ち主は一体誰なのか、あれほどの力を持つモノが本当に存在するのか、牡丹はいまだにその頬に冷や汗を流していた。

「あぁ、やっぱり貴女が最初に開放したのね」

眼の前に現れたのは大きな白の帽子を冠り、口元しか見る事の出来ない女性。何処かの聖者の様な厳格なドレスを身につけている。肌の見る事の出来ないその大きなドレスで、彼女は一体どこから現れたのか。最初に警戒したのはやはりと言うべきかエヴァである。

「私は名も無い書の管理者。もう元だけれどね」

クスクスと笑う女性は静かの牡丹の側に歩み寄る、女性の手は静かに牡丹の頭に乗せられる。

「――え・・・？」

懐かしい感触。随分と昔に1度だけ感じた事のあるその優しく温か

い手で、その女性は彼女の頭を撫でている。

「良く、辿り着きました。牡丹、書は貴女を歓迎します。お腹の鬼もね」

「っ！？」

意味が解らなかった。何故、彼女は自分を知っているのか、何故何故何故、疑問は尽きる事が無い。戦意が無い事に安心したのかエヴァはまだ少しの魔力を手に溜めているモノの、殺気を緩めた。アリカ姫は何が起きているのか状況が把握できずに首を傾げている。状況はまさに混沌と化していた。

「書は本当の機能の半分を解放しました。これからは貴女の役に立つでしょう」

牡丹の頭から手を放したその女性。その姿は少しずつ薄れて来ている。まるで消えて行くようだ。

「まっ待って！！君はいったい何者だい！！？」

「私ですか？私は魂の劣化ゴーレム、貴女の父である存在に作られた書庫の管理者だったモノ、そして貴女は今書庫を手に入れ、黒を解き放った」

意味が有りそうな言葉をもらす彼女、その足は既に消え、肩の部分まで消えて来ていた。その姿は儚いモノが有り、彼女の優しい頬笑みが牡丹の脳裏に焼きつく、まるで父が最後に向けてくれた笑みの様だ。

「――あの子を――止めて下さい――牡丹」

刹那、彼女の存在は世界から消え去っていた。最後の言葉の意味は、一体何なのであろうか・・・・。

――こうして、黒は解き放たれた――

１８話・書の眠りのお話（後書き）

敷詰められたその死体の山の上で、その長い白の髪の毛を持つ彼女は笑っていた。その手には黒の剣、赤黒いマントが戦場の風に揺れて、国旗からは紅が滴る。そこは地獄と呼ぶにふさわしい場所であった。

１９話・使ってみるお話（前書き）

微妙ですがそれなりに暗いです・・・？

19話・使ってみるお話

――【未だにソレは半分眠っているが、果たしてその威力は・・・】――

好奇心旺盛な者なら誰もが思うだろう。コレは一体どの程度の攻撃能力を持っているのだろうと。牡丹もその好奇心に勝てる筈がなかった。彼女はソレになれる為に一日中その本を開き、同時に恋呪の筆を使うと言う行動に出た。これにより精神的にはかなり鍛えられる筈だ。少し伸びて来た髪の毛を少し気にしながら今日も彼女は護衛としてタカミチ少年とエヴァを連れて森の中に入っている。

「う、薄暗い所ですね」

「怖いのか？」

馬鹿にしたようにエヴァが笑うとタカミチは強がってか「怖くありません」と牡丹の近くで拳を握った。最近会得した気の使い方を自習しているのだろう。

≪タカ・・・ミチ・・・美味しそう・・・≫

「こ、こら、駄目だよ柘榴。お腹が減ったのかい？」

≪違うよ・・・でも・・・美味しそう・・・お肉が・・・柔らかそう・・・だから≫

恐ろしい事を言う鬼である。全くこの子は何を言い出すのか、牡丹は腹の術式を撫でながら深く息を吸った。そして更に進むと開けた

場所に出る。そこ大きな湖が有り、魔獣等も居る場所だ。彼女は静かに黒の古書を開き、それに書いてある事を試そうと片手を湖に向けた。
すると、彼女には無い筈の魔力が彼女の片手に集まって行く、その量は微々たるモノから次第に大きく成って行き、最終的には彼女の身長を超えるほどの炎球が完成していた。

「呪文、唱えていないよな？」

「う、うん。僕の記憶が正しければね・・・」

「す、凄い魔力を感じます・・・！」

彼女がその手を下げると熱は周囲に散って行き、最後にはそこに炎球など無かったかの様に元の湖に戻った。片腕を上げただけでもコレだ、しっかりと此処に書いてある呪文を唱えたら、一体何が起きるのか。それをためす気には成れなかった、一度の使用でかなり疲れるのだ。恋呪の筆の様に対価が無いモノとは違うらしい、がっつり削られている。

「大丈夫ですか？」

「あぁ・・・少し疲れた程度だよ」

「当たり前だろう、柘榴を半分具現しているんだから」

≪お姉ちゃ・・・ん、無理は・・・しないでね≫

半分具現化されている柘榴は半透明とも言える状態で、周囲の人間に話しかける事が出来る。しかしこれでも牡丹の元気はしっかりと

吸収しているので鍛錬とは言え長時間は危険と言う事に変わりがない。
黒の書を閉じて、鞄の中にしまう。これ以上力を使ったら明日は一日中布団の上で過ごす事に成る。最後の戦いと思われる物も近いと言うのにあまりむちゃは出来なかった。

「お、こんな所に居たか。飯だぜ」

そこに顔を現したのはナギであった。ムカつくほど爽やかなスマイルを浮かべて牡丹を肩車する。それを黙って見過ごさないのがエヴァであるが、エヴァの声を彼は完全に無視して拠点へと戻って行く。彼の感覚からすれば牡丹は妹分なのであろう。

「今日は珍しい魚が釣れたんだぜ？」

「へぇ、ソレは興味深いね。前に君達が釣って来たのは絶滅した筈の魚竜だったし」

あの時は調理に困った物である。まぁ、最終的にはアリカ姫の提案でナギとラカンが食べる事に成っていた。お互い早食いと言いながら勝負していたが、大丈夫なのだろうか、主に胃が。

「何かな、人間見てぇな顔してて喋るんだぜ？」

「人面魚じゃないか、流石にそんなモノ食べれないよ」

「ラカンは丸焼きにして食ってたけれどな」

「彼への評価を考え直した方が良さそうだね」

しかし、何故そんな非現実である筈の光景がこうも簡単に想像できるのであろうか、物凄く不思議だ。恐らくこの不思議は黒の古書でも解らないだろう。
森から拠点へと帰ろうとしていると、急に雲行きが怪しくなった。そして、人息も居れずに大粒の雨が降り始めてしまった。これでは帰る前にずぶぬれになってしまう。牡丹は今日、薄着で着ていたので雨に濡れると物凄くまずい事になってしまう。何せ白のワンピース姿だったのだから。

「ちょうど良い所に洞穴が有るな！よって行くか」

「早くしろ！牡丹を濡らすなよ！！」

エヴァの鋭い声がナギに飛ぶ、ナギは任せろと言わんばかりにその洞窟に滑り込んだ。子供っぽいと思ってしまったが、今は彼に感謝しなければなるまい。
それにしても、此処の天候は以外と変わりやすいようだ。天気予報などと言うモノは無く、確かに天候を変える魔法は有るがそれは大魔法の域に達しているらしい。前にゼクトが見せてくれたが、凄まじい以外の言葉が出て来なかった。

「でもよ、何してたんだ？あそこはお前にとっては危険な場所だろ？」

「ん？ちょっとね、今後僕が役に立てるかどうか実験とでも言っておこうかな」

「程々にしておけよ？姫さんにまた怒られるぞ」

「テオとアリカの説教は長いからねぇ・・・」

そして最後には泣かれるのだ、本当にどうすれば良いのか解らなくなる。
天候は変わらず雨、先ほど以上に勢いを増して降り続けている。洞窟の中を少し調べてみた結果、奥の方に肉食の魔獣と人間や亜人等の大量の白骨死体が有ったが、運良くその魔獣も天寿を全うして死んでいるようだ。

「うわぁ・・・雨、止みませんね・・・」

「少し寒くなって来たね」

「牡丹、私の腕の中に入って来ても良いんだぞ？」

「キティの腕の中も落ち着きそうだけれど、体温が低いじゃないか・・・」

「俺の腕の中でも良いんだぜ？」

「貞操の危険を感じるので遠慮させていただきます、アリカが言ってた、赤髪は危ないって！！」

「あの姫さん何言ってるんだ！！？」

牡丹は彼の声を無視して持って来ていた本に眼を落した。その本のタイトルは【世界の偉人と名君、暴君シリーズ】と言うモノで、歴史の中に登場した有名な国王から英雄と言ったモノを紹介しているマイナーな書物だ。普通世界から仕入れたモノだが、彼女の持つ筆さえあればこの資料はまさに武器とも言える物に成る。

「そういやお前ら良い人とか居ないのかよ」

ナギのとんでもない一言で、牡丹とエヴァはその行動をぴたりと止めた。牡丹は本の文章を読んでいたその目を止め、エヴァは牡丹をチラチラと見て顔を赤くする。

「そそそっそんな物、誇り高く悪の魔法使いである私に居る筈がないだろうが！！」

「へぇ、じゃあ牡丹は？お前は居そうじゃないか！」

「えぇ！？い、いるんですか？！牡丹さん！！」

「え・・・その・・・良い人って・・アレだよね・・・？男性と女性の仲って言う奴だよね・・・？」

牡丹は本に普通の栞を差し込み、ナギの方をじっと見つめた。その目は少し震えている。

「あ、あぁ、そうだ」

その言葉を聞くと、彼女は少し暗い顔をした。思い返してほしい、彼女がどのような場所で育ったのか・・・。彼女の近くではどれ程の人間が死んでいるのか。

追放世界では彼女の近くに居た人間は次々と死んでいる、彼女の養母や養父、その他の者達も彼女の眼の前で死んでいった事もある。そのおかげで彼女は普通よりも冷たい性格に育ったのだが・・・。

「う・・・ん、居ないよ。僕が好いているのは顔も知らない父だけだからね」

「・・・すまなかったな」

「おや、君が謝るなんて・・・あ、晴れたよ。外」

そう言いながら洞窟の外に出た彼女、その顔は少し寂しそうであった。

――――――

１９話・使ってみるお話（後書き）

大量の血が流れるその墓の前で祈りを捧げる鎧の騎士、不気味な程に暗い森の中でソレは紅く光を放っていた。まるで数多の命を使い創り出す事が出来る賢者の石の様だった。贄である首を杭に刺し、鎧の女性は愛おしそうにその墓を撫でた。

「主様・・・遂にアレが目覚めました。これで歴史は・・・」

そう言う、鎧で見えない彼女の顔は笑っていた。

２０話・鬼孕みとしての宿命（前書き）

はい、ドシリアスです。お気を付けて

２０話・鬼孕みとしての宿命

――【書は語る、彼女の残酷な運命を】――

「さて、最後の戦いの前だ。そろそろ僕達も儀式を開始しよう」

≪・・・お姉ちゃん・・・≫

「牡丹、コレが宿命だよ。僕達の・・・・ね」

具現化された柘榴、彼女の前には白の着物を着た牡丹の姿。ソレは悲しき鬼孕みの宿命。

そう、これこそが鬼孕みの最も危険である儀式だ。ソレは、どちらかがどちらかを殺し、その魂と血液を引き継ぐと言う禁忌。牡丹が小さい頃から言い聞かされてきた術式なのだ。

この術式では普通に人間が死ぬだろう。そう考えた牡丹は柘榴に１本のナイフを持たせる。これで死肉を斬り裂く事が出来るであろう。

≪や・・・だ・・・、私・・・お姉ちゃんと・・・一緒・・・≫

「・・・僕も、そうしたかったよ。でも、このままでは二人とも死ぬ、予言通りに・・」

鬼孕みは、腹の子が成長するにつれて寿命と精神を削られていく。そうして最後にはお互い死に絶えるのだ。柘榴は牡丹の力なしでは生きて行けないし、牡丹は彼女に命を啜られて死んでしまう。

既に部屋の中には黒の古書から探しだした強力な結界が張ってあり、この部屋の中に入る事は出来ないようになっていた。

「僕の心臓を君が食べれば、君はこの世界に永遠の肉体を得るんだ。此処で切り札を失う訳にはいかないんだよ。柘榴・・・」

≪嫌だよ・・・私は・・・お姉ちゃんの・・妹だもん・・・≫

「鬼が人間を食べるなんて、普通じゃないか。そんなに悩んでどうするんだい・・・」

≪・・・お姉ちゃんが私を食べれば良い・・・≫

「人間の身体である僕が、君の膨大すぎる情報に耐えられると思うのかい？」

牡丹はその白い着物の前を肌蹴させた。彼女の腹部には赤くなった術式が浮かんでいて限界と言う事を告げている、この術式が耐えきれなくなると牡丹は死に、柘榴が飢える。術式からは血が滲み、滴っていた。

≪別の方法が・・・≫

「調べたさ、キティと暮らしたこの数百年・・・でも、無かったんだよ。黒の古書にも、他の文献にも・・・・ッ！！」

どちらかが死に、どちらかが生き残り片方の魂を継ぐ。そうしなければ、彼女達は生きている事が出来ないのだ。

≪・・・一緒・・・一緒に刺そう・・・？お姉ちゃん・・・≫

「・・・何を言っているんだい、そんな事をしたら・・・君が・・・」

≪私は・・・後悔しないよ・・・お姉ちゃんに刺されるなら・・・殺されるなら・・・≫

何処までも暗い会話、幼すぎる彼女達が負うには重すぎる宿命。共に育って来た片方を殺さねばならぬと言う世界が彼女達に落とした残酷な生の条件だ。
彼女達はお互いに、鋭いナイフを向け合った。

「柘榴、僕は死んでも君の事を忘れない」

≪お姉ちゃん・・・私・・死んでも・・・お姉ちゃんと・・・一緒・・・≫

お互いが、その白く細い身体にナイフを振り上げる。
部屋の外からは開けろと強く戸を叩く複数の音、お互いに上半身を晒した状態で、涙の滲むそのグシャグシャの顔で、まるで愛し合う姉妹が抱擁を交わすように彼女達はお互いの身を抱きしめた。
飛び散るお互いの血は彼女達の足元の術式を濡らす。深々とお互いに刺さったナイフ、その部分は生きる為に最も必要な器官である心臓。人間と鬼が、お互いを抱きしめて泣いている。

――痛い、痛いよ――
――痛いね、痛いよ――
――寒い・・・さむい――
――何で・・・ぼくたちが・・・――

――――こんな、辛い運命を背負わなければいけないの？――――――

円状に書かれた術式の中心で、血に濡れる双子の姉妹。息も絶え絶

えにお互いの顔を撫でる。鬼が彼女の頬を伝わる涙を舐め、人が彼女の髪の毛を優しく撫でた。

――退け！――

結界の解ける音が聞こえたが、術式が発動した。お互いの身体から魂が剥がされるその苦痛に表情を歪め、絶叫を上げながらも手を強く握りあう。

――さようなら――
――さようなら？――
――何時までも一緒だよ――
――幸せにね――
――忘れるんだ――
――そうすれば幸せに生きられる――
――それでも私達は一緒だよ――
――さようなら――
――またね――

――さようなら――

部屋の中が急に濃い赤色に包まれる。外では風が吹き荒れザァザァと恐ろしいほどに雨が降っているようだった。幼い二人の身体はゆっくりと倒れ、その術式に横たわる。
扉を破壊したのは、黒の鎧を着た女性であった。流れ込むようにして術式の中心に居る彼女達に近づこうとする。しかし術式の妨害により近づく事が出来ない。
絶望したように顔を青くする吸血鬼に紅い翼。２人の姫は口元を押さえる。

「間に合わなかったか・・・ッ！！」

黒の女騎士がそう告げた。倒れ込んだ姉妹の身体、鬼が少しずつ消えて行き、牡丹の身体に吸い込まれる。

――人が、鬼を吸収している――

牡丹の髪は長く伸び始め、白い肌は更に白さを増す。開かれた彼女の瞳は赤く染っていた。

彼女は正気ではない様であった。獣の様な叫び声をあげると自分の両腕を爪を立てて引っ掻く。紅い血が地面に落ちる事も気にせず、彼女はそれを繰り返した。

「やめろ！！牡丹！！！！」

エヴァの悲痛な声も届かず、彼女はその長すぎる黒髪を振り乱しまるで吸血鬼のように鋭くなった牙をむき出しにして自らの身体を引っ掻きまわす。血が流れた所から回復していくその異常な光景。彼女の血が黒の書を少しの赤に染めあげた。

「くそっ私がもう少し早く来れていればッ！！」

バンッ

と、空気の層を突き破った様な音が聞こえる。それと同時に彼女の身体が反りかえり、白い肌を晒したまま倒れ込んだ。普段は変態的であるアルと詠春、ラカンもその様子に急ぎ彼女の側へと駆け寄る。

「牡丹！！牡丹！！！」

「鬼のお嬢ちゃんは・・・ッ！」

柘榴の気配が彼女の魂と融合している。ゼクトとアルはその異様を

極める事に眼を見開いた。

「・・・人が・・・勝ったのか・・・？」

「おい！！アンタ！！！どう言う事だよ！！？知ってるんだろう！！！！？」

「あ、ぁ、知っている。彼女の異能・・・鬼孕みはその身に刻まれた術式が赤く染まった時、残酷な宿命に踊らされる・・・そして、生き残った方が死んだ方の魂を引き継ぎ・・・ソレは鬼孕みの本当の力を使いこなす者に成ると・・・聞いた・・・」

「つ、つまり牡丹が柘榴を吸収したのか！！？」

「子供なのに・・・ッ何と言う・・・ッッ」

「・・・」

パチッと牡丹が眼を開ける、紅い瞳の彼女は自分の胸に残った傷を見ると、愛おしそうにそれを撫でた。長く伸び、乱れた髪のままポロポロと涙を落とす。

「最後に・・・手加減をしたね・・・柘榴・・・」

白すぎる肌に残った残酷な傷跡、赤に染まった瞳は潤み光をともしてはいなかった。

彼女は、もう人と呼べる存在ではなくなっていた。鬼を喰らったモノとして、姉妹を殺したモノとして、彼女は罪を負う事に成るであろうしかし、彼女は嬉しそうだ。自分に残ったその傷跡が、それこそが彼女と柘榴が姉妹として共に居た時の記憶であり証拠なのだか

ら。

「そうして・・・僕は私に成る・・・ッ」

彼女の泣く声と共に、彼女を中心としていた魔法陣は弾けて砕けたのであった。

――――――

――

翌日、彼女達は見晴らしの良い場所に柘榴の墓を作る事にした。見晴らしの良い魔獣も人気も無い場所、荒らされる心配のないその土地に大きな剣を突き刺し、柘榴と名を刻む。アルのちょっとした魔法で周囲には結界を張り、花を生やす。皆が柘榴の墓に祈りを捧げる中、その一行には柘榴の姉である牡丹の姿はなかった。

――――――――――――――――――――

――――――

――

黒の布を身体に巻き付け、彼女は洞窟のような場所を歩いている。その足の下には大きな空洞、空洞の上を歩いているのだ。眼を閉じ、履いていたモ靴を脱ぎ、素足に成って、伸ばさ乱れた髪はそのままに。

そう、彼女は黒衣の火防女と同じ格好で、同じ場所に居るのだ。これが第二の儀式。3日間、この暗く出口の無い迷宮で過ごす事。

「・・・柘榴」

音が良く反響するその洞窟の中、彼女は静かな声を上げた。

「君は・・・本当にコレで良かったのかい・・・？」

眼を閉じたまま、彼女は暗い天井を見るように顔を上げたのであった・・・。

２０話・鬼孕みとしての宿命（後書き）

暗い洞窟に入って、もうどの位経ったであろうか。空腹も感じるし異様に寒い。足元からは恐ろしい魔獣の声がする。恐怖でおかしくなりそうだ。柘榴、柘榴。無意識に口から出る彼女の名前、もう彼女は話さない。

だが、彼女はまだ此処に居るのだ。魂が融合するとは、そう言う事である。黒の布を揺らして、彼女は洞窟の中で静かに待ち続ける。

復　讐　の　時　を

――――――――――――――――――――――――

追記

黒衣の火防女が解らない人は、グーグル先生の画像検索で多分出てきます。お手数ですが、今の牡丹の服装は彼女の服装をご想像下さい。ありがとうございました。

主人公紹介その２（前書き）

「柘榴君の事は残念だったねぇ☆」

「・・・焼死体と斬死体、どっちが良い？」

主人公紹介その２

名前・一目橋　牡丹
性別・女
種族・鬼孕み（真）／黒衣の火防女（召喚師の上位）
容姿・伸びすぎた黒髪はそのまま、紅い瞳だが光がない。儀式の時に刺さったナイフの痕が胸元に有る。もちろん着ているモノで見る事は出来ない。髪の毛は彼女が自分で梳かさないので乱れたままに成っている。儀式が終了してから彼女はあまり目を開こうとしない。本は心の眼で読んでいると本人は語る。
服装・黒い布を身体に巻いている、そして裸足（黒衣の火防女の正装）、その他の時は普段着か着物である。
地位・賞金首であり帝国側の騎士。
一人称・私、たまに僕

筋力Ｃ　魔力Ｓ　耐久Ｃ　幸運Ｂ　敏捷Ｂ　宝具ＥＸ＋

うん、完全にキャスターレベル・・・。

耐魔力Ｄ
普通の人間と変わらない。彼女に傷を負わせる事が出来る。
黄金律Ｂ
死体から剥ぎ取ると言った外道とも言われそうな行動を取る。
召喚術Ｓ
姉妹の魂と融合した事により、柘榴が持っていた魔力を得た。
吸魔ＳＳ
世界から普通より多くの魔力を補給できる。
心の眼Ａ
眼を瞑ったまま本が読める。誰が得をするのか・・・。

人間性Ｃ
人付き合いが苦手です。
――宝具――
■の魔■ＥＸ
今はまだ解らない。
黒の古書？？
宝具としてのランクが表示できない。
偽りの書庫Ａ
様々な写本が納められている。
楔の神殿（偽）
未だ不完全ではあるが、機能はするだろう。多分。

主人公紹介その2（後書き）

「「素足で周囲を確認しながら進む・・・良い！」」
「お前ら、もう牡丹に近づくなよ」
「牡丹・・・もう大丈夫なのか・・・？」
「うん、立ち止まっていても先には進めないからね」
「・・・牡丹さんの足って、綺麗ですね。色も白いですし・・・」
「・・・タカミチ、その歳からそんな・・・」
「牡丹、もう少し身体に巻く布の量を多くしろ、危険じゃ」
「うん、私もそう思った」

21話・偽の国王（前書き）

帝国の事を忘れてた、なんてことだ！

21話・偽の国王

――彼女は今日もその目を瞑る――

長すぎる黒髪、固く閉ざされたその瞳、彼女は今現在、死んでいた国王が治めていると言われている帝国へとその身を忍ばせていた。黒の鎧を着た女性はあの後すぐにその姿を消した。牡丹は聖者の様に祈りを捧げ、その手にはナギのモノよりも長い黒の杖を持っていた。素足で有る為に歩くたびに彼女の足には土が付くが、そんな事を彼女は気にしていない。

「何だ、お前らは」

「申し訳ありませんが、我々に祈りを捧げさせていただけませんでしょうか・・・」

「・・・旅の巡礼者か、良いだろう。だが警戒はさせていただく」

「おぉ、ありがとうございます」

乱れたままの黒髪で表情は良く見えないが、うっすらと彼女が浮かべた優しい笑みに兵士は顔を少し赤くして頬を掻きながら「う、うむ」と返事を返す。深くローブを着こんだ金髪の女性がプルプルと震えているが、気にしてはいけないのであろう。

「ほら、此処だ」

「素晴らしい場所ですね」

「そうか？」

「えぇ、コレだけ広く、警戒の薄い場所はないからね」

彼女の口調が変わる、優しい笑みは悪戯を考え付いた子供の様な無邪気な物に変わっていた。兵士が眼を丸くした瞬間に後ろから筋肉が襲いかかる。鎧を着ているその首筋に刃の様な手刀が振り下ろされ、簡単に意識を狩り取られた。その場に居た自称聖者達はローブを脱ぎ棄て、各々の得物を手に取る。

「簡単に侵入出来たな、帝国も簡単に信用するんだな」

「牡丹、足を貸せ。私が綺麗にしてやろう」

「え・・？帰ったからで良くないかい？」

「・・・お前は何故靴を履かないんだ？」

「黒衣の火防女はコレが正装だからとしか言いようがないよ」

ペタペタと眼を閉じながら歩く彼女、その手に持った杖で周囲を確認しているらしい。それならば何時も本を読む時に使っている心の眼を使えば良いのではないだろうかと誰もが思うが、彼女はそれを否定している。理由は良く解らない。恐らく彼女の気まぐれであろう。柘榴の性格も混じっているようで妙に子供の様なお茶目（笑）な行動が増えた。

そのお茶目の中にはたまに人の命を奪いかねない物もあるが、そこは気にしないでおこう・・・。

「それにしても変だよな、死んだ筈の王様が治める国なんて」

ラカンが牡丹を自分の肩に乗せてそう言う。肩車だ。牡丹も最初はビクッとしたが彼の肩の上で大人しくなった、足をぷらぷらさせて遊んでいる。

「だから来たんだ。牡丹の話しだと帝国が襲撃された時に殆んどの高官は殺されていたと聞いた」

「つまり、上層部は全部偽物・・・か」

「恐ろしいですね。我々の居る場所は敵の腹の中、と言う訳ですか」

詠春の言葉に誰もが気を引き締める。そうだ、此処は既に油断できない腹の中、気を引き締める必要は十分すぎるほどに有るのだから。その中、牡丹だけが落ち付いていた。黒の杖を抱きしめて彼女はラカンにその身を任せている。彼女なりに楽なのであろう。因みにこの光景を羨ましく思ったのかタカミチは現在格闘術を真剣に学んでいる。将来は大きな男に成ると牡丹に告げているらしい。子供の嫉妬とは可愛い物である。

「クッラカンめ・・・羨ましい事を・・・ッ」

「キティ、君は何を言っているんだい・・・」

「どうですかラカン、牡丹の太股は柔らかいですか？」

「妹分の牡丹をそんな風には見てねぇよ。お前じゃねぇんだから」

完全に変態と言う雰囲気を出しているアルにあのラカンでさえ軽く引いている。ラカンは確かにオープンスケベであるが、一度決めた

事は貫き通す男で、牡丹を可愛妹分だと認識している為、そう言った行為には走らないのだ。実に頼もしい存在である。（エヴァからすれば牡丹との時間を平気で奪う存在）

「油断しないでね、此処は城の一番端、国王の部屋までは此処から正反対の階段を使わないと行けないから」

「面倒な作りだな・・・ソレ」

「私に言わないでよ、此処を作った人にお願い」

入り組んだ迷路の様なその城の中を紅き翼は進む、途中で出会った不幸な兵士には音も無く眠って頂いた。まぁ、その間何もせずにラカンの肩に乗っているだけの牡丹からすればどうでも良い光景だ。城の中を進むにつれて見た事も無い部屋が有る事に気が付いた、以前はただの物置き部屋だった筈だがその扉は豪華に装飾されて居て、中から術式が掛けられている。

「・・・成程ね」

牡丹はその身に宿った魔力を使い扉の仕掛けを弄る。その間黒の杖の先には青白い炎が灯っていたが、あれは一体何なのか。触れても熱くなさそうであった。

「さて、私は此処で少しする事が有る。君達は私が渡した地図の通りに国王の部屋へ行き、その偽物の国王を懲らしめて来てね。帰りに此処に立ち寄ってもらえるとうれしいな？」

「別に良いですが・・護衛が必要でしょう？」

「大丈夫だよ、一般兵たちはこの部屋の存在にも気が付いていないさ」

彼女はそう言うと難無くその扉を開けてしまった。その中は光に満ちており様子を覗う事が出来ない。牡丹は戸惑う事無くその中へと入って行った。

――――――――

――――――

――

その中は何もない様な白い空間であった。その中に黒の彼女が入ると完全に異物であろう。しかし彼女は平気な顔でその部屋の中へと足を踏み入れる。眼は瞑ったままだが恐らく心の眼を使っているのであろう。

「・・・やぁ牡丹、こんな所にようこそ」

「やっぱりね、君だったか。合崎」

彼女の前で宙に浮きながら書物を手にしているのは白い青年であった。牡丹は彼の名前を合崎と呼ぶ、お互い知っているようだ。彼の手の中にはまさしく白の古書、その古書は眩しいほどに力を放ちこの白の空間で何かを作っているかの様であった。

「随分と髪型を変えたね」

「君の白の書ではそんな事も解らなかったのかい？」

「俺の持つ白の古書は君の黒の書とは違うんでね」

彼が指を鳴らすと周囲にミイラの様な兵士が現れた、その手には剣と楯を持っている。

「わざわざ来てくれたんだ、盛大に歓迎してあげるよ。お礼は心臓で結構だよ」

「私の心臓はそう安くはないんでね、お断りさせていただくよ」

牡丹がその手を振ると何処からともなく数枚の紙が落ちた、その紙には既に文字が書かれている。

【騎士】【騎士】【騎士】【騎士】【騎士】

鎧を着た兵士たちが、彼女を守るように戦列を組む。知能が少しではあるが与えられているのでその騎士達は連携攻撃で次々とミイラを灰へと還して行く。

「へぇ、奇妙な術を使うね君は。おっと失礼、今も昔もか、鬼の子は元気かな？」

「君にそう簡単に情報を教える訳がないだろう？」

「はは、確かに、ね！」

彼の手から鋭い氷の槍が飛んできた。その槍は彼女の片手を貫くが、彼女は全く反応を示さない。氷の槍を抜くとその傷跡は完全に回復してしまった。

「痛いじゃないか」

「・・・人を捨てたか」

「ふぅん、君はまだ人なんだね。ずっと昔に家畜レベルにまで落ちたかと思っていたのに」

「失礼だね、君は。殺したい程に」

「ハッ白の古書を私から奪った君が何を言うのかな？元・教育係の合崎さん？」

そう、彼は牡丹の教育係であったのだ。最初は清々しいほどに初心で牡丹と眼も合わせる事が出来なかった青年であったが、白の古書を見た瞬間に眼の色を変え牡丹を殴り倒し異世界へと逃走したのである。

そして、今では黒の古書も狙っているのだ。

「また懐かしい話を。あの頃は俺も若かったよ」

「そうだね、今じゃお互い化物だ」

「俺はまだヒトだ。お前とは違う、そんな気色悪いモノと一緒にするな・・・」

「知らないようだね、教えてあげよう。白の古書と契約を終えたモノは寿命を奪われ、不死の化物に成るんだよ？」

「白の古書で自分を人間に戻す事なんて簡単だったさ。寿命すらも自由自在だ、素晴らしいね」

お互い、嫌な笑みを浮かべながらの会話だ、空間を殺気が満たしている。ミイラはすべて倒され、墨の騎士もただの墨へと還って行っ

た。二人だけの白い空間、書を持った二人だけが此処に残されている。

「さて、俺は此処で御暇させていただくよ。俺の作った国王も倒されちゃったしね」

「死体操作に肉体の改造か。君が好きそうな気持ち悪いやり方だ。悪趣味な死体愛好家め」

「いずれ、君の死体も俺のコレクションに入れてあげるよ。死ぬ時には綺麗に死んでね。もちろん俺が綺麗に殺してあげても良いんだよ？」

「私は絶対の君の魂を地獄の最下層まで落としてあげるよ。獄卒との楽しい追いかけっこが待ち遠しいかい？」

白の世界が、少しずつ薄れて行く。牡丹は彼を眼を開いて見る事はなかった。それが不快だったのか合崎は眉間に皺をよせて彼女を見下したような言葉を残して消える。それを聞いても牡丹は表情を崩さなかった。まるで相手にしていないように彼女は涼しい顔でその部屋から出る。

「罵声なんて、もうずっと昔に慣れているよ」

ドアを開けたそこには丁度良く紅い翼が迎えに来ていた。その後ろには見覚えのある兵士達。誤解は解けたようだ。襲撃犯扱いが遂に終わりを迎え、いよいよ最後の戦いへと彼等は、彼女等は進み始める。

「覚悟すると良いよ合崎、私が今日、何故黒の古書を使わなかった

のかを知るが良い・・・」

その中で一人、牡丹だけが狂気に満ちた紅い瞳をうっすらと開けたのであった。

21話・偽の国王（後書き）

「アンバサー」
「・・・牡丹、それ何の呪文だ？」
「祈りの言葉的なモノだよ、詳しくは知らない」
「お前、ほんと自由だよな」
「ナギよりは自由じゃないよ、君前アリカのお風呂覗こうとしていたじゃないか」
「なっ何故それを！？」
「ふふ、私の眼に死角はないのさ！」
「何時も閉じているのにか？」
「（ショボーン・・・）」

２２話・書ＶＳ書（前書き）

お察しの通り、デモンズソウルのネタが好きです

22話・書VS書

――不死者は祈る――

彼女は密度を更に高め肌の露出を抑えた黒の布を巻き、黒の杖を持ち最後の敵の拠点の方向を向いていた、その目はやはり閉じている。彼女の側にはエヴァが控えており、彼女にサインを貰おうとしているアリアドネ―の女騎士達をその鋭い眼光で睨んでいた。流石最後の拠点と言うだけあってか、空を半分埋め尽くすほどの悪魔が宙を飛び、黒く染まっている。それ以外には何もなく、ただ静かな空気が流れていた。

――我らが旅路に祝福を――

牡丹の静かな声がその場に響く。

「・・・で、貴女は何を狙っているんだい、鎧の騎士さん？」

全身を鎧で固めた彼女の姿もその場に有った。黒のマントが風に靡き、濃厚な血の香りを充満させる。まるで地獄のそこから呼び出された悪魔のようだ。

「私は昨日、私の主とやっと交信出来たんだ。私への御命令は、お前をサポートしろ、との事」

「正体不明の人が・・・ね、信用できないな」

「そうですか、ならば自己紹介を」

彼女は顔部分を覆っていたその分厚い鎧を脱ぎ取る。整った女性の顔が姿を現した。短く切り揃えられた黒髪に金色の獣の様な眼、尖

った耳は完全に人外の物である。

「私は【元】首抜け、デュラハンが騎士の一人。主様に拾われ絶対の忠誠を誓った死の妖精騎士団第3番、デュラ」

「騎士団・・・？何処の騎士団に所属していたのです？」

「詠春殿、ソレはお話しできない。私は既にその国の騎士を辞めた身ですが・・・」

「・・・まさか、君の所属していた騎士団ってアレじゃないよね・・・？」

「牡丹・・・いえ、牡丹様。それもお話しできません」

「・・・さて、自己紹介も終わったようだし、行くか？ナギ！」

ラカンの大きな声が静かな味方の拠点の中に響き渡る。

「おう・・・行くぜ！！」

ナギの号令と共に最後の戦いの火蓋が切って落とされる。魔法使い達が次々と敵の中へとつっ込んで行き、魔法や剣で周囲を血に染めて行った。

その中、空中を歩いている一人の少女、そう、牡丹だ。彼女は素足のまま空中を媒介も使わずに歩いている。そして、彼女の足の下には巨大な魔法陣が展開されていた。彼女が何かを唱えると戦場に眩いばかりの光が走る。その光に触れた悪魔がまるで夏場のアイスの様に溶けて行った。味方には一切被害がない。

「お、恐ろしいな。牡丹お嬢ちゃん・・・」

「儀式だったか・・・？あの後から急に魔法使えるようになったしな・・・」

≪ばッ馬鹿な！？あんなのが居るなんて聞いてねぇぞ！！？≫

それは戦いとは呼べない物だ、言うなれば一方的な惨殺、一対多数で何故此処まで出来るのかと言わんばかりに彼女は味方であるアリアドネ―などの騎士を無視して強力な魔術を放って行く。空はまるで夕暮れの様に紅く染まり悪魔達が羽をもがれて落ちて行く。

――古き王都を守りし堅牢なる騎士よ、私の声に答えなさい――

魔法陣から、巨大な鋼の騎士が降臨する、ソレは大きな盾を構え、片手も同じく巨大な槍を構えていた。ソレの名前は【塔の騎士】、人間ではなく、その身は既に朽ちている。そう、その鎧も昔は王に忠誠を誓っていたのだ。今では悪魔（デーモン）と成っているが、牡丹の声により一時的に召喚された。

――眠れぬ不死のモノよ、我が目前の有象無象に・・・死を――

鎧が吠える、一薙、二薙、敵が眼に見えて減って行った。盾で潰し、槍で突き、払い、踏み、その姿は味方から見ても恐ろしい物である。

「牡丹！！掴まれ！！俺がお前を送り届けてやる！！」

ナギがその手で牡丹を掴み、彼女と仲間を引き連れて敵の本拠地の中心へと進んで行く。その途中にソレは居た。全身を白に包んだ白の青年、人形の様な青年が二人並ぶ。書を持った居青年が牡丹の姿

を見ると嬉しそうに笑みを浮かべた。嬉しそうにその口元を醜く歪めて書を開く。
同じく牡丹もその手に持った杖を構えて、静かに地面に足を付けた。
「やぁ紅い翼、それに鎧の君も、良く来たね。僕らも随分数を減らされてしまった、ここらで決着をつけようじゃないか」
「・・・お前は、私が殺さねばならぬ。私には多くの血が必要なのだよ・・・主様の下へと帰る為に・・・！！」
デュラがそう言うと腰の剣を構えた。
「牡丹、俺達は邪魔の入らない場所で戦おうか」
「そうだね、そちらの方が私にとっても良い」
合崎がその白の書をなぞると、周囲の光景が一変した。そこはまるで何処かの屋敷の様であり、和風の武家屋敷である。お互いその武家屋敷の庭に咲く蒼い桜の木の下で対立していた。
「懐かしいだろう？君の居た屋敷を再現してあげたよ」
「忌々しいね、此処はもう見たくなかったのに」
「そう言ってあげるなよ、彼女も待っていたのだから」
青年が、いや、男が指を鳴らすと後ろの障子が静かに開きそこから一人の少女が現れる。その体には痛々しい傷が数多くある。身体に刻まれた番号は０１８番、そう、牡丹が最も親しかった彼女がそこには居た。

被験体０１８番、合崎が白の古書を盗み逃げ出した時に殺された、彼女の姿が。

「ッこの外道め・・・死体を自分の中に保管していたのか・・・っ！！」

「はは、美しいだろう？あの光の無い瞳、君を必死に守ろうとして居たその身体。そして俺が刻んだナイフの傷跡」

「・・・」

自慢するように彼女の服を捲る男、少女の傷だらけの肌が曝け出される。表情を変えないその少女、既に死んでいるのであるから当然か。この空間に居るが故に動いているのであろう、彼に操られて・・・。可哀そうに。

牡丹が、ゆっくりとその目を開く。血の様に紅く光の無い瞳が一人の男を捉える。男はその目を見ると震えるその体を自分の腕で抱きしめた。

「そう、俺の愛したその瞳。君は美しい！！俺は待っていたんだ！！君が完全体と成るその時は！！だから俺は君の儀式をこの書によって速めた！！」

「おかしいと思えば・・・やはり君か・・・更に許せないな。私と・・・僕と柘榴を離れ離れにして・・・ッ君だけは・・・っお前だけはぶち殺してあげるよッ！！」

黒の杖を彼女は床に垂直に立たせる、するとその杖は倒れる事無くそのまま立ち続けた。彼女が黒の古書のページを広げると白の古書が反応するように淡い光りを発する。

――俺に従いし幾千の命よ、その命を散らし我が下へと集え――

彼の声に反応するように重厚な西洋の鎧を着た者たちが彼の前に集う、白の古書の中でも最も簡単で、初歩的な召喚術式であった。コレは牡丹を完全に挑発している、鬼孕みは召喚術に長けている、それに自ら勝負を挑んだのだ、自信過剰にも程が有る。神にでも成ったつもりであろうか。

牡丹は、静かに術式を唱え始めた。

――契約され引き裂かれ3人に成った騎士王よ――

――母に毒を盛られた暴君よ――

――その魂、再び此処に写し出そう――

――従いたまえ、世界を繋ぎとめる者に――

巨大な魔術式がその世界に展開される。現れた4人の女騎士。

――青いドレスの様な甲冑に身を包んだモノ――

――黒い重厚な鎧を身に纏ったモノ――

――白く薄い鎧を身に付けたモノ――

――紅いドレスを身に付けたモノ――

「Ｆａｔｅの世界線からの召喚・・・だと！？お前にそんな事は出来なかった筈！！」

「君が速めた儀式は成功してね、栢榴と僕は力を得たんだよ。知らないのかい？あの儀式は生き残った者の力を飛躍的に高めるんだ」

騎士達が戦いを繰り広げる。しかし流石は騎士王と言うべきか、その手に持った聖剣で次々と敵を薙ぎ倒す。紅い暴君も湾曲した珍しく大きな剣を使い、舞うように敵を両断していった。

「【白の書よ！！今こそ契約に従いその真価を目覚めさせたまえ！！】」

「《黒の古書よ、長き因縁に終止符を打つべくその力を使え》」

白の古書は男の身長ほども有る剣へと姿を変えた。
一方、黒の書は紅く無気味な光を発していた。まるで男と白の古書を嘲笑うように。

――書と書の戦いは、今此処に幕を開けたのだ――

２２話・書ＶＳ書（後書き）

杯は満たされた。多くの血と死体を積み込んだそのカロンの船は出港する。まさに今、彼等彼女等の命を狩るように。

２３話・大戦決着（前書き）

すーぱーグダグダタイム！

２３話・大戦決着

――準備は整った。復讐を始めよう――

男の持つ白の古書は槍と成り、牡丹の細いその身を狙う。流石は白の書だ、形を変えることも御手のモノと言う訳か。牡丹はその光景を鋭い紅眼で睨みつけていた。口元には残酷な笑みを浮かべている、まるで狂気にその身を委ねているかのように。彼の放つ飛ぶ斬撃が牡丹に迫り来る、その斬撃を召喚されていた一人の黒い騎士王が掻き消した。

「セイバーオルタ・・・邪魔をするなッ！！」

「愚民如きが私の契約者に手を上げるとは、面白い、しかし実に不快だ」

黒の鎧を着た王、セイバーオルタ。彼女が持った黒の聖剣が風を切り裂き男の身を狙うが、その槍は白の古書だ、そう簡単に反撃を許さなかった。

突然の突風がオルタの身体を吹き飛ばし、障子を破壊する。その様子を光の無い目で見ている被験体０１８番、白の騎士王が彼女を見ると顔を歪めた。

「このような少女まで・・・許せません。此処で斬らせていただきます！！」

豪ッ！

と、彼女を中心に魔力が渦巻く、男は今、４対１の状態で、かの英雄達を相手にして平気な顔で生きているのだ。恐ろしい限りである。

牡丹は手に持った黒を宙に浮かべた。その黒は紅い光りを放ち世界を変えて行く。最高神にしか許されない筈の【世界の上書き】である。再び周囲の様子が一変し、古びた神殿の様な場所に変わる。

「ッ固有結界！？」

「おぉ、力がみなぎって来るぞ！奏者よ！！」

紅いドレスの暴君がその大きな剣を振り回し元気に成る。その他の騎士王達も動きが良くなっている。此処は牡丹の持つ固有結界の中だ、彼女が、黒衣の火防女として得た固有結界。いや、固有世界と言うべきであろうか。此処の名前は【楔の神殿】様々な世界の楔とも言える場所である。

「・・ぼた・・・さ・・・・」

――肉体を失ったソウル達よ――

――その輝きを彼女らに貸し与えたまえ――

――世界を、繋ぐ者たちへ――

紡がれたその言葉に反応したかのように神殿の様々な所から光輝く球体が騎士達の中へと入って行く、入るにつれて彼女達の動きが良くなった。白は冷や汗を流す、少しずつ、確実に追い詰めていた。しかし、白が一方的な防戦に成る事等あり得なかった。彼がその槍を剣へと変えて魔力を流すと眩い光りが発せられる。

「コレは・・・エクスカリバー！？」

青い騎士王が驚きを隠せないように声をあげた。

それが白の力、神代の宝具の再現も簡単にこなしてしまった。牡丹

はそれを見ると唱える呪文を変える、再び黒が紅く光り始めた。その光は赤黒く、まるで血の様な色だ。
次の瞬間、騎士達を葬る一筋の光が走った。その光は禍々しく黒に染まっている。決して神聖なモノとは言えないであろう。その光と同時に、牡丹も術式を完成させる。

――伝承のモノよ――
――王に仕えたモノよ――
――私の声を聞いたのならば――
――その長い眠りから眼を覚ませ――

彼女が直立していた黒の杖に触れると彼女の手からは紅い血が流れソレは床を主に染めた。その血に反応した魔法陣が何かを召喚し始める。その召喚は４人以上に大きいモノで、人ではない物を召喚しようとしているのは明確であった。

「神でも召喚する気か！？馬鹿め！！こちらの方が先にお前の心臓を貫ける！！」

鋭い長剣が彼女の心臓部分を狙った、真っ直ぐ彼女にそれは近づき、その黒い布ごと斬り裂こうとしたその時である。眼に光のない０１８番が彼を掴み、恐ろしい速さで男の顔面を殴ったのだ。その衝撃で彼女の腕は破損し、骨などが見えてしまっている。筋肉も完全に千切れていた。

「ッ貴様！！人形の分際でぇ！！！」

「ぼ・・タン・・さまは・・・ッ鑑賞用の・・・小鳥じゃ・・・ない・・・ッ」

彼が指を鳴らすと、彼女の身体は少しずつ崩壊を開始した。彼が原型を留めさせていたのだから魔力の供給が無くなれば彼女は崩れてしまう。
その様子を牡丹は眼を見開きながら見ていた。ただ、見ているだけしかできなかった。

「・・・牡丹・・・様」

懐かしい笑みと同時に彼女は消える。彼女の腕から滴っていたその血が魔法陣の発動を速め、ソレはこの世界に具現しようとしていた。男はその人型に剣を構え突撃する。完全に形を得る前に殺そうと考えたのだ。彼の剣がもう少しでその人型に届くと言う所で、その剣は書の形へと戻ってしまった。

「なっ・・・に・・・・！？」

彼の眼に映ったのは飾りの全くないメイド服と、死者の様に青白い肌である。白い手袋をした彼女は牡丹へと振り向き、一礼した。

「私を呼び出すとは・・・驚きですよ召喚者」

「・・・」

「私の名はメアリー、ただのメイドでございます」

綺麗にお辞儀をする彼女、戦場には似合わないその姿。しかし彼女からは恐ろしいほどに力が溢れていた。まるでいくつもの魂が複合されて作られているかのようだ。

「何だ、それがお前の希望か！？」

男の手には巨大な炎塊が浮いていた。その炎塊を2人の方へと投げて来る、凄まじいその熱量は小さな太陽と言っても良いだろう、薄暗い神殿の中を赤に染めてソレは近づいて来る。
――しかし、ソレはすぐに掻き消された。
メイドはそこから一歩も動いては居ない。ただ男の方向を凍りつきそうな瞳で睨んでいるだけだ。牡丹も唖然としていた。何せ距離が離れている筈の彼の腕がバラバラに切れて落ちたのだから。

「ぐっがぁぁぁあああっ！！？！！？」

「そんな書物程度で、こちらの黒は穢れませんよ？」

彼女が手を胸の前に出すと、ヒュンッと空気を斬る音がした。少しの光を反射するそれはとても細く、恐ろしく速い。糸であった。何かの加工が施されているのであろうが、それを操る彼女の技術も恐ろしいモノだ。

「何故だ！！何故再生できない！！？」

「おや、そこまで愚かでしたか・・・魂ごと削ってしまえば、再生等出来ないのですよ？」

大量の血が神殿の石造りの床を濡らす、男は泣き叫びながら白の書に触れようとしたがそれを細い糸が阻む。ギリリッと締め上げる音が聞こえ、男の絶叫が高い天井に良く響く。

「白の書等、所詮贋作に過ぎません」

無情にも、彼女は白の書を細切れにしてしまう。男の絶望じみた顔

が青く染まる、そして牡丹の方を見ると信じられないような事を言いだした。

「たったすけて」

「助けてくれ牡丹！！」

「助けろ！！牡丹！！」

牡丹はその様子を静かに見ているだけであった。彼女は開いていたその紅い瞳を瞑る。ソレはもう彼と戦う意思がない事を現している。戦うのではない。もうコイツにはうんざりだ。大事な者を2人も失い、そして自分は助けろと言う。ふざけろ、お前は2人も、いや、きっとそれ以上を殺めたんだろう？だったら償うべきだ。
そう言うように牡丹は黒の書をしまい、黒の杖をその手に持った。

「・・・好きにしなさい」

「えぇ、そのつもりです」

後ろから聞こえる断末魔、楽しそうなメイドの笑い声、何かを貪り喰う音。千切れて跳ぶ音や血が付着する音。牡丹が魔力の供給を切ると、その世界は簡単にも閉ざされた。

――――――――――――――――

――

外に出ると、絶望的な状況であった。ラカンは両腕がなく、その他の者も息は絶え絶えだ。

「ふぅん、コレが造物主(ライフメーカー)ねぇ・・・」

牡丹がそれを嘲るように笑った。

【・・・小娘、何がおかしい？】

「おかしいさ、面白過ぎるにも程が有るよ！君一人の絶望程度で世界を滅ぼそうとしているのだろう？コレを笑わずに何と言うのか！！」

「・・・ッ牡丹！」

ナギの苦しそうな声が聞こえる。それを無視して彼等の前に立ち彼女は黒の杖を構えた。造物主の放った魔法が彼女の身体に迫るが、彼女は動こうとも何かを唱えようともしない。その強力な魔力の波動は彼女の身体に触れる事なく消えてしまった。その事に皆眼を丸くしている。

【貴様、何をした？】

「白は消え、黒は己の真価と主人を知ったのさ。解らないかい？」

――白の書物が消えること自体が、この本を覚醒に至らせる条件だったのさ――

「君達は疲れているだろう？後は僕が何とかしてあげるよ」

そう言うと彼女は黒の杖を地面に打ち付けた。するとどうだろう、その周辺の地面が黒に染まり魔法陣が現れたではないか。杖の先には青白く光る魂の炎、彼女は聞いたことも無い様な呪文を口から発

する。
世界を終わらせる儀式が、少しずつ収縮していく。そして結界のスキマからとんでもないモノがその顔を覗かせた。牡丹が召喚した【塔の騎士】だ。その手に持った血濡れの槍を造物主へと投げつける。厚い魔法障壁を突き破り恐ろしい威力を残して造物主に向かう。

「いくら最初の魔法使いとは言え、神を犯す槍にその身を貫かれればいじゃすまないだろう？」

彼女は儀式の中断魔法と属性追加魔法を同時に発動したのだ、その為か少し疲れた顔をしている。
造物主の身体をその巨大な槍が貫通した。悶え苦しむ造物主、その姿は少しずつ消えて行く。それと同時に牡丹も意識を失いかける。今日は力を使い過ぎた。いくら柘榴の魂と融合したとは言え、身体は以前の病弱のままである。
薄れゆくその意識の中、誰かが去る音と消える音が聞こえた。

23話・大戦決着（後書き）

私は闇へと再びこの身を隠そう。その日は遠からず訪れる。
黒の鎧の騎士は、静かにその場を後にした。誰にも見られないように・・・。

２４話・多くの魂へ救済の光を（前書き）

牡丹ちゃんが、ついに！

２４話・多くの魂へ救済の光を

――英雄とは、大量殺人者への称号である――

造物主は倒れ、世界には希望の光が戻り戦争は終結した筈であった。しかしその中で彼等紅き翼の活躍を良しとしない者達も居る。そして彼等には丁度良い事に翼の希望を折るのには十分すぎる手札が有った。彼等はすぐに行動を開始したのであった。

最後の戦いから数日後、魔法世界のニュースにはとんでもないモノが流れていた。

【英雄の一人、黒衣の火防女を危険人物とし牢へと連行するとのこと、そしてアリカ姫の死刑】

この二つのニュースは紅き翼を震え上がらせるのには十分すぎた。確かにアリカは国を落としたとされている、しかしソレは彼女の引き起こした事ではない、それに牡丹が牢へ幽閉される理由も完全におかしかった。

「おい！コレはどう言う事だ！！」

金髪の女性、エヴァンジェリンが魔法世界の役所に怒鳴りこんでいた。彼女は世界を救った英雄の一人としてその名は一般に公開されなかったが賞金首ではなくなったのだ。

「ですから、貴女の賞金は取り消しですが、牡丹さんの賞金は消えていません」

「おかしいじゃないか！牡丹のおかげで最後の戦いのこちらへの被害は軽微で済んだと言うのに！！」

「私に言われましても・・・上層部が決定した事なのでそのかで詳しくは・・・」

「クソッ！！」

強く机を叩くエヴァ。

その頃再建された王国でもそのニュースは流れていた。牡丹の姿はそこには無い、彼女は力を使い過ぎたので病院に入っているのだ。テオドラはその令状を見るとそれを持って来た者にすぐに抗議した。しかしこちらも解らないと言う。直ぐに従者に支度させ牡丹の病室へと向かうが、既にその場に彼女の姿はなく空のベッドだけが残されていた。

――何処かの地下牢――

湿気の強いその空間に鎖で繋がれた一人の少女が居た、その目を瞑り長すぎる黒髪を乱して、その身につけているモノは黒衣ではなく病院の白い簡単な物であった。足を抱えて座っている彼女、時折その足をプラプラと動かしてまるで退屈を潰して言うかのようだ。その牢にもう一人の女性が放り込まれてきた、拘束服の様な者に身を包んでもなおその王族としての雰囲気を失わないアリカであった。彼女は何も言わずにその牢の中を見渡すと、その場にいた彼女、牡丹に眼を見開いた。

「お主、何故此処に居るのだ？お前は幽閉だろった筈だろう？此処は・・・」

「そうさ、此処は死刑囚が入る筈の牢だよ。そこに私が居ると言う事は・・・解るね？」

本を読まずにそこに座っているだけの牡丹は意外と珍しい、彼女は退屈そうだった。それこそ退屈に殺されてしまうと言わんばかりに退屈オーラを放出している。

「表向きでは確かに幽閉さ。でも裏側では君と一緒に世界を滅ぼそうとした魔女として死刑だよ」

「・・・何故じゃ！お前は英雄の筈だろう！！？」

「英雄なんてそんなものさ、人を超えたモノを倒した力、それを普通の人間が恐れない筈がないじゃないか」

ケラケラと笑うと再び彼女は足を動かし始めた。とてつもなく退屈そうな彼女、彼女の持っていた杖も本も無いのでとても退屈なのは間違えないだろう。

それから数日、静かに死刑の時を待つだけの二人、この牢ではまともな食事は出されなかった。二人に出された物は腐ったモノか残飯程度である。それも量は恐ろしく少なかった。アリカはもちろんソレに手は付けないし、牡丹は食への興味が薄いので出されても反応しなかった。

「しかし馬鹿だねぇ、その上層部と言うやつも」

「・・・」

「私をソレ程度で殺せる筈がないんだよ？傑作だね」

「・・・でも、痛いのであろう？」

「痛覚は普通の人間と同じさ、一定以上の痛覚を感じると痛覚神経

への伝達がカットされるとかだったら良かったのだけれど」

牡丹は牢に付いた鉄格子をその白すぎる手で撫でていた、少し錆びているがそれなりに頑丈である。それは彼女が握ると、ギシィッと鈍い音を響かせる。アリカがその方向を見てみると彼女の手の中に有った鉄格子は変形していた。そして彼女はその変形した鉄格子を牢からむしり取る。

「よし、そろそろ出ようか。こんな所に居ても息が詰まる」

「だ、大丈夫なのか？」

「黒の古書が無くても召喚術や魔法は使えるよ。大分威力は下がるけれどね」

黒の書を持っていれば完全チートに成れるのだが、アレがなければただの魔法使いである。まぁ、柘榴の力も受け継いでいるのでそう簡単にはやられないと思うが・・・柘榴の持っていた力を使うと異様に身体が疲れるのは仕方のない事であろう。

「だッ脱獄ブゥア！？」

顔が変形するほどの力で殴られた兵士が壁にめり込むその光景は恐ろしくも異様にシュールだ。牡丹はその鉄格子を媒介代わりに魔法を唱え始める。その魔法で創り出された物は5つの光球である。ソレは牡丹の周囲を飛び回りまるで2人を守るように動いている。牡丹は眼を閉じたままで歩き始めた。途中で守っていた兵士にその光の玉は光の矢を放ち難無くノックアウトしていった。途中の兵士達の休憩所で取り上げられていた牡丹の荷物を回収し、逃げるように走って行く。

「中々に入り組んでいるねっ」

「だ、大丈夫か？！」

「そう言われッてもッ体力的な問題ッ」

肩で息をしながら彼女はアリカと共に走り続ける、しかし体力の無い牡丹からすればただの拷問に近い。しばらく走ると室内に巨大な穴が空いていた。その穴は下が見えないほどに深く、濃い血の匂いがした。

「ここは・・・」

「はっ・・はっ・・昔の、死刑場みたい・・だね」

心なしか青い牡丹がソレに答えた、こびり付いた爪の痕が生々しく残っている。恐らく下には何かが有るのであろう。死体もそのままかもしれない。もしかすると魔獣が今も生きているのかも・・・。そんな嫌な想像が徐々に大きくなる。その時、後ろで大きな音が聞こえた。

巨大な体に何本もの釘などが刺され、顔には鋼鉄の仮面を固定されている巨漢が居た。その手には血がこびり付いた巨大な金槌。

「死刑人の登場かい・・・っ」

「ど、どうする！？」

アリカを庇うように牡丹が前に出る。牡丹の手には黒の杖、青い炎が揺らめいた。彼女はその杖に魔力を送り簡単な魔力の刃を造り出

した。巨漢は彼女達にその巨大な金槌を振りかぶり思いっきり叩き落としてきた。それを刃で受けるが流石に無理が有ったのか弾き飛ばされてしまう。
そんな巨漢と戦っていると部屋の外が騒がしくなった。聞きなれた声が数人分聞こえて来る。これは良いと牡丹は考え扉が空く瞬間にアリカを鬼の力を使いその方向に投げ飛ばした。
扉が開き、現れたのはナギだった、彼の持つその反射神経で何とかアリカを横抱き状態でキャッチする事が出来た。

「「なっ何をする（のじゃ）！！」」

「出来るだけ遠くに逃げて、私にも限界が有るんだ」

「何を言っているんだ！！お前も来るんだよ！！」

「ソレは無理かもしれない、こいつ等は私を逃がす気がないみたいだしね」

いつの間にか処刑人が増えている。しかもその手に持っている武器は様々だ。これ程の量を相手にするのは今の彼女では無理だと考えたナギはすぐにラカン達を呼ぼうとしたが、部屋の中から結界が張られ追い出されてしまった。

「おい！？牡丹！！」

「ははっキティとテオによろしくね、すぐには帰れなさそうだよ」

刹那、彼女の周囲には黒い靄が集まり始める。まるで彼女が柘榴を召喚しようとしているかのような光景だった。しかし柘榴はもういない、一体何をしようとしているのか。

そう考えると、彼女に異変が起きた。閉じた目を開き杖を浮かせ彼女は何かを唱えてその手から血を流す。

【古の魔獣】

彼女の中にその黒い靄は吸い込まれていく。漆黒をも思わせるその長い黒髪が風に靡き、周囲の死刑人がその光景に動きを止める。牡丹の背中からはえた3対の翼、長い髪の毛は地面につくほど伸びていた。紅いその目で死刑人を見下すように笑う、彼女は、彼女ではなくなっているかのように残酷な笑みを浮かべていた。

≪【書には、誰も逆らえぬのです。そう、運命さえも】≫

ナギは彼女のその姿を見た瞬間に恐ろしさを感じた。背筋が凍るような感触だ、殺意が身体を刺す。一瞬、彼女の髪の色が白銀に重なったが、アレは何であったのか。彼は仲間と共に疾風の如くその街から逃げ出す。その街では民が全員その美しい光りに眼を奪われていた。

「なっ何が起こるのじゃ？」

「見るな！姫さん！！」

ソレは唐突であった。牢屋の有った場所に巨大な羽が出現し、その羽根に多くの白いモノが向かっていく。その白いモノは人間達から出ていた。心臓部分からその大きな羽へと飛び立って行く。まるで・・・

「魂・・・」

そう、次々と人間達の魂がその羽根に吸い込まれていく。ソレはまるで神話に語られる審判の日の様であった。その光を極力見ないように紅き翼は進み、その光景を忘れる事にしたのだ。
彼等は英雄と言っても人間である。一人の大切な人を救う為ならば、犠牲は付き物だったのだ。

――誰も居なくなった街――
そこは、上位の魔法使い達の決定により地図から抹消されている。
その光を遠くで見たモノは言うであろう。黒衣の怒りを買ったのだ、と。当然の結末だ、と。

その死んだ街の中で、一人の黒衣の少女が眼を瞑り歩いていた。その手には黒の杖。

――魂を現世に繋ぎとめる者へ、救済の光を――

黒く伸び地面についた髪をそのままに、壊れた神像へと祈りを捧げる少女だけがその場所で動いていた。

２４話・多くの魂へ救済の光を（後書き）

白い綿帽子を冠った一人の女性は静かにお茶を飲んでいた。その前には透明な水晶が置かれている。濃い蒼と白を基本とした着物を着て、彼女は静かに黒の少女を見ている。
その目は、慈悲と慈愛、そして狂気に満ちていた。

25話・捕まる（前書き）

シリアス（笑）です。駄文

25話・捕まる

――命知らずのモノ――

都市と共に彼女が姿を消してから数年がたった。紅き翼は解散し既に伝説の存在と成っている。魔法世界では彼等を英雄として崇める者まで居る、変な宗教団体とかが出て来そうで恐ろしい限りだった。しかし帝国の英雄である黒衣の火防女だけが現在も発見できずに懸命の捜索が続けられている。その指揮の先頭に立つのは第3皇女テオドラ、自分の騎士を探すのは自分の役目だと言い張り一個大隊を使って捜索を続けている。

――その頃、人が居なくなった街には既に魔獣等が住みつき危険な場所と成っていた、数年であるがもう建物にコケ等が生えて神秘的ともいえる光景に成っている。

そこにはとある噂が有った、黒の布を全身に巻き付けた長い杖の少女。その少女と共に壊れた神の像に祈りをささげれば幸運が訪れると言う。あるモノは不治の病を治してもらった、や、見えなかった筈の眼が見えるようになった。等の報告も多かった。しかし、彼女を自分の物にしようとするモノは多く、トレジャーハンターがその街には良く入り込んでいた。

そして、檻の中でその少女は眼を覚ます。小さな檻ではあるが対人用で魔法封じ等の術式が施されていた。

「お目覚めかな？奇跡の巫女殿」

「最悪の眼覚めだね」

「眼を開かねえのか？」

「それは私の気分次第かな」

「チッ傷モノかよ。・・・だが、コイツは高く売れるぜ」

男の獣の様な眼が彼女の身体を舐めまわすように見る。白い肌に黒い髪の毛、整った顔に痩せたその体。貴族にも魔法賞にも高く売れるだろう。

「かの英雄様が、この程度かよ」

男の相棒と思える男が残念そうに牡丹を見た。牡丹は檻の中で膝を抱えている。

「もうちっと肉付きが良い方が高く売れねぇか？」

「馬鹿、そっちの方がぜって―高く売れるんだよ」

彼女は全く抵抗しない。それどころか今の状況を少し楽しんでいるかのようだ。乱れた髪を少し弄りながら心の眼を使って週の様子を見る。街からは既に離れてしまったようだ。

――それから少しすると、人の声が聞こえる場所に来た。檻には布と認識妨害魔法が掛けられていて中からも外からも様子をうかがう事が出来ない。ジャリンと重いモノの音、恐らく金貨だろう。コレで正式に奴隷と言う訳か、と彼女はその細い体を抱きしめた。

檻からだされ最初に首輪を付けられた。爆発物の匂いがする、恐らく無理に外すとボカンッだろう。まあ、痛いだけなので外せるのだが此処で外してしまっても面白くない。

少し、歪んで来ている彼女は残酷な笑みを浮かべる。彼女がどうやら何かの大会に出されるようだった、その為に武装は全て返却されたし、コードネームが奇跡の巫女である事も聞かされた。

「アンタが新入りね、眼が見えないようだけれど、頑張んな！」

亜人の女性がバンバンと背中を叩いて来た。恐らく同じ奴隷選手なのだろう。牡丹はいかにも聖者の様に挨拶すると壁の近くに立っていた、先ほどの奴隷が呼ばれ、少ししてから自分が呼ばれる。全く良い趣味だと思いながら舞台の上に彼女はその姿を現した。元々黒衣の火防女は帝国のトップシークレットであり、彼女はその姿を良く隠していたので周囲の人間は彼女が英雄だと気が付くモノは居ない。悲しい事だ、そう思うと彼女はその感情とは真逆に笑っている。

会場は想像通り騒がしかった、少し前の試合の熱狂が残っているらしい。その中に立つのは黒衣の火防女ともう一人の選手、その選手がどう見ても見覚えが有った、筋肉に大きすぎるその体、主に筋肉が眼に付いた。
そう、紅き翼の英雄であるラカンだった。彼は観客にその腕を上げると大きく振る、アピールは完璧であった、そして対戦相手を見ると彼はビシッと石の様に固まってしまった。

「あ・・・？牡丹か・・？」

「やぁ、流石に君は解ったか」

「挑戦者だと思っていたが・・・その首輪は・・・」

「奴隷として売られて見たのさ、どうだい？」

「どうだいじゃねぇよ！俺達がどんだけ心配したと思ってる！！」

「いや、居心地がよくてぇ・・・」

彼女にとっては人攫いの行為も街までの通行手段にしてしまったらしい。首輪を弄りながら彼女は不敵な笑みを浮かべた。まるで挑発するかのような笑みだ。妖艶でもある。

「で、どうするんだい？やるかい？？」

「馬鹿野郎、さっさと帝国に連れて帰るぞ」

「おや、ソレは良い案だよ、此処はアルコール臭くて嫌だしね」

ケラケラと笑う彼女、ラカンは審判に手を振りこの試合を無効にするように訴える。そしてラカンを含んだ審判たちの話し合いの結果、ラカンはイライラした顔で戻ってきた。

「畜生！あいつ等俺の話しを聞こうともしねぇ！！」

「ま、私は奴隷な訳だししょうがないよ」

奴隷とか魔法世界でも消耗品なのである。何かの病気になればさっさとポイされるし、主人の命令には逆らえない。それが決まりだからだ。いくら英雄の言葉でもそこまでは変えられなかったようだ。

「しゃあない、暴れるか」

「私の首がポーンてなるけどね、別に良いよ」

「・・・そのタイプの首輪かよ・・・・」

「アハッでも私には黒の古書が有るのさ」

彼女が首輪に手を掛ける。するとその首輪は大きな爆音と共に彼女の姿を包み込む。観客席がざわめくがその中で牡丹は平然と立っていた。黒の古書による攻撃無効と言うチート術式を使ったのだ。彼女の肌には傷一つなかった。観客席がざわめく、奴隷が脱走したと主催者側がすぐさま兵士を下へと降ろした。
兵士達の束縛魔法を彼女は平気な顔で跳ね返す。これが黒の書の力の一部だ。

「も、もしかしてあいつは・・・黒衣の火防女じゃないか！？」

観客がざわめきを増す。
あの英雄が此処に？等と言う言葉が飛び、自らの魔法に身を縛られた魔法使い達が眼を見開く、あまりにも黒衣の彼女が神々しく見えたのだ。その黒は太陽光を浴びても霞む事なく、当たり前のようにそこに立っている。

「ラカン、久々に君の肩に乗りたいな。そのまま私を連れて行ってくれよ」

「・・・（ニヤリ）おう、任せとけ」

黒の書物を持ったチート魔法使いと存在自体がチートな筋肉が共にその競技場から姿を消した。ラカン曰く眼に見えないスピードで走っただけらしい。お前は本当に人間かと聞きたくなったが、恐らく既に人間ではないだろうと考える牡丹であった。

25話・捕まる（後書き）

「平気で音速をこえるモノを人間とは呼ばない」
「お前の眼の前に居るじゃないか」
「・・・＝、君は人間じゃない」
「じゃあ、俺は何だ？」
「・・・筋肉？」
「！？」

28話・任務です（前書き）

これは・・・駄目だ・・・

28話・任務です

――任務は唐突に――

帝国に帰りテオドラの説教を3時間、兵士達の愚痴を2時間聞かされた。その8日後、何を思ったのか外の世界の学園から牡丹当てに依頼が来ていた、学園は英雄が一人いれば正しい魔法使いを育成できると考えたらしい、それにしても極秘扱いである牡丹の情報を何処で知ったのであろうか。

もちろんテオドラはソレに反対、烈火の如く良かった彼女はその依頼状を破り捨てようとしたが、その文字には見覚えが有った。かつて紅き翼で修行していた魔法が使えない少年、タカミチである。

「テオ、コレは彼からの依頼の様だよ？」

「し、しかしお前を一人にすると無茶を」

「大丈夫だよ、私はそう簡単に死なないだろう？」

「・・・奴隷として格闘技場居たのはどう言う事だ？」

「ナッナンノコトカナー？」

「・・・しかし、お前は良い意味でも悪い意味でも己を貫き通す・・・仕方ないが、許可しよう。それに、あの学園にはエヴァの奴も居た筈じゃしな」

テオドラはため息をつきながら彼女の意見を通す事にした。彼女も少しずつ大人へと成長しているのであろう。父の死後からとても逞

しくなっている。

「帝国のゲートを使いが良い、妾達皇族が普通世界へ行く為に作られた物じゃからそれなりに安全じゃろう」

「うん、そうするよ。失敗して身体が半分しかなくなるとかは嫌だからね」

実際にゲートの失敗はたまにある。まだ完全に人間を転送できる技術は存在していないのであろう。黒の古書には恐らく記してあるだろうが、あれは人間の進歩の5手先を行く事も簡単なので進歩を逆に無くしてしまう可能性が有る。

城の中に有った石造りのゲートを通るとそこは緑に囲まれた遺跡の中であった。恐らく外の世界であろう、この緑の多さと周囲に生えている木々や草、その他の特徴から考えると此処はどうやら日本の様であった。

此処で、彼女の現在の恰好を考えてみよう。黒衣の火防女、裸足であり黒い布を全身に巻き付けている。・・・・はっきり言って完全にコスプレ中の人間だ。

「・・・位置的には樹海だけれど・・・こんな建物が有ったのか・・・」

緑に覆われたその古びた遺跡、少しの機械じみた場所もあるが、今の牡丹にはそれが何なのか解らなかった。とりあえず持って来た鞄の中から他の服に着替える事にする。この格好で歩くほど肝は座っていない。

彼女が取り出した物は以前来ていたボーイッシュ風の服であった。露出も少ないし、その上に着物の羽織を着てしまえば完全に普通の人？だ。と、彼女は考えている。眼を瞑りながら彼女は森の外へと

何なく進んで行った。

「・・・で、君は何で樹海の中から出て来たんだい？」

「いや、私は・・その・・・眼が見えなくて」

「誰かに連れて来られたのかい？」

現在、ここら辺を巡回している警察に捕まってしまった。保護者など居ないので誰の名前を出せばいいのか判らない。どうすれば良いのか解らず彼女がキョドキョドしていると書の中に聞き覚えのない低い声が聞こえて来た。眼鏡を掛けたその男性は牡丹の保護者であると説明すると心配したぞと抱きしめて来た。

「もう御子さんの眼を放さないでくださいね」

「本当にありがとうございました」

そう言うとその男性と車に乗り込む。

「牡丹さん、何やっているんですか・・・」

「あぁ、タカミチか。短期で成長したねぇ」

男性らしさが増した彼を見ていると何年あの誰も居なくなった都市に居たのであろうと考えてしまう。確かにあそこは過ごしやすかったし、食糧の心配などもしなくて良かった。魔法の進歩とは便利な物である。使えるように有ってそう思った。

「お久しぶりですね、牡丹さん。心配しましたよ」

「迷惑を掛けたね、悪かった」

牡丹は飲みモノをタカミチに買い与えられ、両手でそれを持っている。と、言うよりタカミチは車の免許を持っていたのかと少し不思議に成っていた。

「君、何時の間に免許を取ったのさ？」

「お恥ずかしい話、何時か大事な人を助手席に乗せる事が夢なんですよ」

「へぇ、その女性は幸せモノだろうねぇ」

「・・・」

「？何だい？？その視線は」

「いえ、何でも有りませんよ・・・貴女が鈍いのは昔からですもんね」

煙草を咥えながら彼は少し寂しそうに窓の外を見た。牡丹は相変わらずその瞳を閉じていた、裸足なのはしょうがないのでそのままだ。タカミチが拭いてくれたのであるが、鼻息が荒かった気がする。牡丹は昔からの知り合いであるタカミチに気を許したのか静かに意識を遠のけたのであった。

――――――――――

――――

――

少し立った。心の眼で周囲の様子を見てみるとそこは既に街中であった。疲れていたのか仮眠のつもりが既に夜である。タカミチの車が駐車場と思われる場所に駐車される、タカミチの言う通りに彼女が進んで行くと簡単な部屋に入った。少ししか生活感がないが、この部屋の主は明らかであった。

「もう少し掃除しようよ、タカミチ」

「あ、あはは・・・」

埃が少し溜まっている。タカミチは布団を整えて彼女にこの布団で寝るようにと告げる。

「まあ、そう言わなくても良いじゃないか。丁度良い事に私の身体は小さい、君も布団で寝ればいい」

「・・・え？その・・・大丈夫ですか？僕も一応男な訳ですが・・・」

「君に私が襲えるかい？」

「・・・確かに」

「君は純情だからね」

牡丹はそう言うとお風呂を借りるよと言い、その部屋に付いているシャワー室へと向かった。都市に居る時は水浴びだったので温かい水は帝国ぶりだ、そんなに日は立っていない、しかし水浴びよりは確実に気持ち良いだろう。それにしてもタカミチは髪の毛を石鹸で

洗っているのだろうか、石鹸しかなかった。まあ、魔法で簡単に髪の毛は綺麗に出来るので気にしないが。
風呂を上がると少し本を読んだ、その後にタカミチが風呂からあがって来る事を確認すると先に横に成っていると言うと布団の中に潜り込む。

「ほ、本当に一緒に寝るんですか・・・」

「？私は気にしないよ、君よりもずっと年上だしね」

そう言えばそうである、今の状態では確かにタカミチを牡丹が見上げているが、年齢的には牡丹の方が化物並に上である。タカミチが顔を赤くしていると言うのに彼女はすぐさま眠りに付いた。

――翌日――
眼の下にクマを作ったタカミチと一緒に学園長室へと向かっている。扉を開けると面倒な程に広い空間に学園長が座っている、その長い頭には何が詰まっているのか、牡丹の興味はそこに釘つけに成った。タカミチ達の会話に加わり、一体何が目的で呼んだのか、基本何をすればいいのかを聞く事にした。
悪魔退治と国語の教師らしい。面倒だった。そしてその場所に乱入して来たのは見覚えのある金髪の幼女である。彼女は牡丹に抱きつくと興奮したように話を開始した。
――
結局、その依頼を受ける事にした。住む家はエヴァが自分の家に既に部屋が出来てると聞いたのでそこに行く事にした。タカミチの残念そうな顔は何だったのであろうか。

【「牡丹様！！」】

部屋の中に入るとそこには従者の二人が泣きそうな顔で抱きついて来た。甘楽とテルである。そして牡丹の部屋と言うのは物凄い人形の数であった、同時に恐ろしいほど本が有った。この人形、牡丹の身長並に大きいのだが、何故だろうか。恐らくエヴァが作ったり、テルが作ったりしたのであろうか。

「「【・・・人形に紛れ込まないで！】」」

「え？この為に有るんじゃないの？」

28話・任務です（後書き）

兎の人形を抱えた少女が歩く、彼女の手足の関節は球体関節だがその顔は普通の人間と変わらなかった。その少女は静かなカフェの中に入って行く。変わった者たちが集う、そのカフェへ。

27話・先生授業です（前書き）

何時の時代もこんなものです。

27話・先生授業です

――お人形の家――
牡丹が学園に来た次の日の早朝

「で、ナギに何て言う面倒な呪文を掛けられているんだい・・・」

「う・・・その・・・アイツと酒飲んだ後にケンカして・・・」

「キティも良い歳なんだから少し位落ち着きを持ってほしいよ」

黒の古書を使い彼女に掛った呪文を解除していく。簡単な作業だが物凄い滅茶苦茶な術式だったので手っ取り早く牡丹の血を媒介にして術式を正当化、その後解除を行った。しかし、面倒だった、いきなりリストカットしたので甘楽とテルに怒られたが、エヴァの魔力は回復したようだ。

「しかし、学園に悪魔が侵入ねぇ・・・あの校長仕事サボってるのかな？」

「どう言う事だ？」

「アレでも一応魔法使いだ、対魔の結界を張ったりすれば完全に悪魔はカットできる。それにそちらの方が意地魔力も何もかもが安上がりで済む筈だ」

何か、何か別の理由が有るのであろうか。例えるなら学園の中に悪魔か龍か、そう言った類の物を飼っていて餌が必要になるのか、裏では魔法使いを育成しているのか。考えられる可能性は異常に存在

した。
そんな牡丹の考えを知ってか知らずか、彼女達は牡丹に似合う服を探していた。エヴァが取り出したのは黒を基調としたゴスロリである、流石にソレは一般生活で着る事が出来ないとテルが却下。
その次に取り出したのは甘楽であった、妙に露出が多い着物で、胸元ががっぽりと空いている。何処かの遊女の様な形である。もちろん2人に却下された。
その次にテルが提案した服は白を基調としたワンピースだ、確かにワンピースと聞けばその通りであるが正面にプリントで海の中と意味が解らない言葉が書かれている。外国人が買って行くTシャツの様であったので却下された。

「で、三人で考えた結果何故この服に成ったのかな？」

まるでどこぞのお姫様の様なゆったりした服に身を包んだ牡丹、髪の毛は梳かされぼさぼさではなくなっていた。確かに飾りが少し多いが、普通の服としても・・・まあ、ファッションだと思えば行けるレベルである。

「お邪魔しますよ・・・て、牡丹さん、貴女は何と言う服を」

「私のチョイスではないからね、先に言っておくよ・・・。で、どうしたんだい？」

「どうしたんだい・・・て、今日牡丹さんの授業が普通に有るじゃないですか、初めてでしょうから迎えに来たんですよ」

「ソレはすまなかったね、所で・・・」

タカミチの肩幅を見て牡丹は子供の様な笑みを零した。

「肩車は出来るかい？」

「もちろん！」

「・・・タカミチィ・・・」

エヴァの地を這う様な声が聞こえた気がするが、華麗に無視しよう。最近彼女の自分に対する接し方が家族からランクアップして来ている気がするので。

ラカンほどではないが彼の肩幅も大きく、牡丹一人を肩車する程度には十分であった。元々エヴァと同じくらいか、もう少し大きい程度である牡丹、十分だ。

「おぉ、高いね」

眼を瞑りながらではあるが、しっかりと周囲は見えているようだ。

「では、行きましょうか」

「牡丹様、お弁当を」

【スタンガンも此処に】

「うん、お弁当だけで十分だよ、その気持ちだけ貰っておくよ廿楽」

【・・・御気をつけて】

その言葉を聞きながら彼女はタカミチの肩に乗って学校まで向かう。女子が多いと思っていたらソレもその筈だ。此処は女子学校らしい。

しかもエレベーター式の。何処の私立だと牡丹は考えながらタカミチの髪の毛をがっしりと掴んでいた、何故か嬉しそうなタカミチ、その顔は少しにやけている。

彼女の担当するクラスは中学クラスの３－Ｃ組だ。まず驚いた事は教室の中の荒れ具合である。中学生で此処まで荒れるかと言うほどに荒れていた。確かにこれ位の歳の女の子ならこれ位が普通なのかもしれないが、他人の笑い声は獣の唸り声と同じとも言う不快この上なかった。

「じゃ、じゃあみんな。新しい先生の紹介を」「何それマジ受けるんですけどーｗｗ」

「い、いや、だから」「昨日のアレ見た―？マジやばくねェｗｗ」

「・・・」「あ？タカミチ公が何か言ってたぁ？」

「知らねーｗｗ」

はっきり言って、これほどまでとは思っていなかった。学校には通った事がないが、まさかコレがその学校と言うモノなのであろうか、面倒な程に五月蠅く、化粧の匂いまでする。牡丹はため息を落とすと、落ちお込んでいるタカミチの肩に手を置いた。

「ぼ、牡丹さん・・・」

「君も教鞭をとるにはもう少し威厳が有った方が良いらしいね」

牡丹はそう言うとさっさと教壇に向かい歩いて行ってしまった。

「黙れ」

「ッ！」

教室に嫌な静けさが流れる。牡丹の聞き取りやすい静かな声だけがこの教室を支配していた。

「チャイムは、もう鳴ったよね？」

「は、はい・・・」

「それなのに、君達は何をやっているのかな」

まるで身体を押しつぶされるような威圧感に彼女達は全員牡丹を震えながら見つめている。机に乗っかっていたモノ、手に持っていたモノをそのままに彼女達は静かに話しを聞いていた。

「私は君達の国語の授業を受け持つ事に成った。異論が有るモノは学園長まで、そしてもし私の授業の時、今の状態が続いていたら・・・」

――君達の単位（イノチ）を貰う――

彼女は普通に単位と言ったのであるが、彼女らにとっては命を聞こえていた。まるで絶対に争ってはいけない物を見つけてしまったように彼女達は牡丹の言う事を良く聞いた、牡丹が言えばすぐさまその行動を実行するまるで兵隊の様な集団に早変わりだ。

「これは・・・流石牡丹さんと言っても良いんですか・・・？」

「脅しもたまには有効手段さ」

薄くその赤い目を開きながらクスクス笑う彼女、先ほどの行為は脅しだったらしい。しかし彼女の登場だけでよくもまあ変わったモノだ。化粧の匂いも雑談も聞こえないクラスに成った。既に不気味なレベルだ。

そして、彼女がそのクラスを請け負って3日が過ぎた頃、クラスの生徒の髪の色は全員黒、制服も標準、小テストでは上位に食い込むほどのクラスに成っていた。

「「【どうしてそうなった？】」」

「私の教え方に変な所はないと思ったのだけれど・・・」

27話・先生授業です（後書き）

「先生、お早うございます」
「牡丹様、お早うございます」
「今日はどのような授業か楽しみです」
「よろしい、では皆、授業を始めようか」
その光景は、他の先生方が見ても異様だった。

28話・お披露目（前書き）

つかれたー

28話・お披露目

――偽善者の集い――

魔帆良学園では最近噂に成っている事が有る、それは満月の真夜中に黒い布を巻き付けた様な服の女性が長い杖を持ち歩いていると言うモノだ、聞くだけではそれほど噂に成る事でも無いが、彼女が出現したその夜の月は血の如く紅く染まると言う、その月は見ているモノを狂わせ、精神を犯されると言う噂だ。
眼を閉じている牡丹にもその話は届いていた、彼女は以外と生徒から慕われているのだ。彼女を心配した生徒達が夜道は大丈夫か、一人で帰っているのではないか、何かあったら大声で叫んで下さいと言われている。

「（そうか、誰かに見られていたか）」

正式な魔法先生との顔合わせた今日の夜だが、何故か悪魔退治の依頼が学校側から来るのだ。それなりの給料なので参加しているが、それ以外であったら無視を決め込もうと考えている。

「牡丹さん・・・」

「あぁ、まさか予想外だよ。何せ2時過ぎだったからね、あの時間に生徒が居るなんて・・・」

「此処の生徒は変わり種が多いので、気を付けて下さいよ・・・」

月が紅く染まる現象は深く言えば彼女と関係ないのだが、噂の一人歩きと言った所だ。まあ、そう深く考えなくても良いだろう、人体

に被害のある物でも無いし、影響が有るモノをこのように人の多い場所で使うのは面倒だ。

「今日の夜・・・か」

黒衣の火防女に此処の魔法先生はどう言った反応をするだろうか、街を滅ぼしながらも英雄と言われた罪人、闇の福音と共に暮らし、死体を漁る悪鬼とも言われたこの身が。それを考えると面白くなってきた。所詮は人間、自分で評価する事が出来ないモノの集まりである。

正義と言う旗の下に集いし悪、黒の書にはその様に書かれている者たちも居るのだ。

「（所詮は大量殺人者、か）」

固く閉ざされたその瞳で、静かなその口元で、残酷な笑みを浮かべる彼女であった。

――――――――――――――――

――――

時刻は深夜１２時を過ぎた頃、世界樹広場には既に人払いの札が貼られている。結界も十分の様だった、先生方の中には若いのも居れば歴戦の覇者の様な物も居る。果たしてどちらが強いのか。タカミチがソワソワしながら牡丹の到着を待っていた、昔から面倒臭いモノには出席しなかったので当然か。ナギ達が出た式にも欠席と返した彼女である。

「・・・遅いのぉ・・・」

「来ないのでは・・・・？」

「しかし・・・アレでも英雄のひとりと聞きますし・・・」

「姿は知らんが、悪魔の大群を一瞬で灰に変えたとも聞いている」

「・・・えぇい！遅いではないか！！」

「（牡丹さん・・・何をやっているのですか！）」

不満の声が周囲に漏れ始め、彼女の悪口も飛び交う始末。タカミチは己の拳を強く握りしめながらその状況に耐えていた。心の中では黒い感情がふつふつと湧きあがっている。お前達に彼女の何が解るのか、半身を失う痛みが解るのか、と。

周囲のざわめきが増した頃、世界樹の上ではそれを楽しげに見る１人の少女と１匹の妖怪、妖怪はその目を不気味に光らせ手には銀色の糸が垂れていた。

「やあ、待たせたね」

ふわりと浮遊しながら現れる彼女、その閉ざされた瞳は周囲の魔法使いを馬鹿にしているようでもあった。彼女の近くに降りたモノはメイド服に身を包んだ蜘蛛の大妖怪、甘楽。その瞳からは殺気が漏れている。

「遅い！集合時間を何時だと思っているのか！！」

「あれ？おかしいね。僕は１２時ピッタリに来たんだよ？」

「何を馬鹿な事を！・・・ッ！？」

教師達が時計を見ると、確かに１２時ピッタリである。

「何をした・・・ッ」

「正直に自分の過ちを認められないのかい？コレだから魔法使いは」

「ッ」「おい！やめろ！！」

男が杖をその手に持ち魔法を唱えようとした、それを隣の教師が阻む。一瞬その場に緊張が走った、皆己の得物に手を掛け、鋭い視線を飛ばしている。

「学園長！なぜこのようなモノを学園に呼んだのです！！人間の決まりごとも知らない様な化物を！！」

「・・・」

学園長は、静かに口を閉ざしているだけだ。タカミチの視線が鋭くなる、まるで獣だ。同じく牡丹の隣では甘楽が糸を揺らしていた、何時でも先頭に入れるようにだろう。

「ヒトを化物と呼ぶなんて、それじゃあ聞くけど、君は人間なのかい？」

「何を言って」

「魔法を使えて、世界樹の力を感知出来て、その他にも空を飛べたり人を呪ったりできる。そんな物が人間だと言い張れるのかな？」

「貴様っ調子に乗るなよ！！」

男の手から無詠唱で魔法の矢が放たれるそれなりに威力のある物が牡丹の頭めがけて飛んで行った。しかし彼女に攻撃が当る前にその魔法の矢は方向を反転、男の手をめがけて飛んでいく。刹那、その瞬間、男の指が地面の上に数本転がった、呻き声をあげる男を見下す牡丹。

「自業自得、人を呪わば穴二つ。私は君に何もやっていない。君が君の魔法で指を失っただけ、それは君の選択した事で、私には関係の無い事だ」

「・・・今ので彼女の力は解ったじゃろう、これ程の方がこの学園の防衛に当ってくれるのじゃ。これ以降、彼女に危害を加えるのであれば儂もお主たちの処分について考えなくてはのう」

「・・・くっ、忌々しい化物め・・・！！」

「おい」

タカミチの拳が、指を失った教師の顔面を捉える、その力は非常に強く男の口から数本の白いモノが飛びだして行った。

「それ以上、牡丹さんの悪口を言うな・・・！」

血が少し付いたその手を握りながら、彼は肩で息をしている。我慢の限界であったのだろう。周囲の教師も静かに成っていた。普段温厚で温和なタカミチが人の前で殺気を露わにし、仲間の一人を殴ったのだ、こう成らなければおかしいであろう。

「がッ学園長！！今のは暴力では！？」

「・・・ワシが思うに、今の原因は君に有ったと思うのじゃがの？どうじゃ皆」

頷く、ただそれだけ。

悔しそうな顔で男は去って行く、肩を貸してくれる者も居なかった。

「気分を悪くされたかな？牡丹殿」

「気にはしないさ、もう馴れた」

【牡丹様、帰りましょう。私、このままでは】

この後の文字が乱れている。それほどまでに我慢しているのであろう。周囲に漂う殺気が今の彼女の状態を表している。

「私は此処で失礼するよ。死人は出したくないしね。それとタカミチ、ありがとう」

タカミチに優しく笑みを浮かべると、彼女は甘楽の腕に掴まりそのまま姿を消したのであった。

28話・お披露目（後書き）

やあ■■■、今日は何茶にする？もちろん紅茶の類しかないのだけれどね。

・・・解った、同じの。

解ったよ、すぐにできるからね。

静かな店の中、2人だけの会話。

２９話・訪問（前書き）

つかれた・・・

29話・訪問

――街中の出会い――

牡丹は1人で魔帆良の中にある商店街に来ていた。3人のセンスは破滅的で普通の服を選んでくれないのだ。普通の服（パーカー付き）を見つけると値段を確認して安いモノを加護の中に入れて行く、ズボンはスカート以外のズボンタイプを買った。そして少し余ったお金で羽織を修理に出す。

用事が終わり、帰りの道に向こうとしたその時である。長い金色の髪の毛でゆったりとした服を身に付けた女性が眼の前に現れたのだ、その女性は牡丹を見るとニヤリと笑みを浮かべる。

牡丹の頭の中に入っている黒の書の一節が思い出された。

【金色の髪を持つ大賢者、世界すら渡る能力を保有する】

「やあ、牡丹ちゃんだよね？」

「貴女は・・・」

「本名は明かせないのでね、マーリンとでも呼んでくれよ」

そう言うと彼女はその美しい金髪を乱暴に掻きながらケタケタと笑った。その様は確かに現実離れしている。彼女はその手に持った長い杖で床を叩きながらニコニコ笑っている。

「まぁ、その辺のカフェに入ろうか。そちらの方が体力消費が少ないだろう？」

「は、はぁ・・・」

彼女の言った通りにその辺に有ったカフェの中に入る、落ち付いた雰囲気のカフェで値段もお手頃であった。普通ならまだ授業の時間なので店内はガラガラに空いている。お互いコーヒーを頼んで向かい合い座る。

「・・・何故貴女が私の事を？」

「ん？まだ聞いていないのか。それも良いだろう。まぁ、宣伝の様なものさ」

彼女は何処からか名刺を取り出す、その名刺には名前すら書かれていないが魔力を少し通すと文字が浮かび上がってきた。どうやら電話番号のようだ。

「この紙は電話代わりにもなるから、無くさないでね」

「紙が電話代わり？」

「ぼく達は嘘はつかないよ」

彼女はそう言うとニッコリと優しい笑みを浮かべた。黒の書には残酷な性格で敵には容赦なく死を与えるモノと書かれていたのだが・・・これは彼女に対する評価を改めた方がよさそうだ。しかもカフェのお金も彼女持ちだし。

「そして、ぼくは君に情報を提供する為に来たんだ」

「情報？」

熱いコーヒーを少し口に含み、彼女の話に耳を向ける。先ほどの優しい表情から彼女の顔は変わり、真剣そのモノの表情に成っていた。

「青い瞳の白には気を付けた方が良い」

「・・・妙に遠回しな言い方だね」

「それがぼくさ」

彼女から洩れだす魔力は微量のモノ、しかし彼女の力は黒の書も持った牡丹よりも上であろう。彼女の身体はまるで魔力で構成されている様な物だと感じさせてしまう。下手をすれば妖精か神レベルの魔力を保有しているようだ。

「君の姉妹の事は残念だったね・・・」

「！そんなことまで」

「知っているよ、家の組織は君を監視しているとも言えるから」

「監視？」

「君が間違った道へ進んだ時、君を消す為にね」

「・・・物騒だね」

「そんなものさ、この世界を滅ぼされると以外と困るんだ」

どうやら牡丹が考えているより深刻な問題のようだ。彼女の顔がそう語っている、それにしても彼女レベルの人間が動くとはどういう

事だろうか、其れほどに大きな問題だとするのなら最悪だ、神話の出来事が、黒の書に書かれた出来事が本当に再現されるのかもしれない。

「ぼくは、それだけを伝えに来た、コレだけだ、後は君で考えてくれ」

「随分冷たいね」

「違うよ、ぼく達も忙しくてね、最近になって仕事が増してさ」

これから少し戦争に参加して来るんだと言う彼女、恐らく裏の世界関係の戦争なのであろう、普通の戦争に彼女程のモノが出る筈も無い、まあ、黒の書に書かれていた教団と言うのは普通でも裏でも関係なく参戦するらしいが・・・・。

彼女は代金を払うと、そのカフェから消えるようにして出て行ってしまった。しかも白昼堂々と転移魔法を使ったと言うのに周囲の人間には全く気付かれていない。恐ろしいほどの力と技術だ。

「（・・・白の髪に青の眼・・・その記述・・・何処かで・・・・）」

考え始めた彼女、飛んでも無く大きなモノに自分が組み込まれていると気が付いたようだ、彼女が思う以上にその力は大きく、裏の世界が動いている、渡された紙を見ると静かにそう思った。黒の書によると原作開始まではもう少し時間が有る、それまでに何かあるとは書かれていない。

もしもの時の為に、情報を出来るだけ揃えておこう、此処の学園には大きすぎる図書館島と呼ばれる場所が有るようだし。

「（魔界関係の書物・・・ソレから人類の歴史も調べておこうか）」

裏の世界は表の世界を昔から操作して来た、その為歴史の中にはそれなりの暗号が隠されていたりするのだ。ダヴィンチ等が暗号を残した事もソレに関係している。

数多に存在する世界の中を転移する能力を持つ彼女が知らせに来るほどの事態は普通ではないだろう。恐らく世界が動くレベルのお話しだ、もしかしたら歴史をなぞっているだけで父にも逢えるかもしれない。

「（死者は語れず、聖者は黙したまま。黒の歴史は何を語っているのかね・・・）」

多くの死を、多くの生を、繁栄と衰退を求めるその世界。彼が生きた世界も歴史も、これと同じであったのであろうか、あまりにも理不尽で、守りたいモノばかりが増えては消えて行く。

「全く、面倒だね。生きると言う事は・・・」

そう、面倒でありしかし何よりも楽しく、面白い、それが生きると言う事だ。彼女は少し残ったコーヒーを見た、少しだけ開けたその紅い瞳が黒い液体に映っている。

黒の歴史に名を残す3人の賢者の内の一人、大賢者マーリン。彼女の告げる運命とは・・・。

29話・訪問（後書き）

赤黒いマントを生臭い風に靡かせて彼女は戦場を当たり前のように歩く、その黒い剣は多くの血を浴びて不気味な光を反射していた。重厚なその鎧を身に付けた白く長い髪を持つ少女は狂気色の赤色に染まった月を見て笑みを浮かべる。もう少しで、もう少しで完成すると。

３０話・ちょっと出かける彼女（前書き）

今回はシリアス展開は無いよ！

30話・ちょっと出かける彼女

――和食なら――

最近牡丹が家に居る事が少ない、何故かと聞いても返ってくる答えは「キティは気にしないで良いからね」だ、私だって無駄に長生きしている訳じゃないし、愚か者でも無い。彼女が何か隠している事はすぐに解った。教師としてのシフトは少なく、週に1，2回授業と書類の為に出勤する程度だ。それだけの筈、そう、私が直々にあの妖怪爺に交渉したのだから。

「じゃあ、行って来るよ」

「あ、あぁ」

牡丹は今日も何処かへ出かけて行く、その手には簡単な物しか持たれておらず、何処かに遊びに行くと言う装備でも無い。彼女が持って行くモノは筆と墨、後黒の杖程度だ。彼女は盲目と言う事に成っているらしく、杖を持っていても誰も何も言ってこないのだ。

「最近、牡丹様は良くお出かけになりますね・・・私としては嬉しい半面、悲しいです・・・」

「・・・私もだ、テル」

【もしかして・・・】

甘楽が顔を青くしながら手に持ったメモ帳に文字を書いて行く、彼女は喋る事が出来ないので牡丹にこれで会話するようにと渡されて

いるのだ。

【男が出来た・・・とか？】

「「ッ！？」」

衝撃が走る。確かに牡丹は百合の人宣言はしていないし、長い間生きて来て良い人が居ないとも限らない。もしかすれば、そう言った人間が出来ていてもおかしくはないのだ。
そう考えたエヴァ達は一斉に顔を青くした、自分達が大切にしてきた、言わば一人娘が見ず知らずの男と居る所を想像してほしい、最悪だった。

「・・・久々に血を見る事に成るのか」

「御供します」

【同じく】

三人は服の内に隠し武器を仕込むと急いで牡丹の後を追って行ったのであった。
日光が普通の人には気持ち良い時間帯、言うなれば御昼だ。その時間帯は人外系である彼女達には厳しく歩くだけなのに非常に体力を削られる。

「クソ、何処に行ったんだ牡丹は！」

探しても影すらない。その辺りの人間に彼女の事を聞いても見ていないと言われてしまう。この学園の中でも盲目でしかも長い黒の杖を持っていればすぐに解ると思ったのであるが、そんな事も無かっ

たようだ。甘楽もテルも近くのベンチでぐったりとしている。
魔帆良学園にもナンパを行う男性は居るのだ、彼女達は美女軍団で、彼らがナンパを行わない筈がなかった。

「えぇい！うっとおしい人間が！！」

「すっかり時間も過ぎてしまいましたね・・・」

【疲れた】

一向に姿の見えない牡丹、それをナンパのせいにして彼女達は疲れた身体を木陰で休ませていた。いくらナギの魔法が解けたエヴァでも厳しいのだ、テルは球体関節を隠す為にメイド服ではなく普通の服にパンツ型のズボンなので慣れていないようだ。甘楽は・・・外見年齢に適した服だが、その首にはペット用の首輪が有る。

「おや？エヴァじゃないか、こんな昼間から珍しいね」

「タカミチか・・・お前いい加減に私を呼び捨てにするのは止めろ」

「はは、そう簡単には直せないよ。それよりどうしたのさ」

「牡丹を探しているんだ、見ていないか？」

「牡丹さんを？今日は学校に顔を出す日じゃないからなぁ・・・」

「と、なると・・・」

「可能性はありますね」

「可能性って？」

興味を持ったタカミチが会話に参加する。エヴァ達は彼女の行きそうな場所を考えているので、メモ帳に甘楽が書いて説明した。もしかしたら、牡丹様に良い人が出来たのかもしれないから始末しに行く途中だと言う。

「・・・・え？牡丹さんに・・・男・・・？？」

タカミチの頭の中では何も着ていないその幼い牡丹の身体を蹂躙する巨漢が浮かんでいた。どう言う想像力をしているのであろうか、少し気になることろだが、今はあえて突っ込まないでおこう。

「そんな・・・嫌がる牡丹さんを無理やり・・・」

【この人はどう言う妄想をしているのでしょうか・・・】

「気にするな、タカミチは昔からムッツリだったからな」

機能停止したタカミチを放置して三人は再び行動を開始した、図書館島にも学校に有る簡単な図書室にも行ってみたのだが姿がまったく見えない。おかげでエヴァは怒りの表情から心配の色が濃くなっていた。もし本当にタカミチの言っていた通りに成っていたらどうしよう、と。冷静に考えれば牡丹がそこら辺の男に負ける筈がないのだが・・・。

「おい、今日もあの子の店に食い行こうぜ！」

「あ、新しい子が、可愛いもんなぁ」

「全くだよ、最近そのおかげで出費が増えたぜ・・・」

「眼が見えないのに良く働く子だよね」

道を歩いて行く学生からそんな声が聞こえて来た。眼が見えない、そこに反応した3人は彼らの後に続く、何時の間にかその手は得物に伸びていたが、気にしてはいけない。

進んで行くとそこは最近出来た和食店だった、その中に足を運ぶと以外と繁盛しているようだ。店員は全員割烹着姿で、少し時代錯誤に陥りそうになる。

そう言っても、バイトなどの娘が髪色を染めているのでまぁそれなりだが。

「あれ、キティじゃないか」

割烹着姿の牡丹が姿を現すその手にがメニューが持たれていた。

「牡丹！探したぞ！！？こんな所で何をやってるんだ！」

「え・・・バイトだけれど」

「・・・は？」

「先立つ物は余っててもこまらないでしょ？」

確かに彼女の言う通りだ、生きて行く上では先立つ物が嫌でも必要になるし、多い方が良いのであるが・・・

「ソレに私は和食なら大体作れるからね、御給金もそれなりに良いんだよ」

「何故教えてくれなかった・・・」

「教えれば駄目だって言われるからね」

「「グッ」」

確かにその通りである、牡丹を大切に思っている彼女達は牡丹を働かせるなら人形を操って荒稼ぎすれば良いじゃないとか言いそうだ。

「牡丹ちゃーん、いつものー！」

「あ、はーい！キティたちも注文決まったら近くの店員さんに伝えてね」

そう言うと、彼女は厨房の方へと引っ込んでしまった。何故彼女はそこまで家庭的なのであろうか。そう考えるエヴァはとりあえず牡丹が持って来たメニューを見る事にしたのであった。

３０話・ちょっと出かける彼女（後書き）

和食なら何でもそろってる、ソレがその店の自慢。
盲目ながらも懸命に尽くしてくれる少女がアナタの支配欲を満たしてくれます！

「・・・牡丹、あのバイト今すぐ辞めろ」

エヴァはその店のチラシを見ながらそう言った。

31話・古き屋敷（前書き）

さあ、少しずつリンクを始めよう。

31話・古き屋敷

――古き手紙――

古い武家屋敷、その中に黒の少女は立っていた。此処まで来るのに恐ろしいほど時間を失ってしまった。どうしてこんな場所に有るのであろうと思わせるほどの場所、古びているが立派なその建物に残されている生活していたモノの優しい雰囲気が伝わって来る。同時に痛い程の辛さが時代を超えて彼女の肌を刺す。

「黒の歴史に書かれた最愛な場所・・・此処がかい・・？もう少し凄い所をイメージしたのだけれど」

古びた武家屋敷だが、荒らされた形跡もなければ何か天災の被害に有ったと言う形跡も無い。恐ろしいまでに綺麗な状態で残っていた。家名は既に薄れているモノの、それは何のか読める程度だ。

【稗田家】

重々しいその字が書かれている。何年前から此処にあるのか、何故こんなにも人間の住む土地から離れた所に有るのかは謎だ。しかしそれは確かにそこに存在していた。

「・・・新しい足跡、誰か先客が居るようだね」

彼女はそう言うとその手に持った黒の古書を強く持ち直した。もしかしたらそう言った類の物を盗む裏関係の者かも知れない。トレジャーハンターと言えば聞こえはいいが、違う言い方だとただの遺跡荒らしか墓荒らしだ。

威厳ある門を通り過ぎると武家屋敷の庭に咲いた真っ赤な彼岸花の群れが目に入る。人の手が入っていないとはいえ、これは凄まじい

モノだ。庭を赤一色に染め上げている。

「花言葉は美しいけれど、流石にこれは凄いね」

「きゃぁ！？」

突然聞こえた悲鳴、それは屋敷の中ではなく裏の方から聞こえて来ていた、牡丹が不思議そうに近づくと、そこにはボーイッシィな女の子と金髪の女の子が居る。

「大丈夫かい？」

「あ！ス、すみません。勝手に入って・・・」

「大丈夫だよ、私も勝手に入っているだけだから・・・君達は何処かの学生？」

「はい、高校生です」

「うぅ・・蓮子・・・何でこんな所に石が有るのよ・・・」

「そ、それを私に言われても・・・」

「・・・私の名前は牡丹、君達は？」

「私が蓮子で、こっちがメリーです」

牡丹が彼女達にどうやって此処に来たのかと聞くと、メリーには面白い事に世界の境界が見えるのだと言う。それを辿ってきたら何時の間にか此処に来てしまっていたと言う訳だ。此処は境界が多く、

二人はそれを調べに来ていたようだ。

「君達が知っている此処の事、私も聞きたいのだけれど・・・」

「私達の話しを信じてくれるのですか・・・？」

「？何の事」

「境界ですよ！」

「あぁ、確かに興味深い話だけれど。君達が嘘をつく人間には見えないしね」

牡丹がそう言うと、彼女達は嬉しそうに此処について話し始めた。話によると此処の管理者は数年前に行方不明に成ったらしい、既に高齢で後継ぎの存在も不明であったが、管理者が亡くなってからも此処はまるで管理されているように綺麗なのだと言う。その他にも井戸に映る少女の姿や裏庭に立つ古びた桜の木の下で泣く少女と言うモノが目撃されているようだ。

「で、その井戸は何処に？」

「もう少し先だよ、こっち」

蓮子が彼女を呼ぶ、そちらには確かに裏庭が有り、その恥の方にひっそりとその井戸は存在していた。屋根つきの井戸でしかも封鎖されている。未だ水がわいているのであろうか。何にせよ、危険だったからこうして蓋をされたのであろう。

「まず一つ目の奇怪、少女の映る井戸・・・」

「凄いわ・・・この辺りだけ境界がない・・・」

周囲の木々の音が聞こえる、その音がやや不気味に響く頃、蓋のされている筈の井戸から水滴が滴るような音が聞こえて来た。まるで井戸の中の誰かがこちらに気が付いたように、だ。

「ひっ」

「れっ蓮子！やっぱり帰りましょうよ！！」

「駄目だよメリー！君のその境界の事をもっとよく知りたいんだ！！」

「・・・勇敢だね、君は・・・」

牡丹は井戸の蓋を持ちあげて見る、石造りではあるが彼女には鬼(ざくろ)の怪力が備わっているので難無く持ち上げる事が出来た。その中は暗く、眼を凝らしても下まで見る事は出来ない。蓮子が懐中電灯で下を照らして見るとそこには水ではなく茶色いモノが映っていた。土である。

「水は・・・もう枯れているね」

「じゃあ、さっきの水音は・・・ッ」

「つ、次へ行きましょう！？」

次、桜の木の下で泣く少女だ。同じく裏庭にその桜の木は有った。老いた木である者のまだその枝にはしっかりと葉をつけている。そ

の木に何と無くメリーが触ろうとしたその時である。彼女の手に小さな石が飛んできたのだ、周囲を見渡しても誰も居ない、居る筈がない。此処は人の住む町から随分離れているし、そう簡単に来ようと思う人間は普通居ない。

――ザァァァ――
――ザザァァァ――

まるで壊れたラジオのノイズの様なモノが聞こえ始める。その音に気が付いたのは牡丹だけの様であった、彼女が周囲を見渡すと、枯れている筈の井戸の前に１８歳くらいだろうか、濃い紫色の長い髪の毛の着物姿の美しい女性がそこに立っている。まるで井戸の底を覗きこむように。

――何故――
――何故――此処に――
――――様――――

とぎれとぎれに聞こえるその悲しげな声、彼女は少しするとまるで亡霊の如く消えてしまった。

「い、井戸の所に誰かいた！？」

「じょ、冗談言わないでよ蓮子！！」

「（・・・紫色の髪・・・確か、私が調べた所・・・歴代の稗田家当主は濃い紫色・・・分家も同じく紫の髪・・・そして男性が居なくても出産が出来る呪いが掛っている・・・処女で出産できると書いてあったけれど・・・）」

あまりに現実離れしている。その本の中では初代の夫が妻のあまりの可愛さに独占欲を抱き、その呪いを掛けたのだと言う話もある。

「家の中には入れないのかな？」

「鍵が掛っているみたいで・・・・」

「どれ？」

彼女がその手を近づけると、そのカギは難無く開いてしまった、ガシャンと言う重々しい音が特徴的だ。

「・・・開いたね」

「開いたね・・・・」

「開いてしまったね・・・・」

三人とも顔を少し青くしている。まさか本当に開くとは思っていなかったのだ。その和風な扉を開けると内装が見る事が出来た。かなりの年代が経過している筈なのに中も綺麗中まで、少しだけ古びているとしか感じる事が出来ない。

三人は、勇気を振り絞りその中へと、足を踏み入れたのであった。

31話・古き屋敷（後書き）

現実離れとは、その者にとっての現実離れであり、その他の者にとっても現実離れと呼べるのかは、非常に難しい事である。

32話・古き武家屋敷（前書き）

ふう

32話・古き武家屋敷

――残された思い出――

古い屋敷の中は想像以上に綺麗であった。靴を脱ぎ持って来ていたスリッパで中に入る。メリーと連子、そして牡丹もスリッパを持って来ているとは何と言う奇遇であろうか。屋敷の中のモノは何一つ汚れていなかった、まるで本当に毎日管理者が管理に来ているかのようだ。飾られた水墨画も色あせていない。

「凄いわね・・・これは・・・家の中に全く境界がないわ・・・まるでこの家自体が境界よ・・・」

「こっ怖いこと言わないでよ」

だが、確かにこれは普通ではないだろう。周囲に有るモノは全て平安時代よりも昔のモノ・・・・しかしそれらは新品の様に傷がない。まるで時間が止まっているかのようだ。時間停止の魔術やその他の術式、呪いも調べてみたが、それらの反応は一切無かった。

「メリー、見て、この部屋!!凄い本の量だよ!!」

「本と言うより巻物が多いわね。でもかなり古いモノよ・・・今の時代では計り知れない価値でしょうね」

歴史の真実が語られた物も有るだろうし、今の時代では数億単位、歴史を変える力を持つだろう、その本の中に彼女達は居るのだ、信じられなくなる。下手をすれば魔帆良学園に有るどの本よりも貴重かもしれない。

「？これは・・・文筒？？」

綺麗な黒色の文筒、本来その名の通りに文を補完する為のモノだが、その文筒が簡単に数えても１０以上ある。当時紙はとても高価な物だった筈だ、しかし何故それがこれほど有るのか、答えは簡単だった。この家の主人がとてつもない権力者だったと言う事、だ。

「凄い豪華だね」

「この屏風の絵は・・・見た事のないモノね」

「箪笥とかは・・・勝手に開けたらまずいよね」

「「当たり前」」

そう言いながらも牡丹は文筒に手を掛けていた。人の手紙を見る事には抵抗が有るが、この家にいると何故か異常に落ち着くのだ。まるで自分の家の様に。

文筒を開けると溢れんばかりの文の群れが有った。それぞれが大切そうにしまわれており、紙が黄ばんでもいない。次々とその文を見て行く、熱烈なまでの恋文の数々だ。見ているだけで胸が焼けそうになる。

「す、凄い量だね。これ全部恋文かな？」

「全部見る・・・？」

「私はそうするけど、君達は？」

「気になるし、見るよね？メリー」

「えぇ、そうしましょうか」

他人の恋文を見ると言うのは変な気持になる。一体何代目の稗田が書いたのであろうか、その手紙の量には恐怖を感じるほどであった、別の手紙を探している途中で、気になる文を発見する。

【愛しい貴方は、何故逝ってしまったのか】

詩の様に書かれている一節であったが、その紙には水を少し垂らしたかのようなシミが有る。恐らくこれは失恋か、この手紙を書いた人物が死去した時に書かれた物であろう。

「失恋の詩か・・・切ないね」

「死んでしまったって事は・・・恋文を送る人が居なくなってしまったと言う事？」

「でもこの手紙よりも古い物も新しい物も有るから・・・」

「その手紙を出す前に、か、それ以外の理由が有ったのか」

どちらにせよ、不幸が有った事は明確であった。と言う事だろう。しかし不気味な点はその後にも多くの手紙が書かれていると言う事だ、相手の不幸など無かったようにその手紙は続いている。その手紙の中には同じく不幸をうたう詩も有ったが基本は恋文尽くしであった。

「こ、此処まで来ると怖いね」

「・・・蓮子もこれくらい欲しい？」

「いらないよ！怖いって言ったじゃない！！」

「（筆記が全部同じだ・・・でもおかしい、何故か解らないけれど、おかしい・・・）」

そう、どの恋文も全て同じ人間に、そしてそれを書いている人間も同じように感じるのだ。当時の人間の寿命は良い所で４０代、それより下が主であった筈、しかしこの恋文、６０年分以上書かれている。そしてこの筆記の方法から、書いたのは恐らく女性であろう。女性の寿命は、その時代それほど長かったであろうか。

「？あれ、コレだけ文字の形が違う・・・」

「ちょっとかして」

【貴女の文はとてもうれしく思う、しかし私は古き森に住む身分の低いモノ、貴女と結ばれる事など夢のまた夢でございましょう。貴女は美しく、獣の様な私には過ぎたる者。好意には、答える事が出来ません】

ソレは、拒絶の文である。しかしその後も彼女は手紙を書いている、その文が今まで見て来た中では最も古いモノだろう、それからも文は続き、別の手紙が見つかった。

【貴女の好意の深さは存分に理解させていただきました。もし、もし私と本当に一緒に成りたいのならば、明日の満月の夜、丘の上の桜の木の下でお待ちしております】

「どうらや、この恋文にやられたようだね」

普通の人間が書ける以上の量だ、異常でも普通でも一度逢おうと思うだろう。そして彼女と彼は出あったようだ、それから数年は手紙が書かれていない。

手紙を書く為の机だろうか、その部屋の隅には小さな机が有った。その机の上には簡単な本の様な者が置かれている。糸で纏められているようだった。

「・・・日記だね、これは」

この家に来た理由は黒の書に書かれていたからだが、何故こんな不思議なモノが多いのであろうか。

――月――日――

父は――しない――しょうがなく――死体は――

字は既に擦れて来ているが、恐ろしい文面であった。恐らく父が夫婦に成る事を認めなかったので仕方なく殺害したと言う事であろう。

「誰ぞ、そこにいるのか？」

「「「！！？」」」

彼女達の後ろから姿を現したのは黒いおかっぱ頭の少女であった。眼の部分まで髪の毛が伸びておりその目を見る事は出来ない。その少女が彼女達が手紙を読んでいたと知ると怒るのではなく、しっかりと片付けておくようにと言う。

片付けたあと、彼女達は気まずくなったのは早々にその家を後にす

る事にした。

「君は、此処の屋敷を管理しているモノかな？」

「あぁ、そうだよ。私が此処を管理している」

「・・・君は・・・人間かい？」

外に出て行った蓮子たちに聞こえないように彼女達は会話する。その言葉を聞いた瞬間に、その少女の口は三日月形に歪んだ、ギザギザと尖った歯がその口から覗く。

「ご名答、確かに私は人間ではない」

「では・・・君は・・・」

「お前は黒に示されてこの家を見に来た、違うか？」

「！何故それを」

「お前はこれでまた一つ、駒を揃えたと言う事だ」

意味が解らなかった、少女が不気味な笑みを浮かべる。

「私の名はウロの怪、覚えておくが良い」

そう言うと、彼女は姿を消していた。牡丹が不思議に思い正面の門を潜るとそこには変な風景が広がっている。来る時には無かった筈の空間だったのだ。その辺一帯が開けた場所に成っている。

「そんな・・・まさか！」

後ろを振り向くと、そこに武家屋敷など存在しなかった。まるで狐に騙されたかのようだ。近くではメリーと蓮子が石に背を預けて気絶している。

頭の中に、ケケケッと言う笑い声が響いたのであった。

32話・古き武家屋敷（後書き）

あっちへウロウロ、こっちへウロウロ。貴女は何処へ行ったのか。
家に染み付いた悲しみが、胸の中を支配した。

33話・一冊の本（前書き）

疲れがやヴぁいです・・・

33話・一冊の本

――ウロの怪について――

牡丹が調べたのはその周囲の民間に広がっている妖怪の事であった。実際妖怪は殆んどが不明の失踪を遂げているのでその姿を見る事は出来ないが、それでもあの少女は異常すぎる、空間を捻じ曲げたりそこに有る筈物もを平気で隠したりするその能力はどう考えても大妖怪レベルである。

調べて行くうちに、あの辺りに昔から口伝えで今まで伝えられてきた事を調べる事が出来た。

【森の武家屋敷】

そう言った簡単な名前ではあったが、何処かの記者は会社が調べたのであろうその事は事細かく書かれており、牡丹が言ったあの家と完全に一致している。しかしその記者はその家まで辿り着く事が出来なかったようだ。

少し前まで管理人が居たと言われているが、それも相当昔から伝わっている事らしい。

「その屋敷の全貌は不明だが・・・境界を漂っていると思われる・・・か、確かにあの家には境界がないと言っていたな」

境界とは人間などにも有る境目の事である、大昔の話だとその境目を移動できる妖怪も居たようだが、陰陽師も勝てなかったようで詳しくは残っていない。

「民間に伝わっているあの少女の事は・・・」

平安時代後期、その妖怪は姿を現した。人の眠った頃に街の中を歩き回り、男の名前を呼びながらペタペタと歩くのだと言う。その時間帯に出歩いているとその妖怪に頭から食われてしまう。らしい、子供を脅す為に作られた様なお話しだが、それでも今の彼女には十分な文列であった。

「そのモノはアッチへウロウロ、こっちへウロウロと歩くことからウロウロ様、やウロの怪とも呼ばれている。・・・成程ね、大妖怪じゃないか・・・」

「困っているようだね」

「ッ!?マーリンさん!!?何処から入って来たんですか!!?」

「ちょっと、図書館では声を落とした方が良いよ」

「あ、すみません」

突然現れた大賢者マーリン、彼女は牡丹の呼んでいる本を見ると、

「あ―成程」と言うように頷いた。

「君、出会ったのかい?ウロの怪に」

「はい・・・」

「ソレはラッキーだね、彼女はあまり人の前に出ないから」

「知っているのですか?」

マーリンは少し難しそうな顔をすると少しね、と答えた。しかし彼女は神出鬼没だ、急に消えてはいきなりその姿を現す、まるでチェシャ猫だ。自由で気まま、と言う意味で。

「良いかい、牡丹。歴史はなぞるモノではなく、辿るモノなんだよ」

「？どう言う事ですか」

「そのままの意味さ、君の知りたい事はマイナーなようでマイナーではない、普通の人も知っているが、その本当の物語を知っているモノは少ないんだよ」

「謎めいていますね、それはヒントですか？」

「あぁ、極上なまでのヒントだよ。でもこのヒントを生かせるかどうかは君次第さ」

彼女は自分の長い金髪を指でクルクルと巻き遊ぶ、牡丹の読んでいた本は勝手に元々あった場所へと帰って行ってしまった。マーリンの魔法であろう、何故彼女は公共の場所で魔法を使っても人にばれないのか。謎である。

「君はもっと視野を広げて本を読むべきだよ。何せ君の知りたがっている事はそんなにマイナーな事ではない」

「？でも、妖怪とか武家屋敷とか、かなり普通離れしていると思いますが・・・」

「それらの根本を探してみな、きっと答えな見つかるよ」

そう言うと、彼女は近くの椅子に腰かけ自分の持って来た本を読み始めた、ゲームスタートと言う訳だ。彼女のヒントを元に本当に求めている本を探しあてれば正解、それ以外だった場合彼女は反応を返さないだろう。これは難易度が高いゲームであった。この気まぐれさ、本当に猫のようだ。

「（ヒントが有っても、この図書館島の本の数は簡単に数えても億単位、１つ１つ探すのは面倒臭い。彼女の言う通りだとすれば、そんなに奥の方にはない筈・・・）」

一般生徒もいる階の本棚を探して行く、中でも古いモノだけを見て行くが、古いモノと言えば不思議の国等のアリス系の物や、昔の文豪が発表した小説や論文ばかりであった。しかもその辺りは全て読破している。

更に見て行くと、童子向けの本が一冊紛れ込んでいるではないか、手に取って見るとソレは絵本のようだが絵本ではなく、古びた赤色の表紙の本であった。

【つまをおったむしゃ】

と、ひらがなで書かれたそのタイトル、漢字に直すと恐らく【妻を追った武者】であろう。

「見つけたね、それだよ。意外と近くにあっただろう？」

「でもこれ、子供向けの簡単な物語だよね・・・？」

「君も昔読んだだろう？其れほどに浸透した昔話も珍しいけれど、これ程記憶に残らない昔話も珍しい」

確かに、読んだ気がするが、内容は全く覚えていない。どう言う訳

だろうか。この世界に来る前の追放世界にも有った筈だが、内容は全く覚えていないのだ。不思議な事に出だしも思い出せない。

「この本には面白いようにヒントが書かれている。しかもこの本を書いた人物は一切不明、誰が書いたのか、何時の時代の物語なのかもさっぱり不明、でも、それでもこれには君の求めているヒントが有る」

そう言うと、彼女はその姿を煙のように消してしまった。残された牡丹はただその本をジッと見つめている。完全に子供向けであろうこの本、しかし中を開いて見ると完全に活字であった。普通の子供ならまずこれは読まないであろう本、それを読むとするならば何処の変態か、と言うレベルである。

「（童子用書物なのにページ数が３００を超えるって・・・どんな本だい・・・）」

そう考えながらも彼女はその本を借り、家へ持って帰る事にしたのであった。

――――――

ではなく、古代文字で書かれている文メインが有るではないか。普通の人間にはただの模様に見えるようにカモフラージュさえれている。

「しかもこれ、暗号化されているんだよ・・・」

「ほう・・・ソレは興味深いな、調べてみる価値はありそうだ」

33話・一冊の本（後書き）

一冊の本が、歴史を変える事も有る。

３４話・奪取とも言える（前書き）

はい、徐々にリンクしています。

３４話・奪取とも言える

――稗田――

絵本を調べて解った事は、稗田阿礼が最初の稗田ではない事であった。更にその昔に稗田は居たのだ、しかも阿礼は既に呪いを受けており、一人で子供を出産したらしい。
では、その前の稗田とは誰なのか、エヴァや廿楽にも協力して貰い、日本の中でも最も古く、重要な古書が眠る書庫へと忍び込んでいた。

「まさか、眠りの霧で大胆に侵入するとは思わなかったよ」

「ううっうるさい！アレが一番楽だったんだ！！」

「廿楽やテルに任せた方が良かったかな？」

「わっ私の方が確実だ！！」

そんな会話をしながら彼女達は探しているモノを見つけている。実はこの日本と言う国、裏の世界とも関わりを持っているのだ。まあ、そう言っても政府高官の一人か二人が、だが。解決不可能な事件を億単位で裏の世界に依頼し、その犯人を気が付かれずに暗殺、等と言った事もしているらしい、恐ろしいことこの上ない話である。

「凄いね、魔導書まであるよ、コレの価値を知っているのかな？この国は」

「ふん、どうだろうな。まぁ、私が見ても売れば億単位だろうな」

【稗田・・・稗田・・・見つかりませね】

「しかし、物凄い書物の数ですね。しかも表の世界に公開されていない歴史まであります」

「まさに世界の裏に通じた場所だね、全く、これだから政府は・・・」

彼女達は更にその書庫の奥へと進んで行く、途中で興味深いモノは簡単に目を通して先に進んで行った。するとどうだろう、一際頑丈な扉が４人の前に姿を現した。
厳重に閉ざされたその扉、何故そこまで厳重に閉ざす必要が有ったのかと聞きたくなるほどである。

「キティ、何とか出来るかい？」

「吹き飛ばせば」「テル、ピッキングよろしく」

「お任せ下さい、牡丹様」

「な、何故！？」

「爆発音だとせっかく眠っている上の人達が起きちゃうでしょう？」

そう言ってる間にもテルは簡単に鍵を外して行く、機械で管理された所も簡単に、もしかすれば彼女にはそう言った細かい作業が似合うのではないか、もしかして趣味なのか、その辺りは全く解らないが・・・。
厳重な扉が重い音を立てて開いて行く、その先に有ったモノは広い空間と、その他には一冊の本であった。題名の無いその古書、しか

し牡丹にはその書物に見覚えが有る。

「稗田の屋敷に有った・・・日記・・・？」

そう、稗田の武家屋敷に有った日記である。しかし何故あれがこんな場所に保管されているのであろうか、これは確かに保管するに値するモノだが、この書物はまさか2冊あるのであろうか。いや、そんなことはあり得ない。彼女はそう考えるとその書物を手に取り調べはじめた。

【稗田阿明】

日記の後ろの部分に書かれた名前、ソレはどの書物にも登場してこなかった人物の名前だ。しかしそれ故にこれは貴重な物であろう。エヴァは眉をひそめながら「それが此処を使って守る程のモノか？」と不満気であった。

≪・・・誰じゃ、妾を目覚めさせるものは・・・≫

突然書から声が聞こえた、日記にはこの様な妖しい術式は使われていなかったはず、しかしソレは4人の前に姿を現した、まるで平安時代の女性の様な恰好で、髪の毛は地面に付いている。少し細すぎる気もするが美しい女性であった。

「き、君は・・・」

≪妾は文妖妃、思いの籠った書物に宿る妖怪じゃ、そう言うお主は・・・おぉう、成程のぅ≫

彼女はうんうんと頷くと、その日記の中の一ページを開いた。そこ

には少しの皺が有り、その形から涙が染み込んだ痕だと言う事はすぐに解った。そのページに書かれている事は自分が病に倒れた事、夫への謝罪の言葉だった、時代はかなり経過しているモノの生々しい。

≪此処に書かれている夫と言うのはお前か？≫

「残念ながら違うよ」

≪そうか・・・？同じ雰囲気じゃったが・・・≫

文妖妃はそう言うとまた唸り始める、この古書を彼女は守ってきたのであろう。彼女は恐らく、この書物に書かれている夫と言うモノを待っているのだ、妻の気持ちを伝える為に。

≪しかし、お主からはこの書に染みついているモノと同じ匂いがする・・・≫

「？どう言う事だい」

【牡丹様から同じ匂いが・・・？】

「その時点で、おかしいですね」

≪・・・じゃが、他人とも思えぬ。持って行け、お主ならこの者の夫に逢う事が出来るじゃろう≫

お主も奴も、奇妙な運命を背負っているようじゃからのう。そう言う彼女はその鋭い目を細めて牡丹を見た。まるで蛇が得物を睨んでいるようにも見える。

牡丹が懐に違和感を感じ、手を入れて見るとそこに有った恋呪の筆が少しの熱を帯びていた、珍しい事も有ったモノだと納得しようとしたが、それでは納得できない。

≪おう？ソレは恋呪の筆ではないか！・・・しかし、妾の知っているモノとは少し違うようじゃの≫

「君の知っているモノ？」

≪妾はその書物に憑依していた、そしてその日記を最後に使った人物も覚えておる≫

「！その人物を教えてくれかい！！？」

≪稗田阿礼じゃ、彼女は妾に良くしてくれた。しかしのう・・・死に際に狂ったように笑っておったわ。彼女は、阿礼は転生を繰り返していると言っていた、古びた花の髪飾りを付けて、夫から送られた筆を大事に使っていた事を覚えている≫

「・・・まさか、その筆が」

≪恋呪の筆じゃ。元々は防御の力を持っていない妻を心配して夫が作ったモノと聞いた・・・お主の物もソレに近いモノじゃな≫

そう言いきると彼女は眠そうに欠伸をする。

≪妾は再び眠りにつく、この書物はお前が持って行け、どうせ此処に有っても誰も見ぬし、他の者の眼にふれて良いモノではない≫

そう言うと、彼女は薄れて消えて行く。恐らくまた書の中に帰った

のであろう。牡丹はその書物を鞄に入れると、エヴァ達と一緒に指紋なども残さず帰る事にしたのであった。
そして、牡丹は有力な証言者を発見したのだ。阿礼の時代より前からその書物に憑依している文妖妃、彼女は後々様々な真実を教えてくれるだろう。まあ目覚めが何時になるのかは解らないが・・・。

３４話・奪取とも言える（後書き）

泣いているの？悲しんでいるの？大丈夫。妾が憑いている、お主の辛い過去も、少しは和らげられるように努力しよう、だから、そんなに泣かないで・・・。

３５話・染み付いた記憶（前書き）

良い案が浮かばない・・・

35話・染み付いた記憶

――何故、貴方は行ってしまったのか――

夢を見ている、一人の女性のが登場人物だ。幼い頃はその髪を短く、おかっぱの様に切り揃えていたその少女は、年齢を重ねるとその濃い紫色の髪の毛を伸ばして行った。悲しげな表情をしたその女性は、筆を握っては瞳を潤ませる。女性でも解る程に美しい女性が、一人で泣いていた。

≪どうじゃ、見えとるか？牡丹≫

「あ、あぁ、でも、これは・・・」

≪稗田の記憶じゃ、確か阿礼の前の・・・名前を思い出せぬが、阿礼より前の稗田じゃ≫

文妖妃はそう言うと半透明な体でケタケタと笑っている。彼女の住んでいる屋敷には見覚えが有る、あのウロの怪と言うモノが居たあの武家屋敷だ。その書斎と思われる場所で、彼女は髪に付けていた髪飾りを外し、大事そうに木箱の中にしまう。古びた木箱だが、彼女はそれを大事そうに鍵付きの棚の中へとしまった。

【何処へ・・・行ってしまわれたのですか・・・■■様・・・】

雑音の混じった彼女の静かな声、その瞳には光等と言うモノがなかった。まるで主人に置いて行かれた忠犬、いや、もう獣と言っても良いのかもしれない。彼女の身体からは多くの血の匂いがした。彼女の手の届く場所には小さな刀、護身用であろうか、その刀は、鞘

に収まっていると言うのにその殺気を隠さずに発していた。

【稗田様！！また人を殺したのですか！！？もう隠しきれませんよ！！？】

【・・・あぁ、あの愚か者の事ですか。私には既に愛する夫が居ると言うのに】

【何人目でございますか！！それも今回の方も貴族の方！！】

【・・・貴女は、自分の大切な者と大勢の見ず知らずの者、どちらを取りますか？】

【そ・・・それは・・・】

彼女の書斎へと入って来たこの家に仕えるその女性は彼女のその言葉に言葉を詰まらせる。これは恐らくあの日記に染みついた記憶なのであろう。時代を超えて使われてきたあの日記の古い記憶。

≪どうじゃ、少しは役に立つじゃろう。じゃが・・・お主の知りたがっているウロの怪と、稗田が何処に行ったのかは解らぬがね・・・≫

彼女がそう言うと次第に過去の風景がかすれて消えて行く。眼が覚めるのか、そう考えていると今度は別の光景が映り始めた。その光景に文妖妃も眼を丸くする。何故こんな事に成ったのかと。自分が作った世界ではないと彼女はその鋭い目に警戒心を宿らせる。牡丹の近くには黒の古書が浮かんでいる、不気味に黒く禍々しい靄を発しながらこの夢の世界を支配しているかのように。

≪荒野の様じゃのぅ・・・・≫

「・・・いや、ただの荒野では無いよ、濃い血の匂いがする。此処は私が思うに・・・・戦場」

そんな事を言っていると、後ろから馬の嘶きが聞こえて来た。牡丹が後ろを振り向くとそこには黒馬にまたがった白銀の髪を持つ女性が重厚な鎧に身を包み、赤黒いマントを身に付けていた。顔は光の関係で見る事が出来なかったが、彼女の後ろには多くの黒い鎧を付けた騎士たちが馬に跨り続く。何処かで見た漆黒の国旗を風に靡かせ、目の前の物を関係なく蹂躙し、破壊していく。

【踏みつぶせ！叩き割れ！！我らが王に贄を捧げるのだ！！】

【勝利は我らに微笑もう！！いざ死地へ！！我らが故郷へ！！】

大きな剣で敵の首を狩ると、そこには紅い雨が降り注ぐ、大地を赤に染め上げ、彼女達は進軍していった。その中の白銀はソ恐ろしいほどに強く、理不尽なまでに死を振り撒いた。
黒の軍団が通り過ぎるその後には、屍の山が積み上げられる。その軍の中に一人、見覚えのある人物が居る。鎧の形も色も全く同じだ。首なし族のデュラ、先の大戦で協力してくれた者だった。

【・・・】

顔は見えないが、その白銀の髪を持った女性はその血の様に真っ赤な瞳で、憐れむようにその死体を見ていた。しかし何故か馬鹿にしているようにも見える。
黒い鎧を血の色に染めて、剣を片手にぶらんと構えて、ただその屍の山に冷たい視線を向ける。

【・・・可哀そうに】

そう言うと、不敵な笑みを浮かべボロボロの赤黒いマントを翻し、彼女は多くの騎士を引き連れて進軍していったのであった。

≪なっなんだったのじゃ！？今のは！！？≫

「・・・黒の書に染みついた・・・記憶とか・・・？」

霧のように消えた黒の軍が居た場所を彼女達は見つめていた。

―――――――

―――

――

「・・・う？」

眼を開けると、朝の光が両目を焼いた。いや、焼いたとはただの例えだ。直ぐに眼を瞑る、何時も通りだ。心の眼で周囲を見れば痛くも無いし、普通に移動できる。

黒の古書と日記が鞄の中に有る事を確かめて下の階へと降りた、するとどうだろう。見た事の無い少女が客室に居るではないか、しかも妙に生気がない。

「キ、キティ？彼女は誰だい？」

「あぁ、アレは私の魔力と現代の科学を融合させたガイノイドと言う物の試作品らしい。眼鏡の娘が置いて行ったんだが・・・」

「・・・」

「まだ機能していないのかい？」

「あぁ、まだ試作段階らしいしな」

緑の髪の毛を持つその少女は家の隅でただ立っているだけであった、一応服は着ている物の、女性の恰好とは言いにくい、そこで甘楽とテルに彼女の事を任せ、牡丹は仕事に出かける事にする、朝食はテルが用意してくれたパンだった。甘楽は現在料理勉強中。

「おい牡丹！」

「？どうしたんだい、キティ」

「スタンガン忘れたぞ」

「普通な顔して持たせないでよ、此処から学園に行くには電車に乗らなくても行けるし」

「馬鹿、職員にセクハラをして来る奴が居るかもしれないだろうが！タカミチとか！！」

「・・・彼は小心モノだからなぁ・・・」

「あ、そうだったな。安心したぞ、だが一応杖は持って行け」

この会話は、一体何なのであろうか。雰囲気ぶち壊しである。

３５話・染み付いた記憶（後書き）

白銀の髪の女性、彼女を見ると何故か懐かしい気がした。

３６話・息抜き（前書き）

何か、最近物凄く疲れます。

36話・息抜き

――休息――

エヴァは最近ゲームと言う物に熱中している、しかし・・・何と言うか・・・下手の横好きと言うのか、彼女はそんなにそのゲームと言うモノが得意ではない、しかも今回彼女が買って来たゲームはレベルを上げていくモノで、職業をしっかりと選ばなければ難易度がぐっと上がると言う上級者向けの物だった。

「あぁ、買ったのかい？それ」

【ネット上ではかなりの難易度だと噂に成っていましたが・・・】

「エヴァ様、途中で飽きて投げ出さないでくださいよ？」

「大丈夫だ！私もそこまで下手じゃない！！」

――3時間後

「・・・牡丹、助けてくれ・・・」

「・・・私は明日の授業のプリントを作成しているのだけれど」

「もう後は印刷だけだろう？」

「そう言う所は良く見ているよね・・・君」

牡丹はやれやれとテレビの前のソファーに座る、エヴァのステータ

スと現在のステージを見て少し驚いた。何と最初のステージで、しかもレベルが全く上がっていないのだ。彼女は3時間もゲームを続けていたのに、何故レベルが3なのだろうか、疑問が尽きる事がない。

「はぁ・・・レベルはあげておくから、君はもうお風呂に入ってきな」

「・・・解った」

そう言うと、エヴァはすくっと立ち上がり風呂の方へと向かう、彼女について行くメイド達にアイコンタクトを送ると、漢書たちは静かにうなずいた。エヴァは一人で風呂に向かわせると簡単にしか髪を洗わないのだ。眼を瞑ったままゲームをするのも変な感じだが、それでも家族の頼みだ、仕方ないだろう。

「えっと・・・操作は・・・あぁ、成程。コマンド式か」

ドラゴンアドベンチャーと言うシリーズ物のゲームで、これはその最新作らしい。牡丹もゲーム等は全くやった事はないが、こう言うモノはとりあえずレベルを上げるモノだと生徒に聞いた事があるので、その方法を試そうと思う。確か最初のお城の周辺に出て来る若干弱い敵を永遠に狩り続ける作業だ。

少ししてエヴァが風呂からあがって来た。既に何処にも出かけないようなラフな格好になっている。着ているモノは薄いモノで、布の生地が若干透けている気がするのだが・・・まあ、彼女の趣味なので黙っておこう。

「どうだ?進んだか??」

「いや、君が居ないのにイベントを進めちゃ駄目だろう？だからレベルを上げていたのさ」

「ほう、どれど・・・は？」

主人公キャラクターの下に表示されているレベルが異様であった。この短時間にどうやればこうなるのであろうかと言える程にキャラクターのレベルが上がっている。普通、このゲームの序盤はレベルが１５以上あれば簡単に中盤まで進められるのであるが、彼女の育てたレベルは何と

「６８！？牡丹！どうやったんだ！！？」

「え？たまに出て来る銀色の三角錐型のモンスターを余さず狩っていたんだけれど・・・」

「レアモンスターじゃないか！！」

主人公技も最初に比べて強くなっているが、その相棒と言う事に成っているキャラクターのレベルもそれ相応に上がっていた。しかし武器は最初の物である。

「もう良いかな？私もそろそろお風呂に入って来るよ」

「あ、あぁ、ありがとう」

牡丹はエヴァにコントローラーを渡すと、着替えを持った廿楽を連れて風呂へと向かって行った。

それにしても、何故こんなに大きく風呂を作ったのであろうか、レベル的には大浴場である。王族の入る様な豪華な装飾だった。もう

慣れてしまったが、エヴァの微妙なセンスが所々に光っており、少し残念とも言える。

【お背中お流しいたします】

「嬉しいけれど、その手から出ている糸は何かな？」

【】

「何か答えようよ、まあ、君の考えている事は手に取るように解るけれど」

全く、最近の甘楽は何故か縛りたがる事が多い、そのままの変な展開に巻き込まれないようにしっかりと怒っているのだが、彼女は元々女郎蜘蛛、リードしたいのであろう。まあ、甘楽は牡丹やエヴァの教育によって、虐められる事に快感を覚える事が出来るのだが・・・。

正直、その生癖がやったいだ。一般的にドMと呼ばれるキャラに育ってしまった・・・。

【相変わらず、綺麗な髪ですね】

「そう言ってくれるとありがたいよ、まぁ、手入れも何もしていないのだけれどね」

長すぎるその髪を甘楽は丁寧に洗っていく。

「しかし・・・あの夢の中で見た光景は何だったのかなぁ」

荒野の黒い騎士団。白銀の女性、そして魔法世界に居た筈の女鎧騎

士。
稗田の家に居た濃い紫色の髪を持つ女性、そしてその傍らに有った恐ろしいほどの殺気を放つ刀。消えたウロの怪に文妖妃、そして何故か国の最高防御設備に隠されていた稗田の日記。

「全く、運命は一体何を望んでいるのさ・・・マーリンもなぞるではなく、辿ると言っていたし・・・白の髪の毛の女性も解らないし・・・」

【・・・無理はしないでくださいね】

「大丈夫さ、今は、ね」

正気を保っていられるのは、父への思いかもしれない。最近になって、変な出会いや情報が一気に入ってきたのだ、混乱しない方がおかしいだろう。
白の髪の少女に気を付けろ、重々しいマーリンの真剣な声が頭の中を回る、彼女に渡されたヒントと、その他の情報を集めて稗田の家も、ウロの事も知った。しかし問題なのは白髪の少女である。

「（・・・白髪の少女の情報がもう少し有れば・・・）」

風呂の中でも彼女の考えと悩みは、尽きる事がなかったのであった。

３６話・息抜き（後書き）

秘密のお茶会、今日は誰が来るのかな？帽子をかむったボーイッシュな少女は楽しそうに笑った。

37話・始まりの予感（前書き）

私、とことんついてない・・・

37話・始まりの予感

――溶ける――

数年など、早かった。監督していた学生が卒業し大学へ進む者、そのまま就職する者と多く居たが、その中でも不良には手を焼いた。まあ、最終的に産まれて来てごめんなさいと言わせるほどに教育して来た。盲目と言う彼女の設定上から、不良達からは盲目の死神と言われ恐れられている。

「・・・よし、提出用のプリントは全部だね。明日奈」

「本当・・・先生のプリントは多すぎですよ・・・」

「まあ提出物の点数もテストに入るから赤点はあまり無いだろう？」

高等部の様に提出物の点数を足しているので赤点者は少ない。ただし提出物の点数が大きいので提出しないとかなり低い点数に成ってしまう。出せば天国、出さねば地獄だ。因みに、エヴァは牡丹を守る為と言い明日奈と同じクラスに転校生として在籍している。

夕暮れ時の紅い夕陽が職員室の中を照らしていた。

「そう言えば先生、最近先生体調が悪そうですけど、大丈夫ですか？」

「？あぁ、最近君のクラスは午前中の授業だからね、私は朝に弱くて」

歳かな、そう笑う彼女。見た目成長していない長い黒髪もそのまま

だ。固く閉ざされたその瞳で彼女は明日奈の顔をじっと見つめる。
最近彼女もクラスに溶け込んで来ている、まあ、彼女のクラスは変わり種が多いので逆に馴染めない方が珍しいが・・・。何時もエヴァが疲れた顔で帰って来る理由だ。
ソレと、最近試作だったエヴァの魔力と近代科学を合成させたガイノイドが起動した。名前を茶々丸と言う。そして、帝国側にテルが出張している。理由は人数不足でテオドラが困っていたからだ。テルは優秀だし、戦える。因みに甘楽と一週間交代で帝国に出張しているのだ。

「明日はタカミチの授業が有るからね、教科書を忘れちゃだめだよ？」

「大丈夫です！先生、さよ―なら！！」

「気を付けて帰るんだよ―」

そう言うと彼女は自販機で買ったコーヒー牛乳を飲む。紙パックにストローを刺すタイプの物だ、昔からある物だが、味は確かだった。確かに職員室には温かいコーヒーも有るのであるが、彼女は恐ろしく気まぐれなのでこう言う行動をとるのだ。

「牡丹さん、お疲れ様です」

「やあタカミチ。そろそろ終わるけど、タカミチこの後何処行く？」

「そうですね、最近は他の仕事も有りませんし、久々に飲みに出も行きますか？」

「そうだねぇ、私もこの後夜のお仕事まで暇だしね」

夜のお仕事とはもちろん悪魔退治である。最近の大きい事件と言えば伯爵級の悪魔が学園内に侵入した時いたが、【何か】に喰われてそのまま消滅と聞いた。何に食われたのであろう、やはり、この学園には何かある。
タカミチも、その他の魔法関係者も知らない何か、それが絶対にこの学園には有る。

「・・・ねぇタカミチ」

「？何ですか」

「君、私を肩車するの好きだよね」

「あはは、数年前から続けていますからね」

そんなくだらない会話を交わしながら彼女はタカミチの髪の毛を掴んでいる。

「そう言えば最近、牡丹さんは良く出かけていましたよね」

「少しね、聖杯をめぐる戦争で一人の少女を虫の老人から助けたりしていたんだ」

「・・・それ、軽く世界を超えていませんか？」

「私はラカンよりも常識は有ると思うよ？」

「僕からすれば確実にチートですがね」

そう言いながら少々日が暮れ暗くなった道を彼と彼女は共に行く、学園のメイン街から少し離れた場所にそこは有る。安いのに美味しい店だ。まぁ、そう言っても牡丹はアルコール類はあまり飲まないのでそこで売っているちょっとした御摘みが目当てだったりする。

「そう言えば牡丹さん、聞きましたか？」

「？何をだい」

「何でも何処かの魔法学校から魔法先生が派遣されて来るらしいですよ？僕もあまり深くは聞いていませんが・・・」

学園長が嬉しそうだったと聞いた瞬間に牡丹の顔は曇った。此処の学園長は良い奴なのか嫌な奴なのか解らないのだ、少し前は何故か牡丹にお見合いを勧めて来ていた。

「それは・・・私にとっては面白い話ではないね」

御摘みを口の中に放り込みながら彼女は少しその整った顔を歪めた。この学校には正義の魔法使いを目指すモノがとても多い、それ故に歴史の裏側を語る者達にとっては辛い所なのだ。正義の物語は語る者達によって美化され、暗い部分は後世に伝わりにくい。

「この学園でも、あの大戦に参加したモノは少なく、裏を伝えようとはしない」

「・・・」

「私は・・・僕は伝えるつもりだよ？真実と言うモノをね、それが私だ」

黒の古書と同じく、彼女はこの世界の歴史をそれなりに書き残している。ソレは既に本当の歴史を語る書とも言えるが、それに牡丹は気が付いていない。

「牡丹さんは、昔から変わりませんね」

「あはは、私がそんなにコロコロ変わったら面倒だろう？」

長い黒の杖は彼女のすぐ横に立てられていた。この黒の杖は火防女の正装として与えられた物だ。楔の神殿に一式有ったモノで、鬼孕みの儀式の後洞窟に籠っていた時には既にあの杖は持っていた。

「さて、そろそろ仕事の時間だ。失礼するよ」

牡丹はそう言うと、料金をテーブルの上に置きその場を後にした。

紅い月が学園を不気味に照らす、その中悪魔の亡骸の上に立つ黒衣の火防女、その長い黒の杖の先には青白い炎が灯っていた。彼女はその閉じていた目を静かに開く、紅い紅い、まるで血の様な紅い瞳が姿を現した。

「世界を繋ぐ者達に、その命貸し与えたまえ」

刹那、彼女に襲いかかる3体の影、その影は魔力を溜めこんだ腕を振り上げて彼女に叩き落としたのであった。しかし、彼女は傷つく事無く、悪魔の拳は2つに分かれていた。

「汝の死を今此処に」

残酷な笑みで彼女は紅く染まった血の海で残酷に笑うのであった。

37話・始まりの予感（後書き）

まるで地獄、神代の神はその世界の未来をみてそう呟いた。

３８話・依頼は・・・（前書き）

少し学園から離れるお話

38話・依頼は・・・

――その日に彼女はそこに居ない――

出張だ、そう、ただの出張。褐色の肌の少女、真名と言う生徒と共に日本の外の森へと来ていた。黒衣の火防女の正装で、その手には黒の杖が持たれている。確か今日、新しい魔法教師が来るのであったか、まあ、別にそんな事はどうでも良い、今回の依頼は大胆にふざけているのだから。

「でも、本当に龍なんて物が居ると思うかい？先生」

「私が思うに、罠かな」

龍なんて幻想種、普通人間の眼の前に姿を現すモノではない。しかもあの種族はプライドが高く数百年前に殺し合っていた記憶が有る。もしまだ生きているとするのなら、ソレはとても賢く強い種であろう。そう簡単に人間に危害を加えようとするだろうか。

「此処が目的の場所だね」

「・・・何もないですね」

「そうとも限らないよ」

牡丹が素早く片手で何かを掴んだ、ソレは弓の様であった。しかも、普通の弓ではなく魔法の弓だ。光系の魔法、魔法の矢を彼女は平気な顔で掴んだのだ。

「襲撃、民族でもなく。私達2人に恨みを持つ者だろうね」

「私もですか」

「君の私の様に多くを殺しているだろう？当り前さ」

人数的にもね、と牡丹は笑う。周囲には先ほどまでまるで違う気配が漂っていた。殺気に満ち溢れた森の中、2人ともこの森には初めて入る。恐らく、あちらの方が有利であろう。このままでは、だが。

「真名、伏せな」

「？」

真名が腰を低く落とすと、牡丹はその黒の杖を両手を使って頭の上で降り回し始めた。空気を切る音が聞こえて来る。ヒュオッと言う音ととこの、その杖には青白い炎が灯っていた。

「不利なら、有利に変えてしまえば良い」

刹那、突風が吹き荒れる。周囲の木々をなぎ倒し、あるいは切り刻みその風は吹き荒れて行った。そこに残った者達はローブを着こんだ正体不明の魔法使いに、牡丹と真名だけだ。
襲撃して来た集団は少しの戦力を先ほどの風で失っている。

――そして、牡丹はその紅い瞳を開いた――

「やあ皆さま。満身創痍と取れるが、大丈夫かい」

「・・・っなめた真似を！」

光の矢１０５本。先ほどとは大きく違い、今度は物量で潰しに来た、流石の真名もこれには少しの動揺を見せる。

「先生、大丈夫かい。これ」

「無問題、伏せてな。君は私より身長が大きいからね」

「この数だ、魔法障壁など役に立たない筈！」

「君は私が大戦時何と呼ばれていたのか忘れたのかい？」

彼女は黒の杖を静かに地面について、そのまま動こうともしなかった。その矢は彼女の身体目掛けて容赦なく迫り来る、しかし彼女は助けを求めたり、泣いたりなどはしなかった。ただ、目の前に迫っているその矢を見る。

それは一瞬の出来事だ、彼等の魔法は確かに人を簡単に殺せるレベルだった。しかし彼女は何もしていないのに、彼等の魔法の矢は掻き消えた、掻き消されたと言っても良いだろう。

「・・・馬鹿な・・・ッ！」

「マジックキャンセルだと！？上級悪魔でもそんな能力を持っている奴は居ないぞ！？」

「私にも、魔法は使えるんだよ」

彼女の周囲には何時の間には魔法陣が展開されていた。大規模なモノではないが、その細かさから常人には描けるモノではない事が明

らかだ。
吸魔、彼女はそう呟いた。先ほどの魔法の矢を、彼女は全て吸収したと言うのだ。有り得ない、有ってはならないレベルの出来事だ。
「そうか・・・お前は大戦の時【戦火の徒】と言われ恐れられた化物！！そう簡単には死なないか！！」
「そうさ、私は既に化物、君達の様な者が勝てる筈の無いモノだ」
黒から黒が溢れる、その黒い靄は周囲を暗く濁らせた、太陽の光も遮られ薄暗くなる。その中、彼女の紅い瞳が嫌に輝いていた。光の無い筈のその瞳がまるで獲物を確認するかのように動く、真名も今が反撃する時と言わんばかりに拳銃を取り出していた。
「私達にどんな恨みが有ったのかは知らないし、知る気も無い」
「だが、コレだけは言える」
「「私達に挑んだ事が、既に愚かなんだよ」」
氷で出来た無数の剣が、無数の鉛玉が、彼等の身体を貫いて行く。なす術もなく蹂躙される男達、この光景、記憶の何処かに引っ掛かった。そう、確かアレは荒野の・・・。
【可哀そうに】
そう、言いながら笑う白銀と自分が、嫌に似ていると感じた。自分の口元に浮かんだ残酷な笑み、そして倒れた死者を見る冷たい瞳、何故、此処で黒の書の中の記憶と自分が重なるのか。深く考えようとすると頭が痛くなった。

全てが終わった頃には、帰りの汽車の中であった。死体は全て焼却処分した。空港のある街まで帰るにはこの黒煙を吐きだす時代遅れとも言えそうな汽車に乗らねばならない。

「今回の仕事は、大変でしたね」

「全く、学園長もしっかりと確認してほしいね」

「全くです」

そんなくだらない会話、しかしあんな仕事の後だと何故か異様に落ち着いた。汽車の中の販売員からコーヒーを2つ買って真名に渡す、真名は最初遠慮したが、この地方は以外とさむい、お互い薄手だ、温かいモノの誘惑に負けたのは真名であった。

「そう言えば先生、先生は私と仕事と聞いても驚きませんでしたね」

「うん？その程度で驚いていたら私はもう死んでるよ。何せ音速で走る男の肩に乗った事が有るからね」

「・・・先生、貴女本当に人間ですか？」

「分類的には化物だと思うよ」

そう言いながら彼女はその閉じた瞳の顔で静かに笑った。お互い少々血生臭い、空港についても次の便は遅いのだから、その辺りの宿にでも止まってシャワーでも浴びようかと話しながら帰り道へと向かう。

38話・依頼は・・・（後書き）

こんにちは、今日も良いお天気ですね。
えぇ、こんにちは【稗田様】

39話・ホレ薬（前書き）

なにそれこわい。

最近ドリフターズ買った、ちょっ、平野先生ソレアウトです

39話・ホレ薬

――五月蠅い――

学園に帰って来ると異様に五月蠅かった。真名も同時に首を傾げる、はて、何故こんなにもお祭り騒ぎなのであろうか。そう考えていると一人の少年の姿が眼に入った、何処か見覚えのある赤髪に特徴的な杖。しかしどう言う事だろう、その少年を見ると酷く心が疼く。

「？先生、大丈夫かい」

「あ、あぁ、何でもない。心配は無用だよ」

眼を瞑っているとは言え、心の眼で見ただけなのにこの心の疼きは何だろう。感じた事の無い感情だ、鼓動が速く、頬もやや熱い。ドクドクと言う何時もより速いペースで心臓から血液が巡っていた。

「やはり体調が優れないのでは？」

「心配はいらないって、大丈夫・・・っ！？」

胸が締め付けられる。少年の姿が見えなくなると急激に寂しさが襲いかかって来た。

「御免！真名、学園長に報告よろしくね！！」

そう言い残すと足に魔力を充填し少年の後を追った、体力がないので魔力でドーピングしながらだ。赤髪の少年も彼女の姿に何だろうと思い立ち止まる。

「あ、あの、どうかしたんですか？」

「君・・・名前は？」

「僕は新しくこの学校に来ました、ネギ・スプリングフィールドと言います」

「そ、そうか。私のは」「牡丹様発見、直ちに強制帰還」

「うわっ！？ちょっ、茶々丸？！なにするのさ！？」

ワイヤーの様なモノで拘束され、エヴァの待つ家へと強制連行される。家の中には心配そうな顔のエヴァがオロオロしていた。面白い光景だが、今はそれよりもあの少年の事が気になって仕方がない。この激情に任せて、殺してしまおうか。そんな事も考えていた。

「お、おい茶々丸。牡丹はどうしたのだ！？」

「解りませんが、うっすらと魔力反応が有ります」

「おい！牡丹！！しっかりしろ！！」

エヴァが彼女の首元を掴みガクガクと振ると彼女はエヴァの方向を見て気の抜けた返事を返した。完全に異常事態だ、こんな事は長い付き合いの内に一度も無かった。・・・いや、コイツが初めて酒を飲んだ時にもこうなったが、ソレ以来だ。

「魔力スキャン終了、どうやらホレ薬の当てられていますね」

「ホレ薬だと！？だが牡丹には魔力を無効化できる黒の古書が」

「現在では失った魔力を回復する為に吸収を行っているようです」

「それでか・・・」

彼女の魔法抵抗は殆んど黒の古書から来ているので、彼女本体の魔法免疫力はゼロに等しい、それは柘榴と言う鬼と融合した後も変わらないようだ。幸せそうな顔でポァ～としている彼女、その彼女を見ていると彼女が今現在考えているであろう相手に妙に腹が立った。

「茶々丸、その魔力の出元は解るか？」

「既に対象の撮影に成功しております」

「・・・良し、行くぞ茶々丸」

「仰せの通りに」

エヴァは既にこの学園結界の管理から外れているのでその身に宿る大きな魔力を刃の様に鋭くして茶々丸と共に外へと向かう、牡丹はまだ魔力が抜けていないのかフワフワしていた。

「・・・ハッ」

フワフワしていたと思ったら今度は鼻で笑った。一体何がしたいのであろうか。

「僕が恋？ふざけるなよ劣等が」

完全にキャラが壊れている。

「私は独り身を貫くんだ、あんな餓鬼に餓鬼にガキにがき・・・に」

また、顔が赤くなった。ボンッと言う音と共に彼女はその場に倒れ込む、それを見ていたのは一週間交代で帝国から返って来ていたテルであった。彼女は牡丹の異常差を認識するとそのメイド服の下に仕込みナイフを仕込んだ。牡丹をソファーに寝かせ、優しい笑みを浮かべる。

「安心して下さい、マスター。貴女は誰にも奪わせません。私達だけの牡丹様ですから・・・」

そう言うと、彼女も静かにドアを開けて出て行ってしまった。

――――――――

――――

――

「目標確認、マスター指示を」

「撃て」

「・・・しかし現在の時刻的にもこちらは不利かと」

何を血迷ったか、エヴァは公共の場で赤髪の少年に発砲しろと命令した、流石にソレはまずいと茶々丸は踏みとどまるが、それでもエヴァの気は収まらないらしい。

「えぇい！お前がやらないのならば私がぁ！！」

「お、おやめ下さいマスター！此処では周囲に人間が多すぎます！！」

「投げナイフなら発砲音もしませんし、私が」

「「何時からそこに居た（居たのですか）？テル（姉様）」」

飾りの少ないメイド服に身を包んだ女性、テルがその手にナイフを構えていた。お前はどこのアサシンだと言いたくなるが、ぐっと堪えよう。何せ彼女は今まで牡丹専属のメイドとして様々に自分を鍛えて来た。昔は無人島で食料を調達して来ていたし、下手をすれば彼女はこの中でも最もチートな存在なのかもしれない。

この後、タカミチが止めに入るまでこの言い争いは続いたと言う。

３９話・ホレ薬（後書き）

聖戦は、彼女達の知らない場所で幕を上げる。

４０話・狂気の幕開け（前書き）

原作ネギま、東方に成っているけど、実際中身がほとんどオリジナル化して来てるって言う。ドシリアス。残酷な表現有りです。苦手な人はバックをお願いします。

４０話・狂気の幕開け

――【新陛下・・・か、笑わせる】――

魔法世界、黒い鎧の騎士がその手に血に染まったクレイモアを振り回し首を狩っていた。その街は既に壊滅状態、正規兵も既に死に絶えた。男、女、関係なく死に絶えたその城で死神は静かに笑っていた、鉄仮面の後ろからクツクツと笑う彼女の姿はどう見ても異常者だった。
生き残ってしまった者達が城の中庭に幽閉されている。

「ハハッハハハッ！！！何が世界線か！！こうしてしまえば何処も彼処も同じではないか！！」

「良くやりましたね、騎士十字賞モノですよ」

「身に余ります、武装メイド親衛隊大隊体長、メアリー殿」

城の中から姿を現したのは見覚えのある死人と同じ青白い肌を持った一人のメイドであった。彼女の手には血濡れたスコップが握られている。

「亜人の村から攫われていた女性少女、さらには幼女までよくもまぁやったものだ。地下の牢屋を見た？」

「いえ」

「うん、アレは見ない方が良い。私達が最も嫌う光景だ」

そう言うとメアリーはスコップを投げ捨てる、此処の城の元支配者が描かれた油絵に突き刺さった。

「は、かの御方が亡くなられて何年掛ったか」

「左様でございますな」

「やっとだ、此処にやっと我らは再生を迎える事が出来る」

「えぇ、既に贄の準備は整っております。後は黒の古書だけでございます」

「結構、大いに結構だ。もうすぐ我らが同胞達も集まって来るだろう」

「愉快ですな、誰も知らぬうちから、こそこそとしていた我々が、遂に表舞台に顔を出すと言う訳ですか」

黒の騎士が鉄仮面を取る、狂気の笑みを浮かべたデュラの顔があらわに成った。

「貴女、まだ持っているのでしょう？」

「えぇ、もちろんです」

彼女は大事そうに懐から黒の布を取り出す、漆黒とも言えるその布は綺麗に折り畳まれていた。メアリーはそれを見るとニッと意味ありげな笑みを浮かべた。

「本当に貴女の忠義、大したものです」

「感謝の極み」

ソレは彼女の手によって広げられた、漆黒の大きな布、ソレは【国旗】だ。漆黒色の国旗は光すら跳ね返す事の無いように特殊な技術が使われている。

「今の堕落した都には興味がない。我々の王はやはりあの方だけなのだ」

ズル、ズル、と何かを引きずる音、その先には黒く長い髪を持つ妖怪、ウロの姿が有った。ウロは近くの椅子に座ると引きずって来た少女の死体の腕を貪り喰う。骨を砕く嫌な音が聞こえた。

「おい貴様、何をしている」

「何って、腹ごしらえに決まってんだろぉ？俺だって妖怪だ、人も喰う」

「男を食えば良いだろ、私達はそう言った光景は好まぬ」

「はっそりゃ失礼した」

ギザギザとしている歯に血をこびり付かせながら彼女は死体を喰らう。その光景を懐かしそうに見るメアリーと、その光景があまり好きではないデュラ、殺す事と喰う事では全く違う。
ウロの口調が大分違うが、こちらが彼女の本当の喋り方だ。

「亜人共の死体は殆んど犯されていたじゃないか、酷い世界だな」

キヒヒッとウロは笑った。

「男はケモノだ、故に死なねばならぬ」

「その言葉は・・・」

「そう、我らが王の言葉」

「良いね良いね最高だ！表の舞台では何も知らない人形が踊っているが、俺は好きだぜそう言うのさ！皆殺しは文化だよなぁ！！」

「・・・ふん、野蛮な者め」

「仕方ねぇさ、俺は生きる為なら同族でも赤子でも喰ったからな」

デュラとウロが邪険な雰囲気を充満させているが、その様子を楽しそうに見るメアリーは二人を止める気はないようだ。中庭に集められた人間を見下し、魔法使い達が魔法を使えないように結界を張っている。

「しかし、死霊騎士団も王と命を共にしております、彼女達の【再生】には少し時間が掛るのでは・・・？」

「カッそんな事あるかよ」

ウロが死体から腕を引き千切った。

「特殊訓練を受け、武装メイド部隊の次に戦闘に長けていた奴らだぞ？心配は無用だろうが」

「そうですね、貴女は首なしの部隊出身ですからそこまでは知りませんか」

「は、はぁ・・・」

「機密訓練と言うモノが有りましてね。育成プランDと言うモノを受けている死者だけの部隊、それが死霊騎士団なのですよ」

今の国では廃止されているが、絶対的な強さを誇る対転生者用の部隊であった死霊騎士団。怨みの強い女性の死体が選ばれ、その中でも処女だけが正式に部隊に加えられる。剣等の特別な仕込みのある改造された武器を手に持ち、王の為に自らの命すらもゴミの様に扱う最強部隊、災厄とも言われ恐れられた存在。

「牡丹様には悪いが、我らはもう我慢の限界だ。あんなに平和的な世界、私達には似合わぬ」

「男は殺され、女は犯される？そんな世界は御免だね」

キヒッ

「死体だけに成っても良い、完全なる王の支配の元、王を神と崇めて生活するあの懐かしの都を」

「此処に再生させよう、この世界の原住民の事等、知った事ではない」

そう言うとメアリーは自らの継ぎ接ぎだらけの手を見る、主と呼び生涯この身体が動く限り尽くそうと思っていた者が消えてから古傷は一向に消えない身体に成っているのだ。これが祝福を失うと言う

事だろう。

「近い目標としては死霊騎士団の発見と再生、近隣の亜人達の救出、魔法世界からの探知妨害と完全なる世界からの妨害阻止」

「是非ともクサナギとイザナギの姉妹が欲しい所ですな」

「駄目だ、あいつ等はマザーシステムに記憶を書きかえられている、役には立たんさ」

「後はどうやって牡丹様から黒の古書を拝借するか、と言う所」

「その為のウロ、だろう」

「キヒヒヒッ任せろよ。俺の似姿は体温から体臭まで表現できる」

「「「全ては完全なる王の為に、我らが王都の復興の為に」」」

知らぬ所で、彼女達の狂気は幕を上げていた。

４０話・狂気の幕開け（後書き）

【稗田様】、何故何時もその綿帽子を冠っているのですか？
それは、内緒、だよ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8160w/

彼女は人を喰らう

2011年10月26日11時15分発行